

---

# 義妹ハーレムを作った少年

蛭夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

義妹ハーレムを作った少年

### 【Nコード】

N2060U

### 【作者名】

蛍夜

### 【あらすじ】

神に選ばれて死んでしまった少年。彼はゼロの使い魔の世界に転生した。彼は個性的な義妹たちと共に、明るく楽しい生活を送っていく。ヤンデレ気味の義妹、天然ロリツ子吸血鬼の義妹、妖艶な悪魔の義妹。彼の運命は動き出す、個性的すぎるハーレムを目指して！

タイトル変更しました（旧、守りたい者の為だけに）

## 第0魔（前書き）

ゼロ魔の二次創作です。更新頻度はわかりませんが、楽しんで貰えれば幸いです

## 第0魔

意味わかんない……

「なんで！説明してるでしょ！」

今僕の前で騒いでいるのは自称神の女の子

僕はなるべく人に優しくあろうと心がけているが

今回は本当に意味わかんない

「だからーあなたは特別に選ばれた人だから転生させて上げるって言ってるの」

偉そうに意味不明なことをのたまうこの少女は病院に連れてった方がいいのだろうか

「あなたは死んだの！だから転生するの！わかった！」

わかんないよ。転生そもそも転生ってなんだよ、二次創作とかでよく見るあれか？あんなの現実起こりえるのか？

「だからー、今起きてるでしょ！あなたは大人しく能力貰ってゼロの使い魔の世界に転生すればいいの！」

まあいいや、実際今起きてるんだし。認めるしかないか

「急に素直になったわね」

頭が冷えたんだよ。よくよく考えると僕死んだし。事故で

「やっと話を通じる様になったわね。じゃあもう一回言っわよ。あなたは神に特別に選ばれたからゼロの使い魔に転生する。そのさいその世界であっさり死なない様に能力を与える。いいわね」

よくわかった。世界はもう決まってるみたいだし。まあ原作知識あるからどうにかなるでしょ。能力だよね、えーと、魔法と体術の実力の青天井ってダメかな？

「別にいいわよ。でも青天井だと努力しないと力が付かないわよ」  
努力しないで力だけ貰ってもなんか嫌だし。あと才能は親からの遺伝通りで良いよ

「え！？それじゃあ才能が低かったら生涯かけてやっとスクウェアなんて事になるかもしれないわよ。いいの？」

いいよ。そうなったらそれが僕の限界って事だし

「変わった子ね。普通最強になりたいとか思っんじゃ無いの？」

周りはそうでも僕は違っってことでしょ。用件はこれだけ？

「ちょっと待って！能力がこれだけじゃ私が怒られちゃうわ。あなたに死なれても困るし」

じゃあ後何個位貰えば良いの？

「そうね……力にもよるけど一つか二つね」

じゃあ特別な目をちょうだい。精霊の動きとかがわかるやつ

「それだけじゃ弱いわね……他にもあなたの目にはちょっとした能力を付けておくわ」

わかった。これでいい？

「あと一つね、」

面倒だなあ。じゃあ、魔法の実力がスクウェアを超えたら体のリミッターを外せるで

「なんか適当に考えてない？スクウェアにならないと使えないし……。まあいいわ。それだと体が壊れるからその状態になった時は自己回復能力が上がる様にしておくわ」

はいはい。もういいでしょ

「あなた神にたいしてその態度はどうなの？まったく……あなたの身分は貴族か平民かわからないから。それでもいいわね」

いいですよ、どうでも

「やる気無いわねえ。なんでこんな子が選ばれたんだか……じゃあ転生させるから」

え？どうやって？

「こつやって」

足下に穴が開いた  
つまり僕落ちる

「ありがちなあ……」

そう呟きながら落ちていった

## 第1魔

現在僕は五歳。

ゼロの使い魔の世界に転生しました。

両親はそれなりに歴史のあるトリスティン貴族。

経営は割と得意みたいで黒字を出している。

正直僕としてはこの世界には来たくなかった。色々大変だしね。ちなみに小さい頃の記憶はあるけど思い出したくない。

あれは何というプレイなんだろうか。

とにかく思い出したくない。

父上と母上は優しい人で僕を大切にしてくれる。

しかし父上は平民を差別している。

まあ、この国ではそれが普通なのかもしれないけど、僕は差別をやめて欲しかった。

母上は偏見が無い。でも父上に逆らうことは出来ないみたいだ。

そして最近やっと杖との契約をさせて貰えた。

僕には特別な『目』があり、精霊の動きを見ることが出来る。

そのおかげかすんなり杖との契約はすんだ。

その時のお母さんの喜びようと言ったら、凄かった

そして今、僕は父上にコモンマジックを教えて貰っている。

「これからライトを教える。いいかケイト」

「はい、父上」

父上は土のスクウェアで、母上は水のスクウェアだ。

ちなみに僕の名前は、ケイト・ド・アーリア。

アーリア家の跡取り息子らしい。

来てしまったからにはしょうが無いと言うことで、

僕は原作に関わって行きたいと思う。



戦争とかは恐いが、この世界にきてしまった時点で戦争に関わりないのは無理。

だからなるべく楽しい方に行こうと思う。

「まずは私が見本を見せる。見ている」

すると父上の杖の先が光った。

凄いなあ。これが魔法かあ。

日本人ならば一度は憧れるだろう。

僕だって例外では無い。

「頭の中で杖の先から光が出るのをイメージするんだ」

「わかりました」

そして「ライト！」と叫ぶ。

すると杖の先から光が出た。

あの世界にいた人間ならばこれくらいのイメージは出来て当然だろう。

アニメやマンガなど、参考になる物が溢れかえっていたのだから。

「流石は私の息子だな。まさか一回で成功させるとはな」

「ありがとうございます」

父上は冷静に褒めてくれるが口元がにやけている。

内心では凄く嬉しいんだろう。

「今日はこちらまでしておく予定だったが、レビテーションもやってみよう」

「わかりました、父上」

レビテーションは物を浮かせる魔法だったはず。  
なら念力なんかのイメージに近いかな？

「見ている、レビテーション」

すると小石が浮かび上がる

僕は冷静に魔法を見ているつもりだったが、後で父上から話を聞くと目が輝いてたらしい。

し、仕方無いよね！あこがれの魔法を見てるんだから！

「やってみる」

「はい。レビテーション！」

すると小石が５？ほど浮かんで落ちた。

イメージがしっかりしていても、精神力が低いとダメみたいだ。

僕は前世との年と合わせても２０前半なのだが、やっぱり鍛えないと精神力は上がらないみたいだ。

「おおっ！レビテーションも一回で成功させたか！」

「この子は天才かもしれないね、あなた」

いつの間にか来ていた母上が僕をべた褒めしてくれる。

「そんな事はありません。誰でもではありませんが、出来る人には出来る事です」

「謙遜しなくてもいいのに。ねえ、あなた」

「そうだな、グレイシャの言う通りだ。お前には才能があるだろう」

父上も僕を褒めてくれた。

ちなみに母上の名前はグレイシャ・ド・アーリア。

父上はグロウス・ド・アーリア。

「今日はここまでだ。精神力を使いすぎるのは危険だからな」  
「わかりました」

それから数日間コモンマジックを練習していたが、全で一発で使えるので今やっていることは魔法の復習だ。  
ちなみに、僕は五歳になってから毎日軽い走り込みをしている。  
この先魔法だけでは生き残れない事もあるだろうと思い始めたのだ。  
貴族にしては珍しく父上も剣術などをやるので、成長したら僕も習うつもりだ。

「はあ、はあ、はあ」

今日も走り込みをしていると父上に声をかけられた。

「何をしているんだ、ケイト」

「はい。この先魔法だけでは超えられない壁もあると思い、剣術やナイフの扱いを習おうと考えました。今走っているのはその前の体力作りです」

「そうか、お前も剣術を習うか。ならば来年から参加させてやろう」  
「ありがとうございます、父上」

これで体術方面も鍛える事が出来るようになった。  
一応上限は無くして貰っているが鍛えなければ意味が無い。  
ちなみに、フライを使った時が一番ワクワクした。  
空を飛ぶことも人間ならば憧れると思う。  
そして今日から系統魔法を習う事になった

「ではまず、ケイトにどの才能があるのかを調べるぞ」

「はい」

上限は無いけど才能はわからないし、どの系統かもまだわからない

「まずは土の系統があるかを調べる。私が見本で土系統の基本アースハンドを使う、お前はそれをみてやってみろ」

「わかりました」

「うむ、アースハンド」

すると、地面から土の手が生えてきた。

流石に見慣れてきたので、毎回驚く事は無くなった。

「ケイト、やってみろ」

「はい。アースハンド！」

地面が手の形に少し盛り上がった。

土の系統はそれなりのようだ。

「うむ、では次は水系統だ」

そっけなく続けようとしているが頬が緩んでいる。

自分と同じ系統が現れて嬉しいのだろう。

わかりやすい父上だ

「コンゼンテーション」

すると水の球が空中に出来上がる。

しかし得意とする系統では無いためか、少し小さかった。

「ケイト、やってみろ」

「はい。コンゼンテーション！」

こちらはなんとびっくり父上よりも大きい水の球が出来た。この時点で僕は母上の血を濃く継いでいるのがわかった。見学している母上も嬉しそうに笑っている。

「うむ、では次は火の系統だ。ファイアーボール」

すると火の玉が空中に出来上がる。  
やはりこちらでも少し小さかった。

「ケイト、やってみろ」

「はい。ファイアーボール！」

こちらは少し火が発生したがすぐに消えてしまった。  
だがここまでで三つの系統を使える事がわかった。  
まあ、父上は土以外の系統も全部使えるんだけどね。  
その代わり土以外は全部ドットクラスだけだ。

「では最後に風の系統を調べるぞ。ろうそくを持ってこい」  
「かしこまりました」

父上に命令されてメイドさんがろうそくを2本持ってくる。

「うむ、ウインド」

するとろうそくの火が消えた。

次にもう1本のろうそくが僕の前に出される。

「ケイト、やってみろ」

「はい。ウィンド！」

するとろうそくの火が消えた。

どうやら僕は父上のように全ての系統が使えるらしい。

「うむ。ケイト、お前は水と土の才能が高いな。風と火も使えるよ  
うだが、土と水だけを伸ばした方がいいかもしれないな」

「わかりました」

口ではわかりましたなんて言ってるが、実際は全て使える様になる  
つもり。

だってせっかく使えるんだから全部使いたいし。

「では今日はもう休んでいいぞ」

「はい。わかりました」

そしてこの日から魔法を教える先生に土と水の魔法を教えて貰い、  
風と火は最初に習ったドットスペルを何度も練習するようになった。

## 第1魔（後書き）

呼んで頂きありがとうございます

いずれ主人公の名前は変わるので今は覚えて貰わなくても結構です

## 第2魔（前書き）

活動停止とか言ったくせに書いてしまいました。  
テスト……………まあなんとかなるっしょ！  
と、開き直ってます



## 第2魔

現在僕は6歳になっている。

今は父上の管理している訓練所で戦闘訓練を受けている。

普段から使っている得物は誕生日に父上から貰ったナイフ。

母上は服や玩具を買ってくれるんだけど、精神年齢が二十歳を過ぎた僕としてはナイフとかの方が嬉しい。

当然母上からのプレゼントも大事にしてるけどね！

「若様は小柄ですし、筋肉も付けすぎると動きが鈍るので、スピードで相手を攪乱して隙をナイフで素早く攻める。という形で伸ばしてみましよう」

「わかりました」

この日から僕はランニングの量を増やすことにした。

スピードで相手を攪乱するなら、速さだけで無く体力も必要になるからだ。

当然魔法の練習もしている。

喜ばしい事に水がラインクラスになった。

母上はやっぱりこの子は天才よ！とか騒ぎ出したのは言うまでもない。

そうして日々精進している内に、良い感じの体になった

ちなみにナイフが無い時なども想定して、小ぶりの剣や、素手での鍛錬も一応している。

そんなある日……

「ケイト、ヴァリエール家からルイズ嬢の誕生パーティーの招待状が来た。一週間後だから準備しておけ」

「わかりました」

僕ってわかりました、とか、はい、しか言わないよね。  
まあ歴史を重んじる親の前で軽い言葉なんて使ったら何言われるかわかんないしね。

そんな事よりも誕生パーティーだって？

しかもルイズ嬢って言ったよね……

いよっしゃー！……！！。

原作キャラにこんなに早く会うことになるなんて想像してなかった！  
しかし関わる時期は今じゃないかな。

それに原作介入はしたいけど、あんまりルイズとは関わりたくないなあ。

ヴァリエール家とも関わると面倒そうだし……

とりあえず今回は大人しくしていよう。

それから数日……

「準備は出来たか？ ケイト。出発するぞ」

「はい。大丈夫です」

ヴァリエール家に向けて馬車が出発した。

ヴァリエール家までは片道四時間位かかる。

正直パーティーに行くくらいだったなら鍛錬などをしたかったが仕方無い。

途中、母上に何をプレゼントするのか聞かれた。

「僕がプレゼントするのは自分で調合した香水です」

そう、現代日本にいたころの知識をいかしこの世界の物と比べると少しいい香水を調合したのだ。

「まあ、そんなことも出来るようになっていたの」

母上に帰ったら自分にも作ってねとお願いされた。

それ位なら時間もあまりかからないしいいかな？と思い、了承した。そんな話をしていてもなかなか四時間は長いので、魔法のイメージトレーニングをしてみることにした。

魔法はイメージが大切で、これを鍛えておくのも無駄では無いだろうと考えたからだ。

しかし、イメトレをしているといつの間にかヴァリエール家に着いていた。

集中し過ぎて気づかなかったみたいだ。

「ケイト、着いたわよ」

「……ハッ！すみません気付きませんでした」

それからヴァリエール家へと入っていく。

遅刻はしなかったがもう結構集まっている。

先に来ていた貴族の子供達は、我先にとルイズに話かけていたわざわざプレゼントを渡しに行くのも面倒だったので、プレゼントが積まれているテーブルに置いておいた。

その後父上の元に戻ろうと思ったが、他の貴族と喋っていた。

それじゃあ母上の所に、と思ったら母上もお話をしていた。

これがぼつちかorz

じゃっかんへこみながら庭に出る。

中はなんだか居づらかった。

ボーツと池を見ていると、桃色の髪が視界の端に入った。

僕は咄嗟に近くの茂みに隠れた。

桃色の髪と言うことはルイズかカトレア様であるはず。

ヴァリエール家にはなるべく関わりたくないと言う思いから必死に息を潜めた。

するとさっきまで僕がいた場所に優しい雰囲気的女性が立っていた

あれはルイズでは無くカトレア様だな……

僕は早く立ち去ってくれ、と祈りながらじっとしていた  
しかし神は僕に味方しなかった。

なんと僕の足下に黒光するGがいた。

何を隠そう僕はGが大嫌いだ。

そんな大嫌いなGが今まさに僕に接触しようとしてきていた。

「  
x      | | | | ! !  
」

咄嗟に茂みから飛び出す。

そして固まる僕。

それを見つめるカトレア嬢様

.....

「こんにちわ。私はケイト・ド・アーリアと申します。今日は良い  
天気ですね。聞いた話ではカトレア様はお体が悪いのでしょうか？こ  
んな所で無駄話をするのはよくありませんね。なので僕はもう行き  
ます。それではお体に気を付けて」

そう早口にまくし立て全力疾走でその場を後にする。

変なやつだと思われただろうけど、下手に関わって好感度を上げる  
よりましだ。

仕方無かった！そう、あれが最善の策だったんだ！

そして父上達と合流する。

その後は何も無くアーリア家まで帰った。

次の日に約束していた香水を作り母上に渡すとても喜んでくれた。  
そしてその翌日、僕はいつものように朝起きると軽いランニングを  
していた。

しかしいつもと違いメイドさん達の様子が妙に慌ただしかった。  
ランニングを終え、近くにいたメイドさんに聞いてみた。

「ねえ、なんでこんなに慌ただしくしてるの？」

メイドさん達には敬語は使わない。

使っている所を父上に見られたら、そのメイドさんがクビになってしまうからだ。

「はい。実はウィーデ様がいらっしやるんです」

「そ、そうなんだ。もういいよ」

冷静を装うがこれは大変な事だ。

ウィーデ様と言うのは、母上の姉上だ。

つまり僕にとつては伯母さんに当たる人だ。

さて、何故伯母様が来るのがまずいかと言うと、伯母様は以前家に来たときにこう言ったのだ。

「次に来たときにケイトが魔法を使えるようになっていれば、私が稽古を付けましょう」

これだけならば優しい伯母様だ。

しかしこの伯母様の情報には二つ付け足さなければならぬ事がある。

一つは、あの烈風カリンに次ぐ実力者で暴風のウィーデと恐れられていること。

もう一つは、訓練に容赦が無いという事だ。

以前父上が稽古を付けて貰っていたのを見たが、酷かった。

たしかに、あれをやられれば腕は上がるだろうが、普通は遠慮したいと思うところである。

そしてその恐怖の権化、ウィーデ伯母様がやって来た。

「久しぶりですね、 그레이シャ、 グロウス殿、 ケイト」

「お久しぶりですね、 姉さん」

「お久しぶりです、 ウィーデ義理姉様」

「お久しぶりです、 伯母様」

この人に逆らったら死ぬ！と本能が伝えている

しばらくの間は大人しくしていよう……

父上は伯母様を客間へお連れした

客間に着き全員が座ると伯母様が喋り出す

「来て早々ですが、 ケイトはどれくらい魔法を使えるのですか？」

僕が魔法を使えるようになったのはすでに知らせてあった。

しかしその時か時間もたっているの、 今どれほどの力量があるのかを知りたいんだろう。

「水のラインになりました」

「そうですか、 では稽古を始めますよ」

「……わかりました」

この時点で暫くは体を鍛えるのは無理かな、 なんて考えていた庭に移動し杖を構える伯母様

「魔法を使ってもいいです。 私の攻撃を全て避けなさい！」

「は、 はい！」

どんな攻撃が来るのかを想定し風の動きを読んでいると、 風の鞭が2本迫ってきた

「フツ、 ホツ、 ハツ」

それをギリギリでかわし続ける。

「体を鍛えてるようですね。ではこれを避けてみなさい！」

風の鞭が4本になって迫ってくる

「うわっ、くっ、いつっ」

これはギリギリ避けられていない。  
所々かすり始めている。

ナイフでいなししているためもろに当たる事は無いが結構危ない。  
暫くはこれを避けられるように練習かな？と思い、魔法を使おうと  
すると……

「それではこれも避けなさい！」

伯母様はそう叫び更に4本の風の鞭が飛んでくる  
それを見ながら、嘘だろ…… と思い足が止まった

「グフッ！」

鞭に弾かれゴロゴロと地面を転がる。

周りの人が駆けつけて何かを言っている。

何を言っているのか聞き取れず、僕は、

今日まだ鍛錬してなかったのになあ。

と思いながらまどろみの渦へと落ちていった

## 第2魔（後書き）

いくら青天井と言っても教える人がちゃんと教えなければ強くなりません。

そのためのウィーデ伯母様です。

ケイトの戦力アップにこういう人は欠かせませんからね



### 第3魔

僕は今書庫で本を読んでいる。

五歳のころから字を少しずつ覚えていたおかげか、割とすらすら読める。

ちなみに、僕が伯母様に吹っ飛ばされた日から三日がたっている。

あの後すぐにベッドに寝かされて水の秘薬を使い治療された。

伯母様も手加減していたんだと思う。

精々骨にひびが入るくらいの怪我だったからだ。

治療をして貰ってすぐに治ったし、僕としてはまた稽古に戻りたかったんだけど、しばらくは安静にしていなさいと言われたので仕方無く本を読んでいる。

そんな中で興味をそそられたのが「始祖ブリミルの使い魔」という本だった。

簡単に言えばガンダールヴやヴィンダールヴなどについて少し書かれている本だった。

内容は僕が知っている事と大差ないのでとくに気にしなかったが、その本に書かれているもう一つの内容に大変興味をそそられた。

その内容とは「神の影」というものだった。

なんでも大昔ブリミルがまだ生きていた頃、ブリミルと共に戦っていたという存在らしい。

その者は虚無こそ使えなかったが、系統の魔法ではブリミルを凌駕し全ての系統を使えたという。

詠唱と杖を必要とせず、幾つもの魔法を同時に操る。

そして過去たった一人だけスクウェアを超えた存在。

しかしブリミルの偉大さの前にその存在はかすみ、ほとんど記録が残っていないらしい。

故に神の影。

そんな神の影にも主を支える優秀な使い魔がいたらしい。  
名前と使い魔のルーンだけが記されていた。

神影<sup>しんえい</sup>の左手、スヴィーウル

神影の右手、アルスィオーヴ

神影の頭脳、ミヨズヴィトニル

こんな感じの内容だった。

これ以上は何も書いていなかった。

けどこんなもの原作で見たことがないんだよなあ。

僕が介入したせいで少し世界が変わったとか？

まあどちらにせよこの神の影とその使い魔達も用心しといった方がいいかな？

そしてこの他にも魔法に関する本をいくつか読んだ。

読んだのは基本的に治療に関する水の魔法の本。

水魔法での治癒は自然回復力を上げること、そしてその補助だと僕

は思っている。

その考えはあながち間違いでもなく、おおむね正解だった。治療をする際は、相手の傷が治るイメージや、健康な自分をイメージして治療をするらしい。

ただそういったイメージは難しいようで、この世界では医療や治療に関する事はあまり期待出来ない。

日本ではそう言ったドラマなどがよくやっていたり、知識なども教えられたので、精神力次第では僕は

この世界でトップクラスの治癒力を持つことが可能ということだ。

そんな可能性を考えて僕は治療系の魔法の腕も伸ばそうと思っている。

今は救えない人でも、僕なら救えるかもしれないという可能性があるからだ。

やっぱり救える人は救いたい。

全ての人を救おうなんておこがましいと思うけど、自分の手が届くならその人は救いたいと思う。

なんて言うのは建前で、実際問題自分が少しでも生き残る確率を上げるってというのが本音だったりする。

そりゃ怪我している人がいたら治すけど、治癒魔法を覚えるのはあくまで自分の為だ。

こんな世界なんだから対策は大いに超したことはないだろう。

翌日、そろそろいいだろうということで伯母様との稽古が再会された。

「ケイト、今度は私に一撃入れてみなさい。勿論魔法の使用は許可します。私も魔法を使いますから。」

「わかりました。では、行きます！メイクゴーレム！」

手始めに鉄のゴーレムを三体作り伯母様を囲ませる。  
そして同時に伯母様に斬りかからせる。

「こんなものですか？」

しかしあっさり破壊されてしまう。

まあこれは計算の内だ。

この程度であの伯母様に一撃入れられるなんて思っていない。  
僕はゴーレムが破壊されると間髪入れず水の魔法を使う。

「ウォーターウィップ！」

水の鞭を操作し伯母様に襲いかからせる。

「ウインドカッター！」

水の鞭は鋭い風に切り刻まれ地面に落ちそうになる。  
まだだ、まだ終わらんよ。

「スチーム！」

落ちる寸前の水を一瞬で蒸発させて視界を遮る。  
そこへ走り込む。

「甘い！」

伯母様は走り込んできた影に拳を打ち込む。  
きっとそれが僕だと思ったのだろう。  
しかしそれはゴーレム。

そして僕は……

「貰ったー！」

伯母様の後ろからナイフを構え突っ込んだ。

体勢的に避けられないであろう。

故にナイフは逆手で持っている。

これで決まったと思い、思い切り突き進む。

しかし、伯母様はその状態から風で自分を少し飛ばして回避した。

あえて言おう、ありえねー

正直かなりまずい。

精神力も残ってないし、もう戦略も無い。

「今のはなかなかよかったですよ」

「ありがとうございます……す……」

そしてまたしても意識を落とした。

今回は精神力を使い果たすっていう自業自得だけだね。

僕が目を覚ますと伯母様が、

「今日の稽古はここまでです」

と言ってきた。

たしか稽古を始めたのは朝からで、今起きたのが昼過ぎだから……  
割と早く起きたんだなあ。

精神力は使い果たしちゃったし、今日は戦闘訓練でもつけようかなあ。

などと考えて訓練場に行こうとしていると……

「ケイト、どこへいくのですか？」

「はい、今日はもう魔法が使えないので、戦闘訓練を受けに訓練場に行こうと思っています」

「そういえばケイトは体術の訓練を受けているらしいですね」

そう伯母様が来た日は速攻でぶちのめされたため訓練場にはいつてないし、その翌日からもしばらくは大人しくと言われて訓練場に行っていないかった。

そして今日は訓練場に行く前にぶっ倒れたので、伯母様は僕が訓練をしている所を見たことが無いのだ。

「いいいでしょう。では私が戦闘訓練の稽古を付けて上げましょう」  
「……はい。ありがとうございます」

強くなれるからいいんだけどね。  
なんていうか、もやもやするよ。  
そしてまた庭へ移動した。

「さあ、かかってきなさいケイト」  
「わかりました。行きます！」

お互いに木の剣を持っている。

僕はナイフの方が得意だが仕方無い。

伯母様の隙を伺いながら伯母様の攻撃を受ける。

伯母様はたまに隙をみせるが、あれはフェイントだろう。

剣の先生からも、腕の立つ相手はわざと隙をみせてフェイントをかける、と言われていた。

しかしこのままでは絶対に勝てないので、罠だとわかっていてもその隙を突くことにした。

伯母様が再度隙を見せるのを待つ……

ここだ！

「ハアッ！」

カンッ！

隙を突いたつもりだったが、伯母様に防がれて出来た僕の隙を逆に突かれて負けた。

「私がフェイントをかけていたことがわかっていたようですね。それでもこのままでは勝てないと考えあえて隙を突いたのはいいことです。ケイトが私よりも強ければ罠を逆に利用するなどの事も成功していたでしょう。純粹な力の差です。悪くなかったですよ」

「ありがとうございます」

やっぱり伯母様はこっちの考えがわかっていたようだ。

それからしばらく伯母様と体術の修行をした。

そして日も暮れた頃、

「ケイトは筋がいいですね。明日からも私が鍛えて上げましょう」

「ありがとうございます！」

こうしてその日から僕は訓練場で基礎を学び、伯母様に細かい技や体の使い方を教えて貰うようになった。

ちなみに伯母様の厳しい訓練のお陰か、土がラインクラスになった。



### 第3魔（後書き）

伏線を張らせてもらいました。

ですがこの伏線が回収できるのはもう少し後からなので、今は忘れても構いません。

ケイトも地道に強くなっていきます。

ちなみに神影の左手や右手の名前はガンダールヴやヴィンダールヴと同じ神話のものです。

## 第4魔（前書き）

熱い……熱すぎる……  
最高気温32 度  
です  
溶けます

## 第4魔

最近僕は7歳になった。

伯母様はあの日からずっとアーリア家に滞在していて、毎日僕に稽古を付けてくれている。

伯母様のお陰か、そこらの傭兵なんかには体術面で負けることは無くなった。

まあ、体格や力の問題で押されることもあるんだけど……

剣やナイフの他にも、レイピアや槍なんかも結構扱えるようになった。

そんな中でも一番のお気に入りは鎌だ。

形状を思い出し、振りやすく、殺傷能力の高い鎌を錬金した。

それが思いの外使いやすく、気に入った。

基本的にはナイフと投げナイフでたたかうけどね。

ついでに水がトライアングルクラスになった。

これは凄く嬉しかった。

これ位のレベルになれば考えているオリジナルスperlを使えないからだ。

まだ試していないけど、治癒などの威力は上がった。

そして現在、僕はヴァリエール家に向かっている。

用事は去年と同じくルイズの誕生パーティー。

去年僕が上げた香水を気に入ったらしく、是非また来てくれと言われた。

僕としてはヴァリエール家にはもう関わりたくなかったが、今までお利口だった子供が急に嫌がるのも変だろうと思いつぶしつぶ了承した。

ちなみに今年もプレゼントはオリジナル香水だ。

そしてヴァリエール家に着いた。

招待状を受付に渡し、中へ入っていく。

今回も遅い方だったみたいで、すでにルイズはガキ共に囲まれていた。

「ミス、ルイズ、僕と食事をしないかい？」

「ミス、ルイズは可愛いよね。私とお友達になってくれないかしら？」

「ミス、ルイズは魔法が苦手なそうだね。僕と練習しないかい？」

有力貴族に取り入ろうとする下心が丸見えの連中だった。

やっぱり僕はこういう空気は好きになれない。

用意していたプレゼントを、プレゼントが山積みになっているテーブルにのせる。

これでミッシェンコンプリートだ。

しかしここで去年の僕は過ちを犯した。

そう、庭に出てカトレア様に会ってしまった事だ。

しかし今年の僕はそんな過ちは繰り返さない！

そう考え、料理が盛りつけてあるテーブルに近づく。

そして自分の更に料理をよそい、黙々と食べ始める。

そう！カトレア様は病弱だからここには来ないはず！

故にここで大人しく料理を食べていればエンカウント率はゼロに等しい！

その代わりルイズと同じ部屋にいるというリスクがあるが、その辺は問題ない！

ルイズは考えが丸見えのガキ共に言い寄られているから大人しくしている子にまで気は向かないはず！

そんなことを考えながら料理を食べる。

実は僕は食えるという行為が結構好きだ。

地球にいた頃の過度な肥満とかになるほどじゃないけど、おいしい物を食べて腹が満たされるというのは気持ちが良いことだ。

実際今は食べた分に見合った運動をしているので、太ったりはして  
いない。

余裕が出てきたら地球の料理なんかを作れるようにしようかな？

この世界の料理はもうたいてい作れる。

食べる喜びを知ると作る喜びにも気づくんだよねえ。

そんな風に幸せいっぱい顔で料理を食べていると、誰かに声をかけられた。

「こんにちわ、ミスタ、ケイト」

「！こんにちわ、カトレア様」

そう、カトレア様だった。

しかも向こうはこちらを覚えていた。

やべえ……本気でやばい。

「何かご用でしょうか？」

「いいえ、あなたを見つけたから話しかけたのよ」

「そ、そうですね。それは嬉しいですね」

おいしい  
——！！！！

何でだよ!!!

完璧に覚えられてるよ!!!

仕方無い、去年と似た方法をとるか……

「ところで、カトレア様はお体が悪いのですよね？休んだ方が良い  
ではありませんか？」

この場で全力疾走をして逃げるのはあまりにも不自然だ。  
だから今回は自分から帰って貰う。

「去年も同じ事を言っていましたよ。お優しいんですね。少しくら  
いなら大丈夫です」

クッ！やっぱりあの程度じゃダメか……  
どうするどうすればいいんだ！

（仲良くなれば？）

「!？」

頭の中に声が響いた。

慌ててあたりを見渡すが誰もいない。

あのロリッ子神の仕業だな……

だが僕はロリッ子のいいなりになる気は無い！

「どうかしたんですか？ケイト」

「い、いえ……ってケイトお!？」

「はい、ケイト」

「え、ええと僕お手洗いに行くので、それでは!」

またしても全力疾走で逃げる僕。

周りが僕を見ているが今はそれどころじゃない！

これ以上カトレア様に関わるのはまずい……

仮に僕の信用を落としたとしてもこれからは関わらないようにしよう。

そして僕はパーティーが終わる直前までトイレにこもっていた。

帰り道母上に今日はどうだった？と訪ねられた。

「疲れました。でも料理はおいしかったです」

正直な感想を言っておいた。

それを聞いて満足したのか母上はニコニコしながら景色に視線を移した。

そんなパーティーから数日後、僕は父上に呼び出されていた。

何か用かな？と思いつつ、ノックして扉を開け、中に入る。

「ケイト、お前は学問が優秀だと聞いている。しかも算術が最も得意なそうだな」

「はい」

それもそのはずだった。

この世界の算術なんて小学生レベル。

前世では数学が最も得意だった僕にしてみればこの位朝飯前だった。まあそういつたことが関わって来るのは領地経営とかそういう話だろう。

「そこでお前には領地経営の手伝いをして貰いたい」

「わかりました。どういった手伝いでしょうか？」

まさか7歳児に村を一つ任せるとかはしないだろう……

しないよね？

「そう心配そうな顔をしなくてもいい。税や金の回りの計算を手伝え」

「わかりました」

簡単そうな事で安心した。

それに学があることは悪い事じゃ無い。

学べる内から学んだ方がいいに決まっている。

父上もそう考えて僕に領地経営の手伝いをさせるのだろう。

「ではもう下がっていいぞ」

「はい。失礼しました」

そう言っただけをしめる。

今日はもうランニングや稽古は済ませてある。

なにをやるのかな

そうだ！久しぶりに鎌を使った全力攻撃の練習をしよう！

そして僕は森へ走った。

森に着いてからどういった攻撃をするか悩んでいた。

僕は基本的には鎌は使わない。

何故なら武器に向いていないから。

本来武器としての道具ではないため仕方無いが、大型にすれば刃の部分も大きくなり当てやすいと考えた。

しかしこれだと攻撃の動作一つ一つが遅くなる上に、重くて振り回せない可能性も出てくる。

それに隙が大きい。



こういった点を考慮すると、鎌を通常の武器として戦うのは難しい。戦いように作られた鎖鎌っていうのもあるけど、これはあんまり見栄えが良くないような気がしたので却下。そして行き着いた結論がここぞという場面で使うということだ。

人間などを相手取る時はナイフでも充分に戦えるしとどめもさせるが、亜人などが相手だとそうも行かない。

例えばオーク鬼なんかは、魔法とナイフ両方を使えば瞬殺出来るだろうが、ナイフだけだと威力的な問題で難しい。無理では無いが、一体一体にそんな時間はかけたくない。

そこで相手が弱った時なんかには鎌でとどめをさす。全身の体重をかけて思いっきり振り下ろせば、たいていの物はぶつた切れるだろう。

当然その攻撃方法では大きな隙が出来る。だからここぞという時にだけ使うのだ。

なんて事を考えながら、鎌に体重をかけて大振りをしていたら、

「グオオオオオー！！！！」

オーク鬼が来た。

なんでこんな所にオーク鬼がいるんだろう？

しかも一匹？

違うオーク鬼の群れにでも追い出されたとかかな？

どちらにせよここじゃあ助けは来ないし、自分でやるしか無いよね。

「ちょうどオリジナルスペルの練習もしたかったんだ」

そう言ってオーク鬼に向けて杖を構える。

水水土のオリジナルスペル！

「ウォーターカッター！！！」

ウォーターカッターとは水に少量の研磨剤を混ぜ高圧水流として発射し相手を切断する魔法だ。

最初は水だけで良いかな？と思いやってみた。

水だけでも十分な切断力を持っていることはわかったのだが、前世の知識をいかし研磨剤を錬金して、水に混ぜて発射した方が切断力が上がることがわかったので、それを使うようになった。

「グオオオオオーーーー！！！！！」

やっぱりと言うか何と言うか、オーク鬼は真つ二つになり断末魔を上げた。

真つ二つになったオーク鬼はグロテスクで見ていたくなかったので、ファイアーボールを当てまくって火葬して上げた。

その時に無我夢中でファイアーボールを連発していたせいか、火のラインになった。

そしてオーク鬼が燃え尽きたのを確認すると、手を合わせ、目をつむり、せめて安らかに眠れますようにと祈った。

その後僕は急いでアーリア家に戻り、父上に事のいきさつを説明した。

父上には一人で森に行くなど何かあったらどうする！と叱られたが、伯母様と母上は褒めてくれた。

母上は良く無事で帰ってきた、と少し目が潤んでいた。

母上に心配かけるのはなるべくやめようと思った。

伯母様はよくやったと言ってくれた。

こちらは純粹に嬉しそうだった。

父上はオーク鬼がなぜ一匹で人の多い所まで来ていたのかを調べていた。

普通人が多いところには一匹で来る筈がない。

いくら人間よりも強いとはいえ、多勢に無勢でやられてしまうのはわかりきったことだ。

それから数日して、なぜオーク鬼が現れたのかがわかった。

どうやら人里はなれて暮らしていたオーク鬼の所に、他の所から来たオーク鬼の群れ来て住処を奪ってしまったらしい。

住む所の無くなったオーク鬼は生きるために仕方無く人里に降りてきたという所だそうだ。

オーク鬼の群れがいることは村人などの目撃情報でわかっているのだが、どこにいいのか分からないらしい。

まあ広い敷地だし何ヶ月、下手すると何年かかるかわからない。

だから搜索にはあまり人手を割いていない。

僕はそのせいで他の村が被害にあつたらどうするんですかと意見したが、所詮は平民だと切り捨てられた。

父上の平民差別はわかっていたはずなのにどうしてもやりきれない気分になった。

平民だつて同じ人間なのになぜそれがわからないんだろうか。

まあそれを言えばオーク鬼だつて同じ生き物だ。

僕たちが生きるために他の生物を殺すように、オーク鬼だつて生きるために他の生物を殺すしか無い時だつてあるだろう。

それは仕方無いことだ。

人間だけが特別だなんて開き直る気は無い。

だから亜人が完璧な悪かと言われても一概にそうとは言えないだろう。

僕たちから見れば悪かもしれないが、他の生物から見たら僕たちだって悪だ。

……止めよう、気分が悪くなるだけだ。

そういった思考を繰り返し返し、僕はこの日なかなか寝付けなかった。

翌日、僕はもう自分の中で結論を決めて悩まないことにした。

こういった思考に入った時はいつもそうしている。

普段から思っていることだが、話し合いで解決出来るならそうする。それで解決出来ないならお互い腹を括るしか無い。

そして今日もまたランニングから始まるいつもの生活を満喫した

#### 第4魔（後書き）

少しシリアスが入りましたね。

シリアスは苦手です……

でもこのシーンは今後動く上で絶対に必要になるので、書くほかありませんでした。

ちなみにウォーターカッターですが、実際は切っているわけではなく、当たった場所を高い圧力で吹き飛ばしているだけなんです。

説明が面倒だったので本編では書きませんでした。が、豆知識です

## 第5魔（前書き）

今回は話が大幅動きまゐります

## 第5魔

現在僕はランニングをしている。

今日やることは大体終わり、一日の締めとして走っている。

ちなみに僕は今8歳だ。

オーク鬼を倒してから、更に厳しく訓練をするようになった。

あの時は割とあっさり勝てたけど、今後どうなるかわからない。

この世界で平和に生きていたいなら力は絶対に必要だしね。

そうそう、伯母様は半年くらい前に自分の家に帰った。

流石に経営とかをいつまでも使用人に任せておくわけにはいかなかったみたいだね。

伯母様が帰ってしまったので、今までのような質のいい鍛錬は出来なくなった。

なので仕方無く鍛錬の時間を増やしている。

ついでに言っておくと、風がライン、土がトライアングルになった。

錬金などの精度も大分上がった事だし、そろそろ僕の『目』について説明しようと思う。

まず一つは知ってると思うけど精霊の動きを見ることが出来る。

練習次第では精霊魔法なんかも使えると思う。

まあロマリアがうるさいだろうからやらないけど。

そして二つ目の力は、『把握』という力だ。

見た物の、構造、性質、形質などを理解する力だ。

この力は錬金が使えなければ意味が無い。

なぜならこの世界では構造を完璧に理解した所でそれを作る技術が無いからだ。

しかし錬金が使えらなれば便利な能力だ。  
銃を見ればそれを複製出来るし、プラスチックなどを見ればそれを  
作る事が出来る。

この世界には元々無かった、地球から来た物を『見る』事が出来れ  
ば、大幅に技術が発展する。

ちなみに人体の構造も『把握』することが出来る。  
治療の時などに役立ちそうだ。

まあ今わかっているのはこんなものだ。  
他にもあるのかもしれないし、無いのかもしれない。  
どちらにせよあのロリッ子もたまには良い事をすると思った。

ランニングを終え、部屋に戻り魔法の書物を読む。  
努力した分だけ能力が上がるというのは聞こえが良いかもしれない  
が、

逆に言えば努力をしなければ意味が無いのだ。  
だから少しでも知識と力を持つと、時間を無駄にしないようにし  
ている。

その後夕飯を食べて部屋に戻ろうとすると、父上に呼び出された。  
今は父上の書斎にいる。

「ケイトよ、ドマツジ村付近でオーク鬼の群れが目撃された。討伐  
隊を編成したが、お前もついて行くか？」

あの時のオーク鬼の群れか……  
実戦経験ももう少し欲しいし、討伐隊も動くんだからついて行って  
も大丈夫か……



「……………わかりました。ついて行きます」

「これは強制ではないぞ、嫌ならば行かなくてもいい」

「いえ、そろそろ実践の経験も得たいと思っていました。是非行かせて下さい」

「そうか、ならばいいだろう。出発は三日後だ、準備しておけ」

「わかりました」

こうして僕はオーク鬼の群れの討伐を手伝うことになった。

三日後ということなので、それまでの期間は鍛錬の量を減らし体を休めることにした。

それでも伯母様がいた頃位の鍛錬はしたけどね。

そして三日後、僕は討伐隊の人たちと同じ馬車に乗りドマツジ村へ向かった。

討伐隊の中には訓練場で一緒に鍛えた人たちもいたので、すぐに打ち解けた。

そして一、二時間ほど馬車に揺られドマツジ村についた。

そこはすでに酷い惨状となっていた。

オーク鬼は今も村で暴れている。

「行くぞ！」

「……………おお……………!!!!!!」

討伐隊の隊長と思われる人が声を上げ、隊員がそれに続く。

そんな中僕は精霊の動きを確認し、生き残った人がいないかを探していた。

ほとんど人がオーク鬼に潰されたり、壊された家の下敷きになり息絶えていた。

クソッ！もう少し早く来れていれば助けられたかもしれないってい

うのに！

生き残った人はいないのか！？

そうしてあたりを見回していると、一カ所だけ精霊の動きが他と違う場所があった。

僕は急いでそこに行き、確認してみると、そこは家が崩れていた。

「今助けるから！絶対に諦めないで！」

魔法をフル活用し瓦礫や木をどかす。

すると中に血まみれの少女と男性、それと女性が倒れていた。

男性と女性は恐らくこの子の親だろう。

二人はすでに息絶えていた。

しかし少女は苦しそうに呼吸をしている。

僕は急いで体の状態を把握する。

「変に折れている骨が幾つもある……しかも内臓も所々破裂してる……」

酷い状態だった。

本当にギリギリで生きている。

いつ死んでもおかしく無いくらいだ。

僕は急いで治療をする。

とりあえず今は死ぬ事が無い程度に治療をしようと思っていた。

これからオーク鬼を相手にする事を考え本格的な治療は後にしようと考えていた。

しかし精神力を気にしながら治療をしていると、大分傷を治したにも関わらず精神力がまだまだ残っていた。

とにかく治癒はすんだしオーク鬼の殲滅をすることにした。

オーク鬼に目を向けると、黒い、どこまでも黒い感情がわき上がってきた。

僕は生きるためにはしょうが無い。

オーク鬼だってやりたくてやっているわけじゃない。  
今までそう考えて生きてきた筈だった。

でも今は許せなかった。

どんなに頭で理解していても、心では理解出来なかった。

「皆さん……すぐに下がって下さい……」

「は？しかし……」

「巻き添えを食らいたくない人は下がっていると言ったんです」

「わ、わかりました」

討伐隊全員が下がったのを確認すると、オーク鬼に向けて杖を向ける。

「伏せていて下さい、皆さん」

「は、はい」

そして詠唱を始める。

今までは使えなかった強大で凶悪な魔法。

怒りの感情によってスクウェアになった今なら使える！

「吹き飛ば……ウォーターエクスプロージョン！！！！」

僕が魔法を発動すると、ドドドドドドンッッ……と爆音が鳴り響く。

七つの圧縮した水球を連鎖的に解放し相手を消し飛ばす。

討伐隊の人たちはそれを信じられないといった様子で見っていた。

オーク鬼達がいたであろう場所は、木々が全て吹き飛び、地面が大きくえぐられていた。

当然こつちに衝撃がこないわけがない。

しかしそれはあらかじめ、討伐隊の中でも仲がいい人に風で防ぐように伝えておいた。

後始末は討伐隊の人たちに任せて、僕はさっきの少女の様子を見に行った。

少女は未だに眠っており、今は苦しそうにしていない。

それでもうなされたりしているのはさっきのオーク鬼達の夢でも見ているんだろうと思う。

少女の怪我をもう一度しっかりと治したいので僕は急いで帰りたかった。

しかし後始末に時間がかかるようでは帰れないようだ。

なので近くにいる討伐隊の一人に先に帰る事を伝えて帰る事にした。

歩きでは時間がかかると言われたが、考えがあるから大丈夫と言っておいた。

考えというのは、ロリッ子から貰ったリミッター解除の事である。

今回の戦いで僕は水のスクウェアになった。

あれほど感情が揺れたのはこの世界に来て初めてだったと思う。

やっぱり精神力と心の動きは密接な関係があるみたいだった。

とにかく僕はスクウェアになれたのでリミッターをはずせるのだ。初めて使うのがこういう場面というのは少し悲しいが、この子の為

にもそんなことは言ってられない。  
ということでもリミッター解除してみた。

「へえ、これはたしかに……」

なんとも体が軽かった。

神は自己回復能力が上がるようにすると言っていた。  
しかしいつまでもこの状態なのはきつとまずいだろう。  
なにも副作用のようなものが無いとも限らない。

そんな事を考えながら全力疾走していると、20分位で家についた。  
父上には軽く事情を話し、無理矢理許可をとった。  
そして母上に同行して貰い、自分の部屋のベッドに寝かせた。

「母上、軽い治癒をしておいた状態なので急ぎましょう」  
「わかったわ。ではやりますよ」

そして母上と二人で治癒をする。  
把握で確認してみたが、特に異常はなかった。  
しばらくは寝かせて上げようと言うことで、使用人を二人残し僕たち  
ちは部屋をでた。

その後しばらくして討伐隊が帰って来た。  
今は父上に村の事などを報告をしている。  
そして討伐隊が報告を終え、書斎から出てくると、次は僕が呼ばれた。

「お呼びでしょうか？父上」  
「ああ。まずは褒めてやろう、よくやった。まさか一人でオーク鬼  
の群れを全滅させるとはな」

「ありがとうございます。日々の鍛錬のたまものです」

「お前の連れてきた平民についても話したい事があったが、今はいいだろう。下がっていいぞ」

「はい。失礼しました」

父上はやっぱり平民差別が激しい。

いつかこうなるだろうと思っていたが、今がその時かもしれない。

目を開けるとそこは知らない部屋だった。

どうして私はこんな所にいるんだろう？

たしかお父さんとお母さんとご飯を食べていたはず……

！！……そうだ、私達の村はオーク鬼の群れに襲われて……

「……………うう……………くう……………」

頭が痛くなった、これ以上は考えなくなかった。

お父さんもお母さんも……………

ならどうして私は生きてるの？

そんな事を考えて泣きそうになっていたら、知らない男の子が部屋に入ってきた。

「気分はどう？」

助かったという安堵と絶望が渦巻いていた

「……だれ？」

彼の質問には答えずにこちらから質問をする。

「僕はただの貴族だよ」

「あなたが私を助けたの？」

「そうだよ」

「そう……ありがとう」

この人は貴族なのに私を助けてくれたんだ。

「君のご両親と他の村の人たちはすでに手遅れだった……君だけが  
かろうじて助かったんだ」

「そう……」

優しくかったお父さんとお母さん。  
村のみんなだって優しくかった。

「そっか……私だけか……」

私の言葉に彼は謝る。

「ごめん。僕がもっと早く着いていればこんな事にはならなかった  
のに……」

「そんなことない。あなたのせいじゃない。あなたには感謝してる  
よ」

助けてくれた人を恨むなんて間違っている。  
私……これからどうしようかな……

「君、叔父さんとか叔母さんはいるの？」

「いない……」

「だったら僕と一緒に暮らさない？」

「え？」

彼の言った意味がわからなかった。

彼は貴族なのにどうしてこんなに私に優しいの？

「考えておいてね」

そう言っただけで彼は部屋を出て行った。

僕は彼女に僕と胃一緒に暮らさないと問いかけ、部屋を出た。  
また父上に呼ばれたからだ。

「お呼びでしょうか？父上」

「ああ、あの平民の娘についてだ。あの子は明日孤児院に送るぞ」

「待つて下さい！！彼女は心に大きな傷を受けています！！しばらくは心の傷を癒やすためにアーリア家に滞在させたいのです！」

「ならん。それに平民の子供が一人心を病んだからといってなんだというのだ」

「しかし！」「ならん！これは決定事項だ。反論は許さん！！」……  
わかりました」

「下がっていいぞ」

「はい、失礼しました」

扉を閉めある決意をする。



やっぱり父上とわかり合うことは出来ない。

僕の悪い予感は今よく当たるな……

やっぱり今日がいつか来るであろう『その日』だった。

さつき出ていった彼が帰ってきた

「答えは決まった？」

何故彼が私に優しいのかわからない

「君には三つの選択肢がある」

「三つの選択肢？」

「そう。一つ目は君は孤児院に行くという選択肢」

……やっぱり彼もただの貴族なのだろうか？

「二つ目は君は君の自由に生きるという選択肢」

結局私はまた一人ぼっちか……

「そんな悲しそうな顔しないで。三つ目の選択肢は僕と一緒にこの家を出るっていう選択肢」

「え！？」

家を出るって貴族じゃ無くなるってことなのよ！？  
なんで彼は私の為にここまでしてくれるの？

「僕のお父さんが明日君を孤児院に連れて行こうとしている。だから僕と一緒にいかないかい？時間が無いんだ」

彼は私に手をさしのべる。

「どうして！？どうして私の為にここまでしてくれるの！？あなたは貴族なの！？家を出たら貴族じゃなくなるのよ！！」

私はずっと疑問に思っていたことを本人にぶつける。

「決めたから。僕は君を守るって決めたから。だから一緒にいくんだ。まあ君が嫌じゃ無ければけどね」

彼は簡単に、最後は笑いながらそう答えた。  
それを聞いた私の視界は滲み、  
押し殺そうとした声が溢れた。

「……うわあああああああ————ん！！」

いきなり泣き出した私を、彼は優しく抱きしめてくれた。

僕はいきなり泣き出した少女をあやしていた。

「もう大丈夫？」

「うん」



「うん」

まず廊下に出て誰もいない事を確認する。  
そして魔法を使い水の膜を張る。  
念のため通路にある鏡でチェックする。  
完璧に消えていた。

「よし、じゃあ走るよ」  
「うん！」

そして出口まで一気に駆け抜ける。  
出口に着き、一度魔法を解く。  
そしてサイレントを使い扉を開ける。  
外に出て扉を閉め魔法を解く。

「よし、ここからは走るよ！」

少女をお姫様だっこし、リミッターを外して走りだす。  
少しすると少女が口を開く

「大分遠くなつたね」  
「そうだね。あ、そういえば君、名前はなんていうの？」  
「私？私はノイ。お兄ちゃんは？」  
「僕？……僕は………ヴァイス」  
「そうなんだ。よろしくね、ヴァイスお兄ちゃん！」  
「よろしく、ノイ」

父上達には置き手紙を残した。  
内容は、探さなくていいという事と、もう会うことも無いだろうという事。

そして今まで育ててくれたことに対する感謝の言葉。

「さようなら……アーリア家」

「何か言った？」

「ううん、何でも無いよ」

そして僕は走る速度を上げた。

## 第5魔（後書き）

はい、主人公の名前が変わりました。

次からヴァイスとノイはゲルマニアに行きます。

## 第6魔（前書き）

ちよつと今回は独自解釈のような事をしています。  
少し原作とは変わる部分があるかもしれません。

## 第6魔

「お前らやつちまえ！」

「おおー！！！！」

暗い森に盗賊達の声が響く。

彼らは貴族の荷車を襲っていた。

貴族の荷車と言っても、貴族は乗っていないけどね。

「ヒイ！よ、用心棒さん、お願いします！」

「わかってますよ」

僕は呪文を詠唱し、盗賊達に杖を向ける。

「ウォーターロック！」

すると盗賊は水に包まれた。

表面を凍らせているため脱出も出来ない。

やがて盗賊達は窒息した。

「ありがとうございます！」

「これが仕事ですからね、気にしないで下さい」

「いやゝしかしこんなに小さいのに凄いですね」

「生きるためですから」

僕はヴァイス。

現在9歳になっている。

僕が家を出た日から、トリスティンで傭兵や用心棒をしてお金を稼いでる。



ちなみにノイは宿でお留守番中。

ある程度護身用の技とかは教えたけどまだついてこさせるわけには行かないしね。

「しかも商売までしているなんて。本当に凄いですね」  
「それも生きるためです」

僕は前世の知識を生かし、物語を書いて売り出している。  
とはいえそれだけで商売になるわけもなく、錬金で作った武器などを主な商品としている。  
物語を書いた本も商売などではあまり使えないが、位の高い貴族達に売りに行けば、これは珍しいと絶賛して買ってくれる。  
そんな事をしながら一年を過ごした。

「もう着きましたよ。それでは私はそろそろ行きます」

荷車を目的の場所に届け、急いでノイのいる宿に帰る。

「リミットオーバー  
限界突破！！」

限界突破とはリミッターを解除した状態の事。  
そして限界突破状態で走り出す。

「ウインドフォース！！」

魔法を使い、足の下に少量の空気を圧縮する。  
それを踏み込み、空気が解放される勢いで更にスピードを上げる。  
そして30分ほどで宿に着いた。  
部屋を確認し中に入る。

「ただいま、大人しくしてた？」

「うん！お帰り、お兄ちゃん」

「よし、大分資金も貯まってきたし、そろそろ探そうか？」

「そうだね、もう大丈夫だと思うよ」

僕と話している少女がノイ。

現在7歳。

銀色の髪をショートカットにしている。

顔つきは大変よろしい。

おっとりとした感じでは無く、少し勝ち気な雰囲気のある女の子。  
青い綺麗な目をしている。

「どうしたの？急にじつと見つめて来て？」

「いや、可愛いなあと……」

「ば、馬鹿な事言っでないで行くよ！」

おかしいな？

褒めたのになんで怒ってるんだろう？

女の子はよくわかんないなあ……

そうそう、僕もようやく顔立ちがハッキリしてきたので、そろそろ

容姿を説明したいと思う。

髪は茜色で、長すぎず短すぎずって感じ。

顔はまあ、どちらかと言われれば格好いい？

…… すいません調子こきました。

まあはつきり言っで微妙かな。

他の人も、二枚目半？とか言っでくるし。

目はなぜか黒色。

とまあこんなところかな？

って、ああ！？もうノイがない！

先に行ってしまったノイを追いかけて、急いで宿を出る。  
ノイに追いつき、今後のことを話し合う。

「今日から搜索を始めるから。いいよね」

「いいよ。私はお兄ちゃんが決めたことに文句は無いから」

「あ、ありがとう……」

面と向かって言われたので照れてしまった。

あ、ちなみに土がスクウェア、火と風がトライアングルになった。  
結構死線をくぐり抜けて来たからねえ……

流石にサイトほど濃い経験はしてないけど、それに近い状況は何度もあった。

まあ今更騒ぐことじゃないよね。

だって僕は魔法の素質に限界がないんだから、行こうと思えばスクウェアも超えられるって事じゃん？

今の所全然だけどね。

更に補足しておく、ノイが魔法を使えた。

いや、一回試しに適当な杖を渡してみたんだ。

別にその時はなにも無かったし、僕も忘れてたんだけど、

五日後くらいにノイが、契約出来た！と嬉しそうに飛び込んできた。  
試しに確認してみると確かに契約が出来ていた。

それからコモンマジックを練習させて、大分早く習得できていたの  
で、

系統を調べたら、土の素質が高かった。

そして最近ラインになった。

凄い才能だよな。

まさかここまでとは思わなかったよ。

あ、またノイが先に行ってる！？

「じゃあ適当に酒場とかを回ろうか？」

「そうだね、手分けする？」

「ダメ、絶対。心配で仕事出来なくなる」

「そんなに心配しなくてもいいのに……でも、ありがとう……」

それからいくつかの酒場を回ったが、目的の人物には出会えなかった。

そして日が暮れ、辺りは暗くなってきていた。

「見つからないなあ。ノイ、大丈夫？休む？」

「大丈夫だよ。私が体力付けてるの知ってるでしょ？」

「そうだね、もうひとがんばりしようか」

ノイは何故か僕がランニングなどで体力をつけていることを知ると、私もやる！と言いだした。

なんで女の子なのに？と思ったが、この先力はあった方がいいと考え、ノイに合ったメニューを作り渡している。

「それにしても見つからないなあ」

「そうだね……それに大分暗くなってきたよ……」

実はノイはお化けとかが苦手だ。

その辺は実に女の子らしくて可愛いと思う。

「じゃあ次で見つからなかったらまた明日にしよう」  
「本当！？」

「ほんと、ほんと」

ノイの顔が輝いている。

そんなに嫌ならお留守番してればいいのに。

それにしても変だな……

目撃情報はあるのになぁ。

運が悪かったのかな？

そう考え最後の酒場に入り、辺りを見回す。

「！……いた」

「そうだね……あの緑髪の女の人でしょ？」

「うん。じゃあ行こうか」

そしてその女性に近づき話しかける。

「こんばんわ、ミス、ロングビル」

「……？こんばんわ。君は誰？」

そうロングビルさんだ！

またの名をマチルダ・オブ・サウスゴータ！

「そうですね……旅の用心棒、とでも言っておきましょうか」

「そう、私を守ってくれるのかしら？」

余裕だねえ。

精神年齢で言えば僕の方が年上だよ？

「いえ、今回はミス、ロングビルではなく、土くれのフーケに様  
があって声をかけました」

最後の方は耳元で喋りかける。

「っ！どこでそれを！」

「慌てないで下さい。僕はあなたの敵じゃありません」

「……その証拠は？」

信じてくれないなあ。

まあこつちにも目的はあるけどね。

「敵ならばあなたの事を国に報告でもしてますよ」

「私を脅そうって腹じゃないのかい？」

さすがフーケ！

鋭いね！

「まあ……脅しではありませんが、お願いならあります」

「断れないお願いは脅しって言うんだよ」

「いえ、別に断ってもどうもしませんよ」

「信じられるわけないだろう。そんな話」

ですよねー。

さてと、ここいらでお願いを話そうかな。

「とりあえず話を聞いて下さい」

「いいよ、言ってみな」

「僕たちはゲルマニアで貴族になるつもりです。ゲルマニアはお金さえあれば貴族になれますからね」

「あんたまだ子供じゃないか。そっちの嬢ちゃんも、無謀だね」

「いえ、お金はもう貯まってるんです。ノイ」

ノイに声をかける。

ノイは荷物入れから少し大きめの箱を取り出す。  
それをフーケにだけ見えるように開ける。

「なっ！？こりゃあ……」

「この中にはざっと五千エキュー位入ってます。そしてこれは僕たちの資金の一部でしかありません」

「どうやら本当みたいだねえ。でもそれと私へのお願いと、何が関係あるんだい？」

「僕たちは親がいません。だから僕たちの親になつてくれませんか？さすがに子供だけでは貴族にはなれないでしょうし」

「はあ！？あんたら何者だい！最初は嘘かと思っただけどまさか本当に用心棒なのかい？」

やっぱり嘘だと思われてたんだ。

まあフーケことマチルダさんが疑うのもわかるけどね。  
そして僕は切り札を使う。

「僕は嘘は言ってます。それと親になれと言っても形だけでいいんです。その後は勝手にしてくれても、僕たちと一緒に住んでくれない構いません。それにお礼もします。なんならティファニアも呼びますか？マチルダさん」

「！？あんたどこまで搦んでるんだい？まさか……」

「当然知ってますよ、ハーフェルフのことも」

またしても最後は耳元で話しかける。

「別に断つてもなにもしません。また新しい人を探しますから。でも断らないですよ？もう汚れた仕事をしなくてもティファニアを

養えるんですから」

「……たしかに魅力的な提案だねえ。でもどうやってそれを信じろっていうんだい？」

やっぱりまだ信頼性に欠けるか……

最終手段に出るか……

これはリスクがでかいからあまりやりたくなかったけど……

「信頼出来ないならとりあえずこれを上げましょう」  
「なっ!？」

五千エキユーの入った箱を渡す。

これでいい返事が貰えなかったら諦めよう。

「とりあえずそれでティファニアを養って上げて下さい。僕たちは後1週間この宿にいますから」

そういつて宿の名前とここからの地図を書いた紙を渡す。

「いい返事を期待していますよ」

そして店を出て、宿に帰る。

「ふう、疲れた」

「お疲れ様、お兄ちゃん」

やっぱりあいつた駆け引きみたいなのは疲れるなあ……  
ちなみにもっと資金があるって言うのは本当。  
今は隠してあるけどね。



「それにしても、マチルダさんはお母さんになってくれるかな？」

ノイが不安そうに問いかける。

「大丈夫、彼女はティファニアを大切にしている上に賢い。これからどうすればティファニアがより安全になるかわかっていると思うし。」

「そうだよね……。あゝあ早くお兄ちゃんと一緒に平和に暮らしたいなあ」

「そうだね、僕もだよ」

そして翌日。

僕はノイと組み手をしていた。

組み手と言っても、僕は大力を抑えている。要するにノイの訓練だ。

ノイは体術などの面の才能も高く、どんどん成長する。

飲み込みが早いなのって、僕を抜く日も遠くは無いかもしれない。

その日マチルダさんは来なかった。

そしてあれから一週間後。

「読み間違いだったのかな？仕方無い、そろそろこの街を出ようか？」

「そうだね。まったく！五千エキュも貰っておいて、拒否するなんて信じられない！」

ノイは大分怒っていた。

目を離れた隙に通報しそうな勢이었다。

「まあまあ、僕としてはマチルダさんが良かったけど、強制した訳じゃ無いんだし仕方無いよ」

「でも」

そんな話をしながら宿を出ると。

「やっと来たかい。一応親になるんだ、名前を教えな」

マチルダさんがいた。

「信じてましたよ、お母さん。僕はヴァイスです」

「私はノイ！よろしくね、お母さん！」

「ああ、よろしくたのむよ。じゃあゲルマニアへ行こうか？」

お母さんが先走って勝手に行こうとした。

「ちょっと待って下さい。その前に資金を持って来ます」

「そういえばそうだったね。待ってるから行ってきな」

そう言われて急いで資金のある場所に向かう。

隠したなんて言ったが、実際は埋めただけだ。

まあそれでもかなりの深さにしたから普通は見つからないけどね。

鍊金を使い穴を開け、また鍊金してゴーレムを10体つくる。表面は鉄で出来ているが、中身はエキユー金貨でびっしりだ。

10体のゴーレムを連れ、お母さん達の所に戻ると、なにやら楽しそうに話していた。

「どうしたんですか？」

「いやね、このお嬢ちゃんも土のメイジだって言うから意気投合しちゃってねえ。って、あんたも土のメイジだったのかい」

お母さんが僕のゴーレムを見て勘違いする。

「いえ、僕が一番得意なのは水です。ただ全系統を使えるだけです」  
「しかも全部スクウェア！」

僕の説明にノイが付け足しをする。

そしてなぜかノイが、どうだ凄いだろっ感を出していた。

「本当にあんた何者なんだい？まあ今はいいか。それより資金はどうしたんだい？」

「このゴーレム達の中に詰まってます」

「そうかい。もう細かいことは気にしないことにするよ。それじゃあ行こうかい」

「そうですね」

「早く行こうよ」

そして僕たちはゲルマニアへと足を向けた。

## 第6魔（後書き）

ゲルマニアではお金があれば貴族になれるって言うのは本当です。

ただマチルダさんがいつからフーケをやっているかわからないし、ティファニアのお母さんもいつ殺されたのかわからないので、勝手に決めました。

それと、マチルダさんの名前はロングビルで行きたいと思います。流石に本名はまずいでしょうし……

予定では今回ゲルマニアに行こうと思っていたんですが、急にこっちを書きたくなくなって変更しました。

たぶん次はゲルマニアです。

感想とか貰えると嬉しいです。

## 第7魔

現在僕は本を書いている。

お母さんとノイとゲルマニアに来て、領地を買い貴族になった時から一年が経過している。

だから僕は今10歳。

ノイが8歳だ。

ちなみにノイは訓練場で訓練をしている。

貴族になる際に、訓練場を建てたのだ。

その他にもお湯を張って入る風呂とか、似せられる部分は日本に似せた。

こつちの世界ではサウナみたいな風呂で汗を流してシャワーを浴びるだけだったから、お湯の張ってある風呂に入りたくなった。

他にも色々あるが説明がめんどくさいので必要な時に説明しようと思う。

そして今僕が書いているのは、人魚姫。

完全にパクリだが、この世界には存在しない話なので、問題ない。

この他にも日本のアニメやマンガを元にした作品を色々書いている。この世界の人には新鮮だったらしく、瞬く間に売れて、結構潤っている。

ちなみに領地の名前はアンダルージャ。

つまり今の僕の名前は、ヴァイス・ド・アンダルージャ。

ここ一年で結構力を付け、今は大分安定している。

更に、雇ったメイドや執事にも文字を教えたり、経営を教えたりしている。

頭のいい者はすでに僕がいない時でも領地経営を任せられるようになった。

又、没落した貴族を雇って教師などをやって貰っている。腕のたつ傭兵なんかを探して雇い、訓練の教官もして貰っている。

まあ元々資金も多かつたし、地球の知識を生かした物を売り出して  
いるお陰か、生活には困っていない。

メイドさんや執事さんも優しいし、毎日が充実している。

ちなみに、お母さんは今ウエストウッド村にいる。

ティファニアを迎えに行って貰っているのだ。

これまでティファニアを連れて来れなかったのは、色々とばたばた  
していたから。

最近ようやく落ち着いたので、そろそろこっちに呼ぶことにした。

お母さんには信頼出来る風のメイジに同行して貰っている。

フェイスチェンジで顔を変えれば恐らく問題ないだろう。

ちなみに僕はトリステイン魔法学園に行く気満々だ。

そして僕の平穏な日々は、今日で大きく荒れるかもしれない。

なんと今日、ツエルプストー辺境泊がアングルージャ家来ると手  
紙が届いたのだ。

キュルケは賢いし、関わっても大丈夫だろう。

しかしツエルプストー辺境泊は一人で来るという事だ。

少し残念。

人魚姫を書き終わり、庭に出てランニングを始める。

昔から訓練や鍛錬をし続けたせいかな、暇な時は体を動かすようにな  
った。

落ち着かない時は体を動かすのが一番いい。

そしてランニングも一段落し、シャワーを浴びて自室に戻る。  
少しの間読書などをして時間を潰していたら、ツエルプストー辺境泊が来た。

メイドさんが客間に案内する

「ようこそ、アングルージャ家へ。今日はこういったご用件でしょうか？」

「君がヴァイス君か、お父上かお母上はいないのかな？」

客間で待っていた僕にツエルプストー辺境泊が問いかける。

「父はいません。母も今は留守にしています。用件なら私が伺いますか？」

「君はまだ子供じゃ無いか。執事を呼んでくれるかい」

「大丈夫です。というより、基本的にこの家の経営などは私がしています。私が話を伺うのがいいかと」

その答えにツエルプストー辺境泊は驚いている。

「そうか、いや大した用ではないんだがね。まだ会ったことも無いことだし、仲良くしようと思って訪ねたのだが」

「そうですか。しかし本当にそれだけの理由ですか？その程度の事でわざわざ有力貴族様が自ら足を運ぶとは思えませんかね」

「いやいや、本当にそれだけさ。じゃあまたお母上がいる時にでも訪ねるとするよ」

「そうですか。ではこちらです」

そう言ってツエルプストー辺境泊を出口に導く。

「では、またいつか」

「はい。お待ちしてますよ」

そしてツエルプストー辺境泊を乗せた馬車は走り出した。

やれやれ、疲れるなあ……

それにしても、ツエルプストー辺境泊はただ仲良くしようと言いに  
来ただけとは思えない。

何を考えているのか知らないけど、面倒な事になりそうだなあ……

わずか一年で力を付けて来た新しい貴族アンダルージャ家。

私は友好を結びに行くのを建前に、その秘密を探りに行こうと考え  
ていた。

それがわかれば我がツエルプストー家も更に大きくなるだろうから  
な。

それにしてもあのヴァイスという少年、ただ者ではないな……

私を前にしても物怖じせず堂々と振る舞っていた。

しかも領地経営をやっていると言った。

恐らくあれは嘘やはったりでは無いだろう。

アンダルージャ家が急成長している理由に彼は確実に関係している  
だろう。

面白い少年だ。

仲良くしておいて損は無いだろう。



ツエルプストー辺境泊が帰ってから、僕は研究室にこもりある作業をしている

研究室とは名前の通り、色々な物を調べたりする部屋だ。

僕が今研究しているのは風石や火石だ。

精霊魔法で風や火を圧縮して石にした感じなのだが、これを応用すれば面白い物が作れると思ったからである。

実は僕は精霊魔法を少し使える。

戦闘や人前では一切使う気はないけどね。

やっぱり精霊が見えるっていうのがうまく働いたんだろう。

そして僕は精霊魔法を使い、風石や火石のような物を作ろうとしている。

まず一つ目は、水と火を圧縮して、水につけると熱を発する石。これを作れば、平民の洗濯などが楽になるだろう。

二つ目は、火と風を圧縮し、傷を入れると温かい風を発する石。ただしこれは一度傷を入れると止められないので、小さめに作って一つで半日くらいの効果にしようと思っている。

三つ目は、風を圧縮し、傷を入れると冷たい風を発する石。二つ目と同様に半日程度の使い捨てにしようと思っている。

四つ目は、水と風を圧縮し傷を入れると水蒸気を含んだ風を発する石。

二つ目と同様に使い捨て。

今考えているのはこんなところだ。  
でもなかなか調整が難しかったりして、完成まではもう少しかかりそうだ。

ある程度色々試して研究を終わりにする。

そして研究室から出ると、ばったりノイに出くわした。

「訓練はもう終わったの？」

「うん。今からシャワーを浴びに行くところだよ」

「そっか。僕も汗かいたし行こうかな」

研究室には窓が無い。

理由は、風などは研究の邪魔だし、日光が入ってくると部屋の温度が変わったりしてしまうからだ。

「じゃあ一緒に行こうか」

「そうだね。久しぶりに一緒に入る？」

こっちに来てすぐのころはよく一緒に入ったのに、最近は一人で入るようになってしまった。

お兄ちゃんは寂しいです……

「な、なに言ってるの！ダメに決まってるでしょ！」

「そう、ノイはお兄ちゃんが嫌いなのか……………そうかそうか……………」

「お兄ちゃんは乙女心をもっと理解するべきだよ……………」

そう言っただけでノイは一人女風呂に入ってしまった。

説明してなかったけど家のお風呂は女湯と男湯にわかれている。

メイドさんや執事とか、この家で働いてる人は皆入る様にしてるからね。

そして僕は一人男風呂に入り汗を流して少し湯船に浸かり風呂を出た。

着替えを済まし、脱衣所を出ると丁度ノイも出てきたようで、少し湯気が出ていた。

うん、可愛い。

「?どうしたのお兄ちゃん」

「結婚して下さい」

「いきなりなんで!?……でも私もお兄ちゃんなら……その……」  
「ハッ!僕はどうしたんだ?ごめんノイ、変な事口走ったなら忘れていいよ」

あまりにノイが可愛くって正気を失ってしまった。  
危ない危ない。

「……バカ」

「え?なんで?」

「知らない!」

ノイは怒りながら去っていった。  
あれ?僕なにかしたかな?

その後皆で昼食をとり、午後の仕事を始めた。  
大切な仕事とかは僕もやるけど、基本的な経営とかは使用人に任せ  
ている。

皆優秀だし信頼できるからなんの心配も無い。

というわけで僕はノイをお出かけに誘おうとしていた。  
さっきなんか怒らせちゃったみたいだし、お詫びをしないとね。

「ノイ、後で一緒に街に行かない？」

「いいけどなんで？」

「ほら、たまには兄妹の仲を深めようと思って」

「わざわざお出かけなんかしなくても私達は仲いいでしょ？まあいいか。じゃあ準備するから待ってて。」

「わかった」

お出かけするまでも無い、か……………

嬉しい事を言ってくれるよね。

もうノイは怒ってなかったみたいだけど、たまにはこういうのもいいよね。

それから十数分後、ノイが着替えて来た。

白いワンピースのような物を着ている。

やっぱりノイはなに着ても似合うなあ…………

「似合ってるよノイ。行こうか」

「そうだね」

ちなみに僕も少し着替えた。

普段はあまりちゃんとした格好をしてないからね。

それから馬車で数十分後、大きめの街に着いた。

僕は何度かこの街に来ているが、ノイは初めてだ。

普段はもう少し近い小さめの街にしかいかないからね。

「凄い大きいね！」

「うん。どこから行こうか？」

ノイの目が輝いている。

こんなに喜んで……

連れてきてよかったなあ。

「ぬいぐるみ！」

「わかった。じゃあぬいぐるみを探そう」

ノイは普段の態度からは想像できないけどこういつ子供っぽい所もある。

まあまだ8歳だもんね。

普段が落ち着きすぎてるっていうか、僕に合わせて訓練とか勉強してるせいだと思っただけだね。

そんな事を考えていると、ぬいぐるみを置いてある店に着いた。

ノイは嬉しそうにぬいぐるみを選んでいる。

そして欲しい物が決まったのか、二つのぬいぐるみをじーっと見ていた。

一つは鳥のぬいぐるみ。

もう一つは可愛い熊のぬいぐるみ。

二つを交互に見て唸っている。

どうやら手持ちの金額では片方しか買えないようだ。

「すみません！この二つのぬいぐるみ下さい！」

そう言って会計をさっさと済ませ、ノイにぬいぐるみの入った紙袋を渡す。

「はい、プレゼント」

「え？なんで？今日は何かある日じゃ……」

「別に何も無い日に何かを上げたっていいじゃん」

「……そうだね。ありがとう！お兄ちゃん！」

その後は適当に店を見て回った。

そろそろ帰ろうか？と話していた矢先、柄の悪そうな連中に声をかけられた。

「お前ら貴族の子だな。痛い目みたくなかったら金を出しな」

「そっちの嬢ちゃんもおいてきな。心配すんな可愛がってやるぜ」

「どうしたあ、びびって声も出せねえか？」

相手は三人……

さて、どうしてくれようか。

せつかくノイと楽しんでいたというのに。

「あんたらみたいな奴が死んでも誰も文句言わないよね」

「ああん？なんd……ゴハッ！」

一人が思いつきり吹っ飛んでいき壁に激突する。

「デメー！よくもやりやがったな！」

「ぶっ殺してやる！」

残りの二人が飛びかかってくる。

「ガッ！」

「ブッ！」

その二人も吹っ飛んでいき壁に打ち付けられ、気絶する。

「よかったね。僕が相手で。ノイがキレてたら死んでたかもよ？」

「さすがにそこまではしないよ……」

今まで黙ってたノイが口を開いた。

「大丈夫だった？ノイ。恐くなかった？」

「全然。ていうか我慢する事の方が大変だったよ」

今回は僕が先に手を出しちゃったからね。

ノイに譲った方がよかったかな？

ちなみにさっきのは、手に圧縮した空気を纏って相手を殴りつけただけだよ。

「せっかく楽しかったのになあ。又今度一緒に来ようか？」

「そうだね。楽しみにしてるよ」

そして馬車に乗り家へと走り出した。

ノイは馬車の中で幸せそうにぬいぐるみを抱いていた。

そんなノイを見ながら、僕はいつまでもこんな日々が続けばいいの  
に思っていた。

## 第7魔（後書き）

ゼロ魔の世界にぬいぐるみがあるかどうかはわかりません。

しかしこの小説の世界にはある！

という設定です。

感想貰えると嬉しいです。



## 第8魔

あれから数ヶ月が過ぎ、この家も大分力を持つようになった。  
流石にツエルプストー家ほどではないけどね。

そうそうツエルプストーといえば、あれから家族ぐるみの仲になり、  
今では結構仲がいい。  
キュルケとも普通に仲良くしている。

ノイもキュルケを姉の様に慕ってるし、お母さん達も仲がいい。

魔法は未だ進展無し。

流石にスクウエアを超えるのは難しいみたいだ。  
でもなにかきつかけがあればいけそうな気がする。  
まあ気がするだけけどね。

ノイはお母さんの指導もありトライアングルになった。  
ちなみにお母さんとティファニアは旅行中。  
ティファニアが色々な物見たいって言ってたしね。

そして今、僕はディーブ村という村に向かっていた。  
使用人の報告により、この付近で夜盗が目撃されらしい。

報告を受けてからすぐに限界突破をして走り出した。  
目撃から報告までの時間を考えても、もう襲われていてもおかしく  
無いからだ。

数十分走り続け、村に到着した。  
村は多少荒らされているが、それほどの被害でもないようだ。  
家の中に立てこもっている村人達に事情を聞いた。

なんでもその人の話では、夜盗はある程度金目の物と、食料それと女性を奪うとすぐに逃げたらしい。

なにか大きな収穫があったようで、急いでいたらしい。

その人に夜盗がどの方向に逃げたのかを聞き、全速力で走り出す。幸いまだそれほどたっていないかったようで、夜盗はあっさり見つかった。

馬車に乗っているって事は攫われた人はあの中にいるようだ。

しかしこれでは一気に吹っ飛ばす事ができない。攫われた人を巻き込むわけには行かないし。

そこで僕はまず、馬車を追い抜いて、少し離れた前に立つ。それで馬車は急ブレーキをかけて止まった。

「あぶねえだろうが!!」

「そうだね、とりあえず眠りなよ」

そういつて顔面を水で包み表面を凍らせる。すると馬車の中からぞろぞろとおっさんが達がでて来た。

「おい、どうした。急に止まって……!？」

「ゴボ……ガボ……」

出てきた夜盗を片っ端から窒息させる。

そして中に入って行く。

中には男が三人と女が数人と、小さな女の子が一人乗っていた。怯えてる感じからして女は全員攫われて来たのだろう。

男は全員夜盗だと思う。

村の人は女性しか攫われなかったと言っていたし。

「テメエ！何もんだ！」

リーダー格らしい男が杖を構えて叫ぶ。

「ちょっと静かにしててくれませんか？」

「んだと、テメエ！」

そこで、バーンツ、という音が鳴り響き、馬車の壁が全て吹き飛ぶ。

「これで心おきなく戦えますね」

そう言つて女性を逃がす。

しかし夜盗達は女性達を追いかけなかった。  
にも関わらず一人の少女だけは取り押さえていた。

「何ですかあなたたちロリコンですか」

「黙れ！こいつはなあ、吸血鬼なんだよ！」

「！？」

そして少女は口をこじ開けられる。

たしかにその口の中には牙があった。

「そうですか。それで、それがどうかしましたか？」

「こいつは高く売れるぜ。だからあんな奴らは逃げようがどうしようがどうでもいい」

ゲスな笑みを浮かべてしゃべり続ける男。

「まあ売っぱらう前に楽しませて貰うがなあ！ヒヤハハハハハ！！」

「そうですか……で、どうするつもりですか」

僕はこの状況から逃げられると思っているのかと問う。

「どうするもこうするも、こうするぜ！！」

男はファイアーボールを放った。

しかしそれは僕には当たらず弾かれた。

「な！？どうなってやがる！」

ウインドアーマー。

全身に風を纏いあらゆる攻撃を弾く魔法。

「言っただってどうせわからないですよ。とりあえずあなたたちも眠って下さい」

そういつて窒息させる。

当然窒息して気を失ったら魔法を解いている。

どんな悪党でも殺したら気分が悪くなるし。

今この場所で意識があるのは僕と吸血鬼の少女だけである。

「大丈夫？どうして捕まったの？」

吸血鬼がこんな雑魚に捕まったのが不思議でなかった。

「私、一人で寂しかったから。お母さんももういないし……あの人

達私の友達になってくれるって言ってたよ」

この少女は未だに自分が何をされようとしていたのかを理解していなかった。

「君は騙されたんだ。そいつらは君を売ろうとしていたんだ」

「え？じゃあ友達になってくれないの？私、また一人ぼっちなの？」

少女は泣きそうな目で問いかけてくる。

「君、行くところとか、帰るところがないんだよね？」

「うん。だから私また一人……」

「だったら家に来ない？」

「え？あなたの家に？でも私吸血鬼なんだよ？」

あいつらにも同じ事を言ったのだろう。

そしてあいつらはそれを利用した……

最低だ、きつとこの子は人を疑う事を知らないんだろう。

「大丈夫。血が欲しくなったら僕のを飲めばいい」

「いいの？」

「いいよ。友達にもなる。僕の妹だって君を受け入れてくれる」

「本当？本当にいいの？」

「いいんだ。大丈夫、君は僕が守るから。名前は？」

「クレイン。あなたは？」

「ヴァイス。よろしくね、クレイン」

「うん！」

そう答えたクレインの顔は輝いていた。  
その後夜盗達を縄で縛り上げ。

村まで連れて行き後のことは任せた。

殺しはされないだろうけど復習はされると思う。

まあ村の人も気が済んだら国にでも引き渡すだろう。

それからクレインを抱えて家まで全力で走った。

一時間くらいで家に着き、皆を集めてクレインの事を紹介する。

「今日から家族になる吸血鬼のクレインだよ。皆仲良くして上げてね！」

「お願いします！」

僕が紹介して、クレインも挨拶をする。

「それと僕の血を飲ませて上げるつもりなんだけど、他にも血を上げてでもいいって人いる？」

それを聞いて全員が手を上げた。

後で話を聞くと、ヴァイス様が連れて来たなら心配ありませんと言っていた。

それからはクレインの歓迎パーティーをやった。

クレインはまだ幼い吸血鬼だったようだ。

そのせいで人間がどれほど信用出来ないかを知らなかったみたいだ。無邪気というかなんというか、クレインはこの家のマスコットみたいな存在になっていた。

ノイも仲良くしているし、クレインも楽しそうだ。

そしてその夜、皆が寝静まった頃にクレインは僕の部屋にやってきた。

「どうしたの？血が飲みたくなつた？」

僕は本を書いていたので起きていた。

そして入ってきたクレインに、声をかける。

「うん、お礼を言おうと思って。こんなに楽しいのは生まれて初めてだった」

「それはよかったよ。今日ほどは騒がしくないけど、この家は笑顔に溢れてる。きっと毎日楽しく暮らせる筈だよ」

「うん、きつとそう思う」

嬉しかったんだろう。

これからは寂しい思いをさせないようにしよう。

「そうだ。一緒にお風呂に入ろうか？」

今日は飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎだったので風呂に入れなかった。

ノイや一部の人は入ったらしいけどね。

「お風呂？入る入る！」

きつと驚くだろうな。

湯の張つてある風呂なんて聞いたこともないだろう。

「じゃあ行こうか？」

「うん！」

そうして僕らは風呂場へと向かった。

脱衣所に着き、服を脱ぐと風呂場に入る。

「うわー！すごい！」

クレインは目を輝かせている。

「じゃあまずは髪と体を洗おうか？」

「うん！」

クレインをシャワーの前に座らせて、シャワーで髪を濡らす。  
そして髪を洗う。

「綺麗な髪だね」

「そう？ありがとう」

クレインは金色の髪を背中に届く位の長さまで伸ばしている。  
慎重は130？位だろうか？

そしてクレインの髪を洗い終える。

体は自分で洗えるだろうから、僕は自分の体を洗うことにした。

髪と体を洗い終え、湯船に浸かろうとすると、先にクレインが入っていた。

「どう？気持ちいいでしょ？」

僕も湯船に浸かりながら聞く

「うん〜すっごい気持ちいい〜」

そう言って幸せそうな顔をするクレイン。



可愛いなあ……

そんな事を考えていると、パンツ！と扉が勢いよく開く。  
そこにはなぜか怒っているノイが体にタオルを巻いて立っていた。

「き、き、き、気持ちいいってなによー！ー！！」

どうやら盛大な勘違いをなさっているようだ。

「お、落ち着きなよノイ。お風呂が気持ちいいって事だよ」

焦りながら事情を説明する。

「問答無用！！っていうか！一緒に風呂入ってる時点で問題あり  
！」

そしてノイにお仕置きされた。

そんな中クレインは一人気持ち良さそうに湯船に浸かっていた。  
っていうかノイ、なんでタオル巻いてんの？

と聞くと、どうでもいいでしょ！とか言って怒り出した。

とまあ新しい家族が増えて、更に賑やかになるアングルージャ家であつた。

## 第8魔（後書き）

新たな家族が加わりました。  
これからも賑やかになります。

## 第9魔（前書き）

テスト勉強中にちびちび書いた物です。

## 第9魔

クレインをアンダルージャ家に迎えてから二日後、お母さんとティファニアが旅行から帰ってきた。

「ただいま。あんたらしい子にしてたかい？」

「ただいま、ヴァイス」

玄関で出迎えた僕に二人は挨拶をする。

「お帰り、お母さん、ティファニア。実は報告することがあるんだ」

僕は後ろのクレインに手招きをし、こっちにくるように合図する。

ちなみに僕はお母さんに敬語を使うのはやめた。

お母さんに堅苦しいのは止めてくれと言われたからだ。

「なんだい、彼女でも出来たのかい？」

「そうなの？おめでとう、ヴァイス」

お母さんが冗談の様に言ったことを、ティファニアは真に受けていた。

「いや、新しい家族ができたんだ」

できるだけ簡潔に内容を伝える。

「「ええっ!？」」

「どうかしたの？二人とも？」

なんだかとても驚いてるようだ。

「いや、しかし、おめでたいねえ。相手はノイかい？」

「ノイはまだ8歳よ？早すぎるんじゃないかしら」

どうしてノイが出てくるんだろう？

「で、今何ヶ月なんだい？」

クレインが来てからの事だろうか。

「3日目だけど？」

「「え？」」

やっぱり新しい家族が増えたのは驚きだったのかな？

あ、やっと来た。

「紹介するよ、三日前新しく家族になったクレインだよ。あ、ちなみに吸血鬼だけど心配しなくていいから」

「えっと、ヴァイスとノイの妹になったクレインです！よろしくお願いします！」

出てきたクレインをみて、二人は微妙な顔をしている。

「なるほどね……そういうことかい。吸血鬼、だっけ？あんたが大丈夫って言うんなら大丈夫なんだろう。歓迎するよ」

「そうよね、ちょっと驚いたけど、ヴァイスだもんね。よろしくね、クレイン」

「うん！」

お母さんとティファニアに拒絶されなかったのがうれしかったのか、クレインの顔は安堵と喜びが渦巻いていた。詳しいことは、とりあえず家の中に入り説明した。ちなみにクレインは庭で遊んでる。

「なるほどね、あんたらしいよ。あんたみたいな息子がいて私は幸せだねえ。」

「私もヴァイスとお友達になれて嬉しいわ。私のことを全然怖がらないし、あの子達の面倒までみてくれるし」

あの子達とはティファニアと一緒にいた子供達だ。ティファニアをこっちに呼ぶ際に、敷地内に孤児院を作ったのだ。今ではその子達だけで無く、身寄りの無い子も何人か居る。

「大した事じゃ無いよ。僕は自分勝手にやりたいことをやってるだけだしね」

「それが平民のために家出までした奴の言うことかい？」

お母さんが僕にだけ聞こえるようにニヤニヤしながら聞いてくる。

「それだって僕がそうしたかったからそうしただけだよ」

僕もお母さんにだけ聞こえるように答える。

この家で僕の過去を知っているのはノイとお母さんだけだ。わざわざ人に話すような話でもないし。

「そっぴえばノイはどうしたんだい？」

「ノイなら訓練中だよ」

お母さんの疑問に答える。

するとティファニアが理解出来ないといった感じで話し始める。

「ヴァイスもノイも変わってるわね。どうして自分から痛いことをするのかしら？」

「まっただかねえ……」

お母さんが意味ありげに僕を見る。

「ティファニアはわからないかもしれないけど、お母さんはわかってるはずだよ」

「さて、どうだかねえ」

お母さんは僕に理由を話させたいみたいだ。

「自分の身を守るためだよ。こんな世界じゃ自分の身くらい自分で守れないと」

僕の話聞いて、ティファニアがクスクスと笑った。

「なにか可笑しかった？」

別に笑わせるような事はしてないはずだ。

「だって、ヴァイスは嘘が下手だから。ヴァイスがもっと違う理由で強くなるうとしているのくらい、皆わかってると思うわよ」

ティファニアは優しく話しかける。

たしかに最近はそれだけじゃないけど、昔はそれがほとんどだった。だから別に嘘はついてないと思う。

「まあそういうことにしておこうじゃないか。わたしたちは汗を流してくるよ」

「いつてらっしゃい」

そしてお母さん達はお風呂に向かった。

やることもないので庭に出ると、クレインが虫取りをして遊んでいた。

クレインに近づき声をかける。

「何か採れた？」

「あ！ヴァイス兄！あのね、これが採れた！」

そう言つて自分が採つた物を手に乗せて僕に見せる。

その手の中には、黒光する悪魔が……

相変わらずGが苦手な僕だが、昔よりは大丈夫になった。流石に触れるのは嫌だけど。

そんな事を考えていると、Gが飛び僕の顔に張り付いた。

「  
x—————！！！」

言葉にならない声を上げ僕は気絶した。

捕まえた虫がヴァイス兄の顔につき、ヴァイス兄が倒れてしまった

「どっしり……」



泣き出しそうな所をグツとこらえてどうするかを考える。

助けを呼びに行こうかとも考えたけど、その間にヴァイス兄に何かあったら考えるとそれは出来なかった。  
でも私じゃ運ぶこと事も出来ない……

……そうだ！魔法を使おう！

ようし！えっと、どうすればいいんだろう？

……わかんない……

だれでもいいからヴァイス兄を助けてよう。

そう思った途端にヴァイス兄の体が浮かび上がり、屋敷の中に入っていた。

よくわかんないけど、よかった。

ヴァイス兄を追いかけて私も屋敷に走った。

目が覚めると、目の前にノイとお母さんとクレインとティファニアがいた。

「あれ？皆なにしてるの？」

「あんたが倒れたっていうからこうして集まってたんだよ」

「何があつたの？」

お母さんが僕の疑問に答え、ノイが僕に問いかける。

「ん……あつ！そうだ、Gが顔について気絶したんだ」

その時の事を思い出し口に出す。

「またかい……」

「お兄ちゃん……」

お母さんとノイが心配して損した、という感じの目をしている。

「何かまずかったの？ ヴァイス兄」

「Gってなんなの？」

クレインとティファニアが不思議そうに聞いてくる。

この二人は僕がGを嫌いなことを知らない。

「いいかいティファニア、Gって言うのはゴキのことだよ」

「ヴァイス兄はGが苦手なの？」

「嫌い。ていうか怖い」

クレインの疑問に即答する。

「そうなんだ……クレインにも苦手な物があるのね」

ティファニアが良い事を知ったみたいな感じで言う。

「わたしも最初はびっくりしたよ。まあそれなら大丈夫だね。私達  
はもういくよ」

お母さんはがそう言って皆を連れて出て行った。

もう夜だし、何もやる気が出ないのでこのまま眠ることにした。  
そして僕はまどろみの渦に身を任せた。

翌日の昼、僕とノイは庭で向かい合っていた。

「久しぶりに実戦形式の稽古を始めるよ。全力でかかってきなよ」  
「わかってるよ。殺すつもりでいくから」

ノイが物騒な事を口走る。

「そうこなくちゃね。じゃあ、始め！」

ノイは詠唱を素早く終わらせ魔法を発動させる。

「アイアンハンド！」

僕の両足を2本の土の手が掴む。

そしてそれはすぐに鉄に変わり僕の動きを封じる。

「アースファング！」

僕の少し前の地面が盛り上がり、僕に向かい針のように斜めに伸びてくる。

足を固定している手は、地面にしっかりとくっついていて、力で外すのは無理そうだ。

なら……

「マッド！」

大地に水分を集め泥にしていく。

手は外せそうにないので、足場を柔らかくしたのだ。

まずは左足の地面を泥に変え、一気に引き抜く。

その時についてきた泥を鍊金で鉄に変え、形を長方形の盾にする。

盾のついた左足でアースファンクを防ぐ。  
右足の大地も泥に変えて、アースファンクを足場代わりに左足に力を込め、後方に飛ぶ。

足についている盾を砂に錬金して振り払う。  
すると周りの大地が盛り上がり始めた。

「アイアンボックス！」

僕は長方形の鉄の箱に閉じ込められた。  
そしてその壁が先ほどのように自分に伸びてくる。

「本当に殺す気できてるよ……」

僕は地面に穴を開け、地下に道を作り箱の中から脱出する。  
地下の道を進みノイの居場所をさぐる。

土のスクウェアである僕は、地面に触れていればどこに何があるか位はわかる。

まあ、それはトライアングルであるノイも同じだが。  
ノイの真後ろ辺りにいき、穴を開けて一気に跳躍する。

外に出ると、ノイが待つてましたといった風にナイフを使い切りつけてきた。

僕はそれをナイフでいなし、空に回避する。

ノイはすぐに詠唱をして杖を振る。

なんの魔法がくるか構えていたが、何も起きた様子はない。

しかし次の瞬間に僕の周りは爆発した。  
衝撃はそれほどでも無かったが、ガード無しの状態でもろに喰らっ

たため、それなりにダメージを受けた。

煙が晴れていくと、地面にノイが倒れたいた。精神力の使いすぎだろう。

地面に降りてノイに近づく。

「ノイ、大丈夫？」

どうやら気絶しているようだった。

私は始まりの合図を聞いて素早く詠唱を終え、魔法を使った。

「アイアンロック」

お兄ちゃんの動きを封じ、追い打ちをかける。

「アースファング！」

お兄ちゃんは手を外すのを諦めて、地面を泥に変えて脱出した。その時についてきた泥を使いアースファングを防いだ。

この程度で倒せるとは最初から思っていない。

お兄ちゃんの着地地点の付近の地面を盛り上げ、鉄の箱を作る。

「アイアンロック！」

箱の中ではアースファングのように針が伸びてくる。

私は地面に手を触れ地下を調べる。

やっぱりお兄ちゃんは地下に逃げていたようだ。

飛び出てきたお兄ちゃんをナイフで切りつける。

しかしナイフで防がれて空に逃げられた。

仕方無い、外だと威力が落ちるけど、切り札を使おうかな。

そして私は詠唱を始める。

呪文が完成し、杖を振る。

一見何も変わって無いように感じるが、それは違う。

私は空気中に含まれる水を錬金を使い二つの物質にわけた。

次に、空気中にわずかに含まれる気体を二つの物質にわけた。

合計で四種類の物質があるように思えるが、このうちの二つは同じ物質だ。

そしてこの三種類の物質のうち、片方にしか入っていなかった物質同士をくっつけた。

どちらにも入っていた物質は今回は使っていない。

くっつけた物をお兄ちゃんの周りに漂わせる。

これは色々考えて試しているうちにわかった強力な魔法だ。

匂いなどはないので、まず気づかれない。

そして火の魔法を使い発火させる。

すると、私の漂わせた気体は爆発する。

流石のお兄ちゃんでもこれは無事ではすまないだろう。

しかしここまでやった所で精神力の使いすぎで私の意識は途切れた。

ノイを部屋に運び、ベッドに寝かせると、ノイは目を覚ました。  
あの爆発はどうやってやったのかを聞き、部屋を後にした。

どうやらノイは詳しいことはわかっていなかったようだが、ああすると爆発して凄いいことになるという考えに行き着き、切り札として使うようにしていたようだ。

ノイの話から考えるに、あれはガス爆発だろう。

水を二つの物質に分けたと言うのは、水素と酸素。

空気中にわずかに含まれる気体というのは二酸化炭素で、それを分けた物が炭素と酸素だろう。

そのうちの水素と炭素を結合させて作ったのがメタンガス。

メタンは匂いがしないから気づけなかったのだろう。

それにしても、原理はわかってないとはいえガス爆発を起こすとは未恐ろしい子だ。

さっきは屋外だったからあの程度で済んだが、ルイズのように室内でやられたら最悪な展開になる。

これからはノイを怒らせない方がいいかも……

そして僕は、もう一つの疑問を確かめるため、クレインの部屋に来た。

「クレイン、昨日魔法を使って僕を運んだって言っていたよね？どうやって使ったか覚えてる？」

「うーんとねー」

クレインは一生懸命思い出そうと頭を捻る。

「だれでもいいから助けてーって思ったら魔法が使えた!」  
「そうなんだ。よかったね」

その時の事を思い出し楽しくなったのか嬉しそうに答える。  
要するに……精霊がクレインの気持ちに応えた、ということだろうか?

しかし、精霊そのものに頼んだわけじゃないし、助けてなんて抽象的なイメージで魔法が使えたって事は、クレインは精霊に好かれるのかもしれない。

吸血鬼は精霊魔法を使えるし、クレインは精霊に気に入られているみたいだから、将来は結構強くなるかもしれない。  
まあ、クレインが嫌なら無理強いはいらないけどね。

「どうかしたのー?」

僕がずっと黙っていたので心配になったのだろう

「なんでもないよ。家にはもうなれた?」

「うん!皆優しい!」

元気よく答えるクレインの頭を撫でる。

クレインは嬉しそうに目を細めた。

しばらく撫でていると、クレインは寝てしまったようだ。

クレインを起こさないように部屋を出て、自分の部屋に帰る。  
しかし、その途中でティファニアにあった。

「ティファニア。旅行は楽しかった?」



まだ聞いていなかったなので、旅行の事を聞いてみた。

「凄く楽しかったわ。初めて見る物も沢山あって、夢のようだったわ」

「それは良かったね。そうそう孤児院にも顔を出しなよ。皆会いたがつてるよ」

「わかったわ」

そして僕は自分の部屋に戻る。

また新しい物語を書いているのだ。

今回は白雪姫。

そうして日は暮れていった。

## 第10魔（前書き）

一日二回投稿なんてそうそうしませんけど、勉強中に書いた物が溜まっているのです。

## 第10魔

現在僕はキュルケの家に遊びに来ている。

キュルケとは姉弟のように仲がよく、お互いの家に遊びに行ったりしている。

ちなみに僕は今11歳だ。

「キュルケは今何クラスなの？」

「ラインよ」

キュルケの部屋で本を読みながら訪ねると、少し嬉しそうに言った。

「ラインに上がったんだ。よかったね」

「あなたに言われても嫌みにしか聞こえないわよ」

僕は水と土のスクウェアで風と火のトライアングルだしね。

でもこの年でラインっていうのは普通は良い事なんだと思う。

「そついうつもりじゃないよ。それに僕はちよつと変わってるだけ」

「まあ気にしてないからいいんだけどね」

キュルケはジグソーパズルをしながら答える。

昔はもう少し活発に遊んでいたけど、大きくなるにつれて一緒の部屋で話すだけ、という果たしてそれが遊びと言えるのかどうか怪しい状態になっていた。

「戦闘訓練でもする？」

本を読みながら問いかける。

ちなみに僕は今ファンタジーな物語を読んでいる。

自分で物語を書くので、参考にしようとして色々読んでいたらいつの間にか読書が趣味になっていた。

とはいえタバサほどではない。

ちゃんと時間を考えて読んでいるので、体術や魔法の訓練はしっかりやっている。

そんな思考をしていると、キュルケがこちらを向いて一言喋った。

「絶対嫌」

もの凄い拒否だった。

心が折れそうだった。

「あなたと訓練なんかしたら自信がなくなるじゃない」

「あー、そういうこと……でもこっちも結構キツイよ?」

そう、最近僕も自信がなくなりかけている。

「どういうこと?あなたが自信なくなりそうなんて」

「ノイとクレインがちょっとね……」

興味が出たのか、話を聞きたがるキュルケに答える。

「ノイちゃんとクレインちゃんがどうかしたの?」

あの二人は元々才能があつた上に努力もするもんだからそりゃあ悲惨な事になった。

ちなみにクレインは自分から魔法の練習がしたいと言い、頑張っている。

「実は、ナイフ捌きでノイに負けた……」

「へー、あなたでも負けるのね。でも全力でやったらあなたの方が強いんでしょ？」

「ま、まあね。全力ならね……」

全力とは魔法や限界突破<sup>リミットオーバー</sup>などを使った状態の事だ。それでもシヨック……しかも……

「クレインにも風の魔法で負けた……」

クレインは精霊魔法を使うので、トライアングルやスクウェアといった区別ができない。

だから今クレインがどれくらいの強さなのか正確にはわからないが、風の魔法だけならスクウェアを超えているだろう。

「それも風の魔法だけなんですよ？結局総合的に見ればあなたの方が強いんじゃない」

「まあ……そうだけど」

そう言われると段々自信が戻ってきた気がする。

「ほら、あなたは強いよ。守るんでしょ？あなたの力で」

キュルケはあえて何をかは言わなかった。

「ありがとうキュルケ。自信、取り戻したよ」

「いいのよ。そういえばお父様があなたを呼んでいたわよ」

「そうなんだ。じゃあ行ってくるよ！」

そして僕は部屋を出て行き書斎へ向かった。

「まったく、世話のかかる弟ね」

キュルケは優しく微笑みそう呟いていた。

キュルケの部屋を出た僕は書斎へ行き叔父様（そう言えと言われた）の話を聞いた。

なんでも、東方の地の珍しい物を手に入れたから興味があったら見せてやるう、だそうだ。

東方の地と言えば原作では地球産の物が沢山来ていたらしいし、期待がふくらむ。

叔父様に連れられて地下の倉庫に入ると、ワインなどが置いてあった。

その倉庫を進んでいくと、一つの物が視界に入った。

「叔父様、もしかしてあれですか？」

「よくわかったな。そうだ、あれが東方の地で見つけた物だ」

なるほど、確かにそれは地球産の物だった。

期待していた重火器の類いでは無かったが、充分に役に立つであろう物だった。

「少し手にとって見てもいいですか？」

「ああ、構わんぞ」

叔父様の許可を得て、ゆつくりと『箱』を持ち上げた。じつくりと見ながら構造を『把握』していく。

『箱』には穴がついており、その穴の中が複雑な構造をしていた。この穴に合った形の物を入れることによって開く『箱』。そう、それは金庫だった。

鍵穴と取っ手がついており、ロックを外すと開く。

僕にしてみれば馴染みの深い物だったが、この世界の人達には少し難しかったかもしれない。

なにせこの世界には『鍵』がない。

基本的に魔法の『ロック』を使っているからだ。

「叔父様、これを開けてもいいですか？」

「別にいいが中身は空だぞ」

『アンロック』でも使って開けたんだろう。

それに僕は中身に興味があるわけじゃ無い。

「鍊金」

把握した鍵穴の形に合った鍵を作る。

「それは何だ？」

「これは『鍵』という物です。この穴に差し込む事によって、魔法を使わなくても開けることができます」

簡単に説明をする。

「ほう、それは凄いな。それにしてもヴァイスは物知りだな」

「それなりに勉強もしているので。それより、この箱ですけど、将来作れる様になったら売り出したいと思うのですが、いいですか？」

叔父様は特に悩んだ風もなく言った。

「別にいいぞ。どうせ私ではなにも出来ないからな。そもそもこれは私の発明ではないしな。好きにしていいいぞ」

これで一つ扱える商品が増えた。

まあこれだと今のレベルでは作れないけど、いつか作れる様になると思う。

精霊魔法を練習すればいけるかもしれない。  
電気を使わないから作り易い方だよ。

「ありがとうございます。そろそろ戻りましょうか？」  
「そうだな」

そして僕たちは倉庫を後にした。  
キュルケの部屋に戻り再び読書始める。  
キュルケのパズルは少し進んでいた。

「何話してたの？」

相変わらずパズルとにらめっこしながら聞いてくる。

「東の方で見つけた箱の話」  
「ふーん」

それで会話は終わりお互い自分の世界に入る。  
それからどれくらいの時間がたっただろうか、不意にキュルケが言



葉を発した。

「あなた、時間は大丈夫なの？」

忘れてた……

外はすでに陽が落ちかけていた。

「ごめん！また来るから！」

そう言い残しダッシュでキュルケの部屋を出て、屋敷を出た。  
外にでてから限界突破し、全力で走り続けた。

なんか限界突破の使用率が戦闘より移動の方が多いなあ……  
などと考えていると、我が家が見えた。

1時間少しほどでついたが、辺りは真っ暗だった。

家に入り帰宅を知らせる。

数人に声をかけておいたから、すぐに皆に伝わると思う。

そして自分の部屋に向かい廊下を歩いていると、お母さんに会った。

「帰って来てたのかい」

「今帰った所だよ」

少し言葉を交わし別れる。

そして自分の部屋にたどりつき、扉を開けた。

「zzzz……」

中ではなぜかノイとクレインが僕のベッドで寝ていた。

クレインが僕の部屋に忍び込むのはよくあることだけど、ノイは珍しい。

起こすのは可哀想なので、寝ている二人の側に座って頭を撫でる。

「zzzz……うん……むにゃむにゃ……」

のいが起きそうになったが、素早く手を引いてやり過ごした。

……と思いきや、ノイは目を覚ましてしまった。

「……あれー？お兄ちゃん？」

どうやらまだ寝ぼけているようだ。

めっちゃかわええ！

……っと、危ない危ない、もう少しで萌え死にする所だったよ。

「そうだよ、お兄ちゃんだよ。いい子だから眠ろつか？」

「うんー」

返事をして横なるノイ。

しかしその手は僕の左手をがっちりと掴んでいた！

「お兄ちゃんも一緒……zzzz……」

なんとかノイを寝かしつけるのに成功し、部屋を出て行こうとしたが、ノイの手が解けない。

あるえー？

寝ているのに凄い力だった。

仕方無いので右手でクレインの頭を撫でる。

クレインはいい夢でも見ているのか、幸せそうな寝顔だった。

「zzzz……ヴァイス兄がいつぱい……えへへ……zzzz……」

うん、それは恐くないかな？

とはいえ、それだけ兄として慕われているとやっぱり嬉しい！  
頭を撫でるのにも飽きたので、少しほっぺをつつついてみる。

ぶにぶに、ぽよぽよ

そんな感じの擬音が似合いそうなほど柔らかいほっぺだった。  
起きないように優しくほっぺをつんつんしていると、パクツと指を  
くわえられてしまった！

そして僕の指をぺろぺろと舐めるクレイン。

か、かわええ！

やばい、本気でやばい。

理性が吹き飛びそうだ。

しかし何かが引つかかっていた。

今でも理性が吹き飛んでいないのはこの違和感のお陰だろう。  
何かを忘れてる気がする……

ぺろぺろ

グオオオオオオーーーー！！！！

集中出来ねーーーー！！

理性がああーーーー！！！！

しかしそこで思い出す。

クレインは吸血行為の前に血を吸う場所を舐める癖がある。  
それってつまり……

「え、ちょ、ま、まっ」

カプッ

「~~~~~ッッ!!!!」

なんとか声は我慢したが、めちゃくちゃ痛かった。

首とかはなれたし、前もってわかっていれば覚悟を決めて少しは痛みも和らいでいたと思うけど、今回は指で更にまったく構えていなかった。

なのでそれはそれは痛かった。

クレインはいっぱい居る僕の血を吸う夢でも見ているのだろうか？

現に今も血を吸い続けている。

あれ？これ、やばくね？

クレインは普段色んな人から少しずつ血を貰っている。

自分でも加減したいるようで、吸っている量も問題ない。

しかし今は寝ていて加減が出来ない。

つまり僕全部血を吸われるかも……

やべー、これやべー。

冷や汗をダラダラかきながら吸血行為の終わりを祈っていると、クレインは口を離れた。

どうやらすでに食事は終わっていたようで、それほどお腹も空いていなかったようだ。

満腹になったのか、クレインは気持ち良さそうに寝ている。

穏やかに眠る二人に対し、僕はフラフラだった。

全部は吸われていないけど、それなりにもっていかれていたようだ。そしてぶっ倒れた。

意識が朦朧としていき、意識が途切れた。

翌日の朝、目を覚ますとノイはいなくなっていた。

夜に起きて自分の部屋に戻ったのだろう。

クレインは僕の隣で寝ていた。

ていうか僕に抱きついて寝ていた。

僕は抱き枕か、と突っ込みを入れておいた。

クレインをはがし、ベッドを抜ける。

着替えの用意をしてお風呂に向かう。

昨日は入れなかったから今日は朝風呂だ。

お風呂で軽く汗を流して新しい服に着替えて庭に向かう。  
庭ではノイがランニングをしていた。

「おはよう、ノイ」

並走して話しかける。

「おはよう、お兄ちゃん」

挨拶はいつも通りだが、顔がにやけている。

何かいいことでもあったのだろうか？

「ところでノイ、何で昨日僕の部屋で寝てたの？」

昨日わからなかった疑問を口にする。

「ああそれ？それはね、クレインとかくれんぼしてたの。でもクレインお兄ちゃんの部屋で寝ちゃって。それで添い寝したらいつの間にか私も寝ちゃってたんだ」

なるほどね、かくれんぼをしたのか。

たぶんクレインが僕のベッドにでも隠れようとしてそのまま寝てしまったんだろう。

クレインらしいっていうか、なんというか。

そう考えているとノイに話かけられる。

「じゃあ私はシャワーを浴びにいくから」

そう言つて上機嫌で家の中に入つていった。

何であんなに機嫌がいいんだろう？

まあいつか、考えてもどうせわかんないし。

そして今日も平和で賑やかな一日が始まった。

## 第10魔（後書き）

ノイの機嫌がいい理由……わかりますよね？

## 第11魔

現在僕は森にいる。

まだ朝も早く、皆寝ている時間だ。

僕は12歳になり実力も大分ついてきたので、そろそろ使い魔を召喚する事にした。

本来なら魔法学院でやることになるんだろうけど、そんなの知ったこっちゃ無い。

皆にはまだ話してない。

反対はされないだろうけど、説明とかその他諸々が面倒なので喚んでから伝えることにした。

「この辺かな」

家から少し離れた森を進み、開けた場所を見つける。

ここで召喚する事にした。

「我が名はヴァイス・ド・アンダルージャ。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし使い魔を召喚せよ」

呪文を唱えると、僕の前に光り輝くゲートが出現した。

そしてその中から、一見普通の美少女が現れた。

そう、一見普通の美少女だ。

僕の目は精霊の動きを捉える事が出来る。

そして彼女の周りは精霊の動きが普通じゃなかった。

クレインの周りの精霊の動きとも違う所を見ると、吸血鬼でもないだろう。



「あなたが私を呼んだのかしら？」

亜麻色の髪を肩くらいの長さのツインテールにしている。  
身長は僕と同じくらいだ。

顔つきはあどけなさが残っていて、瞳は緑色。

少女は外見に反して妙に落ち着いている。

クレインはたまたま見た目通りの年だったが、この少女は違うようだ。

しかし人と見分けがつかない亜人……韻竜が変装しているのか、あるいは……………

「そうだよ。僕はヴァイス。ところで君は……『悪魔』かな？」

僕が疑問を口にすると、少女はニヤリと笑いその姿がぶれた。  
次の瞬間僕は吹き飛ばされていた。

「ガハッ！」

木にぶつかり地面に崩れる。

軽い咳をしながら立ち上がる。

「！凄いね、あなた。私の一撃を受けて死ななかったのはあなたが初めてよ。それに一目見ただけで悪魔ってばれたのも初めて。ど  
ういうカラクリかしら？」

間一髪<sup>リミットオーバー</sup>限界突破が間に合って助かった。

しかし、強すぎるでしょ……

やらなきゃやられるかな？

でも、一度攻撃したら話し合いに持つて行くのは難しいだろうし……  
ダメ元で話し合いを試してみるかな

「ちょっと待つて。こっちに戦闘の意思はないよ。僕の使い魔になるのが嫌なら帰っていいから」

「あなた面白いわね。悪魔相手に話し合いで解決しようって言うの？そうね……あなたが私を楽しませてくれたら考えて上げてもいいわよ。かかってきなさい」

まずまずの成果かな。

これで少なくとも帰ってくれる確率がでた。

しかしかかって来なさいって、あの早さだと僕の戦法じゃ勝てないな……

ここは一撃全力でぶつけるかな……

「ウインドウェポン！」

ウインドアーマーは相手の攻撃を受け流すように、横に向かって吹く風を体に纏うが、ウインドウェポンは相手を吹き飛ばす事と、威力の強化のために相手に向かって吹く風を纏う。

これを纏うことによって、相手を攻撃した時に強力な風が相手を襲う。

ウインドウェポンを纏い、一気に間合いを詰めて100%の力で少女を殴る。

流石にこれを喰らって無傷は無いだろうと思っていたが、少女は少し後ずさるだけだった。

「痛いわね、なにすんのよ」

そして僕は蹴り飛ばされる。

またしても木にぶつかり地面に落ちる。

「ゲホッ！ゲホッ！」

これは終わったな……

これ以上何をやっても無駄だ。

だからって諦める気はないけどね。

腹を据えて立ち上がり、少女の追撃に構える。

しかし少女は僕の前まで来ると高らかに笑い出した。

「アハハハハハッツツ。あなた面白いわ。いいわ私あなたの使い魔になって上げる」

「へ？」

何が来るのかと構えていた僕は素っ頓狂な声を上げる。

帰るんじゃないって使い魔になるの？なんで？

僕としては嬉しいけど、なんで急に？

「私に一撃でダメージを与えられるなんて大した物ね。あなたといると面白そうだわ」

安心すると冷静になってくる。

僕と大して変わらない大きさの少女が、随分と大人っぽいしゃべり方をしているので、違和感が大きい。

「どうかした？ずっと黙っているけど、もしかして私が使い魔じゃ嫌かしら？」

「そんなことはないんだけど、えっといいの？ご両親とかは？」

とりあえずこういう事はしっかりしておかないといけないだろう。

「親なんていないわよ。悪魔は家族仲良く暮らすなんて事はしないの。それと一応私の本当の姿を見せておくわ」

そう言う少女は漆黒の翼と尻尾を出現させた。

「普段は見えないようにしてるから問題ないわよ。さてと、めんどくさい話はここまでにしてさっさと契約の儀式を始めましょう。呪文を唱えて」

「わ、わかった」

少女に押し切られるように呪文を唱える。

「我が名はヴァイス・ド・アンダルージャ。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔とせよ」

そして少女にキスをする。

ルーンはを刻まれるのは結構痛い筈だが、特に気にした様子も無い。

「終わったみたいだね。少し額に違和感を感じたからここにルーンが刻まれてる筈なんだけど、確かめてくれる」

「うん、確かに額にルーンが刻まれてるよ。それとさ、その喋り方直した方がいいんじゃないかな？見た目があれだから違和感があるよ」

気づいたことを指摘する。

「そうね、わかったわ。これから変えるわ」

「うん。あ、そうだ名前を聞いて無かったけど、なんて言うの?」

まだ名前を聞いていなかった事を思い出し、少女に尋ねる。

「私はフィーラ。宜しくね、ヴァイス」

「こちらこそよろしく」

そしてフィーラと少し喋っていると、僕が最初にゲートを呼び出した辺りから声が聞こえた。

急いでその場に駆けつけると、寝間着姿のノイがいた。

「ノイ!」

「あれ?お兄ちゃん?」

向こうも事情がよくわかっていないらしく、不思議そうな顔をしている。

「どうしてここにいるの?」

「起きたら目の前に光る何かが浮いてて、それをくぐったらここに来た」

光る何かって、ゲートのことかな?

すると確かにまだゲートは消えていなかった。

「ここどこ?あと、その子誰?」

混乱しているノイに、使い魔召喚の事とフィーラの事を説明する。

「ふーん。つまりその子は悪魔でお兄ちゃんの使い魔なんだ。それで私も使い魔に選ばれたのかもしれないってわけだね」

「たぶんそうだと思う。使い魔が二人なんて聞いた事が無いけど」  
「まあ、そんなこと言ったら使い魔が人間とか悪魔なんて事も聞いた事無いわよ」

僕の言葉にフィーラが付け足しをする。

ちなみフィーラの正体を知っている人前では素で話すようだ。

「まあとりあえず、ありえるかどうかの話は後にして、ノイが使い魔になりたいかなんたたくないかが問題だよ」

「別にどっちでもいいでしょう。すでに私がいるんだし」

確かにノイが拒否したとしても問題はない。  
しかしノイは使い魔になってくれるようだ。

「なるよ、私も。早く儀式を始めようよ」

「まあ、ノイがいいならいいけど」

少し顔が赤くなっているノイ。  
僕も知らない女の子だったからあんまり照れなかったけど、相手が知り合いとなると話は別だ。  
顔が段々赤くなってくる。

「我が名はヴァイス・ド・アンダールジャ。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔とせよ」

そしてノイにキスをする。

顔を離すとノイは耳まで真っ赤だった。

きっと僕も同じ状態だろう。  
すると

「い、いたああああいいいいいい!!」

ノイが突然痛みがりだした。

ルーンが刻まれているのだろう。

ノイが痛がるのを止めると、左手の甲にルーンが刻まれていた  
しかしノイが来たと言うことは……

「あれー？ヴァイス兄ー？」

やっぱりだった。

ゲートをくぐって来たのはクレインだ。

ていうかこれ絶対あのロリッ子の仕業だよ。

間違いないよ。

「……クレイン、とりあえず目を覚まそうか」

まだ寝ぼけているクレインの顔を、水の魔法で優しく洗う。

これで目が覚めたようで、ノイと同じような質問をしてきた。

僕はノイにしたのと同じ説明をした。

「そうなんだー。じゃあ私も使い魔になるー」

「うん、クレインはそう言うと思ってたよ」

この展開でクレインが断ることは無いだろう。

僕に懐いてくれてるし、ノイともおそろいになるし。

「我が名はヴァイス・ド・アンダルージャ。五つの力を司るペンタ  
ゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔とせよ」

クレインにキスをする。

今日で初めてだけでなく、二回三回とキスする事になるとは思っ  
てなかった。

でも兄妹はノーカンだよ、うん。

「いたああああいいいいー！！！」

クレインが痛みで泣きそうだった。

痛みが治まったのか声を上げるのを止めた。

確認してみると、右手の甲にルーンが刻まれていた。

ゲートはもう閉まっている様だし、これ以上はもうないだろう。

クレイン以外は使い魔が三人と言うことに疑問を持っていたが、話  
した所でわかることでもないので黙っていた。

クレインは特に気にしていないようだ。

まあ、あんまりメイジの常識を知らないから仕方ないか。

「それじゃあ、家に帰ってフィーラの歓迎パーティーでもしようか」

「そうだね、それがいいよ」

「やったー！パーティー好きー！」

僕の言葉にノイは賛成し、クレインは嬉しそうに跳び回った。

そんな中、フィーラだけは何とも言えない表情をしていた。

「私悪魔なのよ？あなた達は受け入れてくれたけど、普通は恐くて  
逃げちゃうでしょう」

フィーラは自虐的な笑みを浮かべる。

きつと過去にそういうことがあったのだろう。

「そんな心配ならなくていいよ。なにせ家は吸血鬼にハーフエル



フまで受け入れてるからね」

おどけた感じで言ってみる。

しかし普通の人が聞いたら驚くだろう。

「吸血鬼はこの子よね？ハーフエルフもいるの？」

人間とエルフの事情を知っている者には信じられないかもしれない。

「うん。凄くいい子だから、仲良くなれると思うよ。」

そんな説明をしながら歩く事数十分。  
我が家にたどり着いた。

「「「ただいまー」」」

「おじやまします」

メイドさんや執事に挨拶しながらお母さんの部屋に来る。

「お母さん、紹介したい人がいるんだけど」

「なんだい？また誰か拾ってきたのかい？」

お母さんはいつもの事だ、といった感じで適当に聞いている。

「この子はフィーラ。僕の使い魔で悪魔だから、宜しくね」

「あんた使い魔を召喚したのかい。しかし悪魔を召喚するとは、相変わらずめちゃくちゃだねえ」

お母さんは最早なれたのか、それほど驚いていない。  
ついでにノイとクレインが使い魔になった事を伝えると

「使い魔が三人なんて聞かない話だねえ。まああんたならおかしくないか」

やっぱりそれほど驚いていないようだ。

お母さんの部屋を後にし、家の中を案内する。

そして夕食の時間、全員を集めて新しい家族が増えた事を伝えた。皆、悪魔と言うことには驚いていたみたいだったが、僕やノイ、クレインが仲良くしてるのを見て、普通に接する様になった。

パーティーで無礼講と言うことで、僕はノイとワインを飲んでいた。クレインは色んな人から血を貰っている。

フィーラはもりもり食べている。

そういえば最近全然料理してないなあ……  
今度久しぶりに料理でもしようかな？

そうそう、フィーラは精霊魔法を使うが、その中でも特に得意なのは火らしい。

実際に見たわけじゃないのでなんとも言えないが、あのフィーラが得意と言っている所を考えると、一瞬で我が家を燃やし尽くせる位の力はあるのかもしれない。

少ししたらフィーラには研究を手伝って貰おうと思っている。

精霊魔法によって作ろうとしている特別な『石』が、もう少しと言うところまで来ているのだが、決め手に欠ける。

まあ、とりあえず今日は気にしないでおこつ。

「おにいひゃん、ひゅひゅ」（お兄ちゃん、好き）

どうやらノイは酔ってしまったようだ。

僕はノイをお姫様抱っこして部屋に運び、寝かしつける。数分もするとノイはグッスリと眠った。部屋を出て少し進むとフィーラに会った。

「どうしたの？」

「皆がこの家のお風呂は凄いつて進めるから、入ってみようかと思つたの」

たしかにあのお風呂はこの世界では珍しいだろう。

「着替えはあるの？ ないなら僕のを適当に持っていいよ。ノイとかクレインのじゃあサイズが合わないだろうし」

「わかつたわ」

そう言つてフィーラは去つて行つた。

会場に戻ると、ティファニアとお母さんが話しているのが視界に入つた。

どうやら酔っているお母さんの話をティファニアが聞いているようだ。

「大変だね、ティファニア」

そう言つて隣に座る。

「ヴァイス。あなたまた家族を増やしたのね」

「うん。きつとこうなる運命なんだよ」

「ヴァイスは優しいわね」

「ティファニア」。聞いてんのかい」

お母さんを無視して話してしまっていた。

「聞いてるわよ、マチルダ姉さん」

「じゃあ僕はもう行くから」

そして席を立つ。

「ヴァイス、あなたには感謝してる。それはきっと皆同じよ。今日家族になった子もきつとヴァイスに感謝してるわ」

「ありがとう、ティファニア。でも僕だって皆に感謝してるよ。フイーラだって、僕がまだまだ未熟なことを教えてくれたしね」

そう言い残して会場を出て行く。

明日からはフイーラと訓練をしようと思っている。

僕はもっと強くならなくちゃいけない。

## 第12魔（前書き）

テスト終わりました。

## 第12魔

どうも、現在夕食中のヴァイスです。

僕が使い魔を召喚した日から2年が経った。

あの日から僕はフィーラと一緒に訓練をしている。

流石というかなんというか、フィーラは強すぎて今の僕でも勝つことは出来ない。

武術、体術などの面で、一時期はノイに抜かれたこともあったが今では僕の方が上だ。

というかあんな訓練をしていたら誰でもある程度は強くなる。

ちなみに、フィーラとの訓練の際に風の魔法を何度も使用した為か、風のスクウェアになった。

これで残っているのは火系統だけだ。

ノイ、クレイン、フィーラはそれぞれ左手の甲、右手の甲、額にルーンが刻まれた。

その時はバタバタしていて気づかなかったが、3人のルーンにはどこか見覚えがあった。

しかし、どこで見たか、それが何なのかは全く思い出せない。

左手の甲など、ルーンが刻まれた位置からガンダールヴなどを想像したが違った。

武器を持たせても特に変化は無かったのだ。

結局思い出せず、今でもそれはわからないままだ。

使い魔になると特別な能力が身につく、という話は知っていると思う。

喋ったりする使い魔がいるのがそれだ。

それと同様に、ノイ達にも特別な能力がついたらしい。

ノイは僕の考えている事が何となくわかっていった。  
それを聞いて僕はノイの考えは僕にも読めるか試したところ、ぼんやりとだがわかった。

恐らくは『意識共有』のようなものだろう。

僕の頭を覗いているだけではなく、お互いに意識が通じ合っている、といった感じた。

ノイにその能力の事を聞いた時はとてもあせった。

転生の事やロリツ子の事がばれたら大変な事になると思ったからだ。  
しかしその心配は杞憂に終わった。

どうやらロリツ子についての事は、ロリツ子によってブロックされているらしい。

ロリツ子が頭に直接伝えて来たので間違いないだろう。  
その時に

「ロリツ子って言うのは止めなさい！私は神ッ！」

とやって来たので、これからはロリツ子（神）と呼ぶことにした。  
それと、ノイの能力は常に僕の考えがわかるわけではないらしい。  
ようするにオンオフが可能らしい。

まあ詳しい事はノイ本人でなければわからない。

『くらしい』なんて繰り返しているのはそのせいだ。

続いてクレインの能力は、植物や動物と会話が出来るらしい。  
会話と言うと少し語弊があるが、まあ大して変わらないのでいいだろう。

この辺もクレインで無ければわからないが、まあ本当だろう。  
クレインは嘘を吐くような子じゃないし、なにより能力がクレイン

にぴったりだ。

植物や動物と会話するなんて、なんともほのぼのとした能力だ。

恐らくクレインの能力は、『植物』や『動物』といった括りではなく、『生物』を対象にした能力だと僕は思っている。

一度虫と会話しているところも見たことがあるので、間違いないと思う。

そして最後にフィーラの能力だが、恐らく『演算能力』の向上だと思う。

フィーラ自信が、使い魔になってからは難しい問題でも簡単に解けるようになった、と言っていた。

その他にも、戦闘での相手の行動の予想的中率がかなり高くなった、とも言っていた。

今まではこれまで戦ってきた中で得た勘を頼りに相手の行動を予想していたのだろう。

しかし今は、相手の癖や一定の行動パターンを見切り、それを計算して次にどう動くかなどを予想しているのだ。

3人の中では最も強力な能力だ。

今までわかったのはこれだけだが、まだ何かあるのかもしれないし、無いのかもしれない。

まあわからない事をいつまでも考えていてもしょうが無いだろう。

わからない事と言えば、ノイ達が使え魔になった日から、ある異変が起きた。

それは、クレインとティファニアが系統魔法の練習を始めたと言うことだ。

アンダルージャ家では、一日3時間の授業を行っている。



これに普段から出ているのは、僕、ノイ、クレイン、フィーラ、ティファニアだ。

この家に住む子供は、生きていく上で必要な知識を勉強しなければならない。

まあこのルールを決めたのは僕だ。  
学はあるに超したことはない。

しかし、魔法の練習は各自やりたいようになっていく。  
やりたくない人はやらなくていいし、やりたい人には先生などを付ける。

僕は魔法を絶対的な物だとは思ってないし、ティファニアは頑張っても魔法が使えないのだから、魔法については厳しくない。

ティファニアは家に来て最初の頃は魔法の練習をしていたが、どんなにやっても出来ないで諦めた。  
それから特に魔法の練習はしなくなった。

クレインは精霊魔法を使えることで満足しているのか、系統魔法を覚えようとする素振りは無かった。

異変と言うことにノイとフィーラの名を出さなかったのは、簡単な話だ。

まずノイは普段から勉強も魔法の練習も頑張っている。

そしてフィーラは、家に来た次の日から真面目にやっていたので、元々そういう性格なのか、なにか裏があるのかわからないからだ。

クレインは使い魔になった事で何か思うところがあったのかもしれないが、ティファニアが系統魔法の練習をしている理由は全くわからなかった。

まあ、何かあるにせよ魔法の練習をするのは悪い事じゃないので、口を出したりはしていない。

そんな事を考えながら夕食を食べ終わった。

僕は少し時間が経ってから、お母さんの部屋を訪ねた。

「お母さん、ちょっと話があるんだけど」

「何だい？あらたまって」

僕はお母さんにトリスティン魔法学院に行きたい事を伝えに来たのだ。

「実は、来年からトリスティン魔法学院に留学しようと思うんだ」

「何だ、その事かい。それなら知ってるよ」

え？イマナンテ？

「ノイからとつくの昔に聞いてるよ」

どういう事だ？

ノイに話した事なんて……ハッ！

そうか……使い魔の能力か。

じゃあクレインとティファニアが系統魔法の練習をしていたのもそれが原因か。

僕について来るつもりだ……

「何があつたのかはわかった。それで、承認してくれるのかな？」

他に問題が増えたがとりあえず今の問題はこれだ。

「別にいいよ。好きにしな」

お母さんは投げやりのような答えを返す。

だけど、その目は暖かった。

「ありがとう、お母さん」

僕は精一杯の感謝を込めて頭を下げた。

「頭を上げな、照れるじゃないか」

「そうだね」

僕は頭を上げてお母さんの目を見る。

「ここからが問題なんだけど、ノイ達は僕について来るつもりだよ」

学力的、実力的にノイ達は文句なしで学院に入れるだろう。

ただ一人を除いて。

「それも聞いたよ。でも、ティファニアはダメだ」

「わかってる。魔法が使えない時点でどっちにしる無理だけど、それよりも問題なのはティファニアの正体」

そう、ティファニアは結局魔法が使えない。

それを理由として学院に行くのは諦めて貰うが、理由はもう一つある。

それはティファニアがハーフエルフであると言うこと。

亜人という点では、クレインとフィーラにも問題があるかのように思えるが、この二人は心配ない。

ティファニアと違い、二人は人間にそっくりだ。

しかも並大抵のメイジのディテクトマジックでは正体を暴けないだろう。

しかし、ティファニアは耳を見られれば正体がばれるし、仮にフェイスチェンジを使っていたとしても、ディテクトマジックをかけられたら終わりだ。

しかも本来のエルフの強みである魔法が使えない。

そんなエルフを見て人々が取る手段は、話し合いなどでは無いだろう。

今まで恐れていたエルフが目の前にいるのだ。

しかも魔法が使えない状態で。

何をされるかわかった物じゃない。

「そうだね……」

お母さんが悲しそうな顔をする。

「じゃあティファニアには僕から伝えておくから」

「ああ、任せたよ」

そして僕は部屋を出た。

翌日の朝、僕はクレインと一緒に馬車に揺られていた。

魔法学院の件はもう全員に話してある。

ティファニアは拗ねてしまったが、また旅行に連れて行く事を約束したら機嫌を直してくれた。

現在僕たちはツェルプストー家に向かっている。

アングルージャ家は、この2年で大幅に力を付けた。

主に財力的な面で、だ。

それというのも、とうとうあの『石』が完成したのだ。

長い時間をかけてコツコツと作っていき、フィーラの力を借りて1年前ようやく完成したのだ。

商品名は、『温水石』『暖風石』『冷風石』『水風石』だ。（効果は7魔参照）

この『石』は精霊魔法を使って作られているが、表向きは系統魔法によって作られていることにしている。

精霊魔法のことなどがバレると、ロマリアがうるさそうだ。

『偉大なる始祖ブリミル様が残した系統魔法によってこの石は作られている。そしてその

系統魔法を操る貴族は素晴らしい』というキャッチコピーを付けている。

こうすれば、プライドの高い大抵の貴族は何も疑わない

『自分は選ばれた存在だ』などと慢心するだろう。

数少ないまともな貴族には疑われるかもしれないが、この『石』はアカデミーで研究しても無駄だろう。

僕が数年も掛けて完成する事が出来ず、フィーラの強力な精霊魔法によってやっと完成した『石』だ。

それをアカデミーごときに研究されても何の問題も無い。

しかし、この『石』は元々平民の為に作っていた物なので、それほど高くない。

結構売れてはいるし、利益にもなっているのだが、本格的にアンダルージャ家の財力を底上げした物は別にある。

それは

『カード』

カードと言っても色々な物がある。

今回僕が言っているのは、いわゆる『萌え』カードだ。

ゲーム性も全く無い、ただ鑑賞するだけのカード。

ヴァ スシュヴァ ツからゲーム要素を抜いた物だと考えてくれればいい。

そんなカードを一度作ってみて販売したところ、貴族に一気に売れたのだ。

ただ見て楽しむだけのカードだが、娯楽や萌えが欠如しているこの世界では画期的な物だったようだ。

とはいえ、僕が1枚1枚作っているため、種類はあまり多くない。

(一度出来た物は遍在で複製)

そのせいか、出回っている数の少ない物ほとんどない値段で取引されることもある。

特に一枚しか作って無いとんでもなくレアなカードは、狙われる危険性があるせいか誰が持っているのかもわかっていない状態だ。

そうしてアンダルージャ家の財力は瞬く間に上がっていった。

ちなみにカードと同時期に、萌えを重視したラブコメ小説を一作発売した。

そしてこちらも中々の売れ行きだった。

今まで僕が書いていたのは、ファンタジーやちゃんとした恋愛だけの小説などだったので、子供や女性に人気があったのだが、新しく書いた物は男性に人気があった。

それを始めたのが1年前で、それから少しずつカードの種類を増やしていき、萌えキャラが出てくるラブコメ小説を何冊か出している

内に、僕は結構色んな人から支持を受けるようになっていた。

とはいえ、それを売ったりしているのが僕だと言うことは国のお偉いさんしか知らないのも特に問題は無い。

子供だ、とか少年だとか、噂は流れているようだが、これ以外にも全く違う、実は絶世の美女らしいとかいう根も葉もない噂も流れているので特に気にすることも無いだろう。

こうして財力を上げていき、ゲルマニアの皇帝アルブレヒト3世にもそれなりに気に入られている。

国を発展させているし、アルブレヒト3世もそういった物が好きらしく、レアなカードなどをいくつか渡したら気に入られた。

まあ、国のトップと仲良くしておいた損は無いだろう。

ここ数年で力を付けて来たアンダルージャ家を疎ましく思っている者もいるが、国のトップと有力貴族と仲が良い上に、金という大きな武器を持っているアンダルージャ家に直接的にちょっかいをかけてくる者はいない。

たまに傭兵などが襲ってくる時があるが、死なない程度に痛めつけてから雇い主を聞き、潰せるような相手なら潰している。

とはいえ財力だけでやっていけるほど甘くは無い。

ツエルプストー家のように、財力もあり権力もあるような家を敵に回すと厄介だ。

今の所は心配ないけどね。

そう考えるとツエルプストー家を敵に回さなかったのは正解だった。まあ別にキュルケも叔父様も嫌いじゃないし、敵対することなんてあり得ないけど。

そんな事を考えている内に、馬車はツエルプストー家に到着した。

「良く来たな、ヴァイス、クレインちゃん」  
「お邪魔します、叔父様」

入り口で叔父様に挨拶をして、キュルケの部屋に向かう。  
それと、今回は特に話とかは無いらしい。  
キュルケの部屋の前に立ち、声を掛ける。

「キュルケ、ヴァイスとクレインだけど」  
「入って良いわよ」

すぐに答えが返ってきたのでドアを開ける。

「いらっしやい、二人とも」  
「お邪魔してるよ」  
「久しぶり、キュルケ姉」

部屋の中に入り、椅子に腰掛ける。

「トライアングルになったんだって？」  
「あら、知ってたの？そうよ、火のトライアングルになったわ」  
「よかったね、キュルケ姉！」

心からの祝福の言葉だろう。  
クレインもとんでもない魔法を使うが、少しも嫌みには聞こえなかった。

「ありがとね、クレインちゃん」  
キュルケも僕と同じように感じたようだ。  
それからしばらくは適当な会話をしていた。



「そついえばあなた達、今日は泊まりなのよね？」  
「そつだよ」

今日僕とクレインはお泊まりだ。

まあ別に初めてでは無いので緊張もしない。

今回クレインと一緒に来ているのは、私も行きたいとクレインが言  
ったからだ。

ノイを連れて来た事もあるし、特に問題ないだろうと思いきクレイン  
を連れてきた。

しかし重要な事を忘れていた。

クレインは血を吸うのだ。

クレインの事を知っているメイドさんなどは良かったが、新入りの  
人やクレインについてよく知らない人は、気の毒な程に焦っていた。

中には叔父様に、屋敷の中に吸血鬼がいます、なんて報告に行った  
人もいた。

叔父様やキュルケ、一部のメイドさんなど、事情を知っている人間  
からすれば、微笑ましいちょっとした事件だったが、他の人はそう  
でも無かったようだ。

この事件は後に、『勘違い吸血鬼騒動』と呼ばれるようになった。

## 第12魔（後書き）

萌えを追求する上で、カードを選んだ理由は特にありません。

フィギュアは使い古されている感じがしたのでメイン勢力としてあまり使いたくありませんでした。

そこでカードです。

ゲーム要素を抜いたのは、ヴァイス一人で作っているのだから、あまり種類が増やせない、だからデッキなどを作るのは難しいという理由からです。

それと、主人公であるヴァイスと、ヴァイ シュヴァル は関係ありません。

構想を練っている内に気がつきました。

次は閑話の予定です。  
あくまで予定ですよ。

そしてそれが終わったら魔法学院編に入りたいと思います。

## 閑話 1

時は遡り、場所はアーリア家。

現在アーリア家では大きな事件が起きていた。

アーリア家の跡取りである、ケイト・ド・アーリアの失踪である。

S i d e    グレイシャ

あの子は何か大きな事をするとは思っていましたが、まさか家を出るとは思いませんでしたね。

「グレイシャ様、ご気分は大丈夫でしょうか？」

先ほどから何人も使用人が部屋に入ってくる。

「大丈夫よ。あなた達は自分の持ち場に帰りなさい」

いつかこうなる日が来るような気がしていた。

そのせいか、驚く程に冷静だった。

残された手紙には探さなくていいと書いてあった。

きっとケイトにも何か考えがあるのでしよう。

しかし、ケイトは何のために家を出たのでしょうかね。

あの女の子のためでもあるのでしょうか、それだけとは思えません

ね。

どちらにせよ、家を出る程の目的があるのでしょう。  
ならばその目的、きっちりと果たしなさい。

S i d e    グロウス

やってくれたな、ケイト。

目的の為には手段を選ばない。

「まがりなりにも親子と言うことが」

その目的が平民の為と言うのが、私との大きな違いだな。  
しかし、探さなくて良いか……

こんな事を書いたと言うことは、アーリア家の力を借りるつもりは  
今後一切無いと言うことだな。  
ふん、いいだろう。

ケイト、それだけの覚悟あるのなら文句は言わん。

しかし絶対に結果は出すのだぞ。

この家を出てまで果たそうとして目的だ。  
出来ませんでした、では済まされんぞ。  
だがこれだけは言っておきたかったな。  
親よりも先に死ぬなよ、ケイト。

## Side ウィーデ

どうやら 그레이シャとグロウス殿はケイトを探す気は無いようですね。

自分で考えて決めた事のようにすし、口出しをするつもりはありません。

しかし、私は探させて貰いますよ。

ケイトはしつかりと考えた上で家を出たようですが、いざとなった時に助けられる大人がいなければいけませんからね。

ケイトがそう簡単に死ぬとは思いますが、念には念を入れておくべきですしね。

あの子は、ケイトは私の宝でもありますからね。

그레이シャ、グロウス、ウィーデの三人は夕食を食べていた。

そして食後、ケイトの話が始まった。

「私はケイトの好きなようにやらせたいと思います。きっとケイトはちゃんとした考えがあつて家を出たと思います」

「ケイトが何を考えていようが私の知った事では無い。しかし、跡取りが家出をしたなどと噂になつては、アーリア家の尊厳に関わる。

よってケイトは、オーク鬼の討伐に行ったが、不幸な事故で死んでしまった事とする」

グロウスは、反論は許さないといった風に処分を告げる。

「素直じゃないですね、あなたは。『ケイト・ド・アーリア』という存在がいつまでも残っていると、ケイトも動きづらいでしょうしね」

「何の事だ？私は家の事を考えている。ケイトの事など知った事ではない」

「そうですね、そういうことにしておきましょう」

グレイシャは全てわかっているといった風に微笑んでいる。

「ケイトは昔のグロウス殿の様ですね」

唐突にウィーデが呟いた。

「そうですね。あなただったら、私の為に幾つも手柄を立てて」

「昔の話だ」

グロウスは平静を装って答える。

アーリア家は元々それなりに大きな家だったが、グレイシャの家はそれを超えていた。

グレイシャに惚れたグロウスは、グレイシャの家に婚約を認めさせるため、沢山の功績を上げたのだ。

「二人とも愛し合っていたのですから、父も早く認めれば良かったのです。しかし、グロウス殿は自分の力でグレイシャを手に入れました」

「あの時はとても嬉しかったです。あなたが私の為に頑張ってくれて」

昔を懐かしむように二人は語っている。

「ケイトも方法は違えど大切な者のために動いた。それは評価出来る。私の息子だけある。しかし、その大切な者が平民と言う事は理解出来んがな」

「ケイトはそれでもあの女の子と行く事を選んだんです。上がるのは大変です。しかし下がるのだって大変です。これからケイトには沢山の困難が待っているでしょう」

「そうだな。しかしアーリア家は一切ケイトには関わらない」「はい」

グロウスの言葉に 그레이シャは頷いた。  
しかしウィーデは頷かなかった。

「それがあなた達の決めた事ならば文句は言いません。アーリア家は今後一切ケイトに関わらないと言う事で結構です。しかし、私個人はケイトを探します。連れ戻すような事はしませんが、ケイトが本当に大変な時は私が動きます」

「……いいでしょう」

ウィーデの言葉にあっさりと頷くグロウス。  
子を心配しない親はいないのだ。

「それでは、私はケイトを探す人員を集めるのでこれで」

そしてウィーデはアーリア家を後にした。

「ケイト、強くなりなさい。私にも負けなくらい強く」

家を出た数日後の夜、ケイトことヴァイスはノイと共に森に居た。目的は盗賊を捕まえる事だ。

いきなり傭兵になれる訳も無く、かといってまともに働ける当てがあるわけでも無い。

そこで盗賊を倒し、自分が強い事をアピールしようと考えたのだ。それに、盗賊を捕まえれば謝礼金とかが出るかもしれないという考えもあった。

ヴァイスはこの時土のトライアングルなので、地面に触れればどこに人がいるのか何となくわかるような状態だった。

そして今は丁度盗賊を見つけ、奇襲を掛けようとしているところだった。

ちなみにノイが一緒にいる理由は、一人だと危ないからだ。この時のノイはまだ普通の女の子だ。

ヴァイスは小さく呪文を唱え、杖を振る。

すると盗賊の顔は水球で包まれる。

ご存じウォーターロックである。

表面が凍っているため、抜け出す事が出来ない。

実際この魔法は便利だ。

雑魚相手に殺さないように戦う時に役立つ。



ヴァイスは全員が窒息したのを確認すると、魔法を解除する。盗賊達を縄で縛り上げ、木に吊してその場を後にした。

翌日魔法衛士隊に盗賊のことを伝え、盗賊は捕まった。

子供が盗賊を倒した、という噂が広がり、興味半分でヴァイスを雇う貴族が出てきた。

とはいえ、お飾りのような物である。

大人の傭兵何人かがしつかりと雇われていて、おまけのような感じで雇われているのだ。

しかしある日、珍しく魔法を使う盗賊に遭遇した。

雇われていた傭兵達は一目散に逃げ出した。

結果ヴァイスが一人で捕まえる事になった。

それが原因で、大人が逃げ出した盗賊相手に一人で勝った子供傭兵が居る、なんて噂が一気に広がった。

少しは知名度があつた方がいいと思っていたヴァイスだが、ここでそれほど有名になるのは困ると言う事で、実家から大分離れた場所で傭兵をするようになった。

## 閑話1（後書き）

ヴァ「僕今回喋ってないんだけど……」

蛍夜「閑話なんだからいいじゃん。出番があっただけ感謝して欲しいよ」

ノイ「私なんてついで扱いだよ……」

蛍夜「いや、この時のノイは戦闘でまだ役にたたないじゃん？」

ノイ「がーん」

ヴァ「ノイが戦闘不能になっちゃたよ」

蛍夜「まあまあ、いいじゃん……どうでも」

ヴァ「ひ、ひどい。外道だ……」

蛍夜「そんなわけで、次回からは魔法学院編です!」

ノイ「どんな訳よ!」

ヴァ「あ、復活した」

蛍夜「……」

ノイ「無視!？」

蛍夜「それでは、さようなら」

ノイ「ちょっと！私の扱いが酷いよ！無視しないでよ！」

### 第13魔

あれから一年が経ち、僕たちは今トリスティン魔法学院に居る。式はすでに終わっていて、僕たちはソーンのクラスで席に座っている。

ちなみに、僕の右隣にはノイ、左隣にはクレイン、後ろにはフィーラが座っている。

「ノイ、この席順どう思う？」

「学院長が気を遣ってくれたんじゃない？」

たぶんそんなところだと思う。

実際、ノイやフィーラはまだしもクレインを入学させるのは結構大変だった。

知恵や実力はあるのだが、どうにも見た目的にキツイのだ。

その点ノイは僕より少し小さいだけなので問題なし。

フィーラに至っては一年前まで僕と大して変わらなかったのに、今ではキュルケレベルだ。

悪魔は自分の体の成長くらい操れるとか言っていた。

話を戻すが、クレイン入学を認めさせる為に結構な寄付をした。

権力で解決出来ない場合お金に頼るのは仕方無い事だろう。

まあそんな訳でアンダルージャ家の関係者はこの学院では結構立場が上なのだ。

現代で言うスポンサーみたいなものだ。

僕たちが全員同じクラスでしかも席が近いのは、そういった理由からだろう。

ありがたいから別に問題は無いけど。

それにしても……

キウルケはもうちょっと大人しくするべきだと思う。

式では席が離れていてよく見えなかったけど、確実にタバサにちよつかいを出していたはずだ。

タバサの件は丸く収まるからいいんだけどさあ、これから先大変だよ？

そんな事を考えていると、クレインが話掛けてきた。

「ヴァイスー、つまんない」

「学校はそういうものなんだよ」

かくいう僕もつまらないと思ってはいるけどね。

何かしらのイベントが起きないとつまなくてやってられないだろう。

と思っていたら先生が入ってきた。

なんかまずは自己紹介をやれだそうだ。

で、一人ずつ終わっていき僕たちの番が来た。

「ヴァイス・ド・アンダルージャです。趣味は読書。よろしくお願いします」

簡潔に終わらせて座る。

続いてノイの番だ。

「ノイ・ド・アンダルージャです。私の前に自己紹介したヴァイスの妹です。よろしく願いします」

ノイが自己紹介を終えると、数人の男子がノイを見ていた。  
どうだ、僕の妹は可愛いだろう！

ノイはタイプこそ違うものの、キュルケと同じくらいでモテるであろう容姿だ。

まあ、こんな奴らに渡す気は無い。

「クレイン・ド・アンダルージャです。先に自己紹介した二人の妹です。よろしくお願いします」

ノイに続きクレインも自己紹介を終わらせる。

とりあえず今クレインを凝視してる男子には制裁を与えておこう。

「フィーラ・ド・アンダルージャです。もうわかってると思います  
が兄妹です。よろしくお願いします」

フィーラは興味があるものに対しては、優しくったりフレンドリーだが、どうでもいいものに対しては凄い冷たい。

スタイルなどはキュルケに似ているが、性格は全く違う。

今フィーラを見ている奴らはお近づきになるのを諦めた方がいいだろう。

そんなこんなで自己紹介やらなんやらは終わり、寮に行く事になった。

ノイ達が僕の使い魔である事は、オスマン学院長と教師しか知らないの、当然男子寮女子寮に別れる。

ノイ達は三人で一つの部屋で、僕は一人だ。

その後校舎内などの案内をされてから、寮に戻る。

これで今日の予定は終わり、後は休むなりなんなり好きにしろとい

うことだ。

ノイ達は当然のように僕の部屋にやって来た。

「私達もゲルマニアでは有名だけど、トリステインではあまり知られてないみたいだね」

「いや、たぶん二つ名は知られてるけど、名前は知られて無いだけだと思う」

ノイの言葉に注釈を入れる。

何の話かと言えば、僕たちの二つ名の話だ。

オーク鬼とかを討伐しにいたりしていて、その時に付いた二つ名があるのだが、これがゲルマニアでは結構有名で、その二つ名を持つ者に会ったら絶対に戦うとか噂されている。

まず僕の二つ名は、『爆水』。

基本的にウォーターエクスプロージョンで殲滅する事が多かったために付いた二つ名だ。

次にノイの二つ名は、『鋼鉄』

鋼で作られているゴーレムなどを操ることからそう呼ばれている。どうやって鋼のことを知ったのか疑問に思うだろうが、例の使い魔の能力だ。

その所為で僕の頭の中にある合金とかは一通り作れる様になっている。

続いてクレインの二つ名は、『風妃』

竜巻とかで豪快に相手を殲滅するのがクレインの戦い方の基本だけど、風に舞い戦う姿がとても美しいという理由からこうなった。

最後にフィーラの二つ名は、『獄炎』

一瞬で草原を火の海に変えたりする所からこの二つ名付いた。  
悪魔に地獄の獄とは……

そんなわけで、結構派手な戦い方をしていた所為か、畏怖の対象と  
かになっている。

僕たち四人の事をまとめて死屍しじの兄妹なんて言われている。

四人兄妹で更に四つの系統を使っている事から、四四の兄妹となり、  
当て字で死屍の兄妹となったのだ。

その兄妹に目を付けられれば、死んで屍になるという意味があるら  
しい。

こんな凝った設定をこの世界の人達がやるか？と思いつけた事があ  
り、ある結論にたつした。

間違い無くロリッ子（神）の仕業だ。

そう考えた瞬間にロリッ子（神）の声が頭に響いてきたのだ。

（よくわかったわね。あなたが考えている通り、私が考えて噂を流  
して上げたわ。格好いいでしょ？）

格好いい？

こんな明らかに中二病な名前が？

それを直でロリッ子（笑）には言わなかったけど、センスやばくね  
？とかなり思った。

まあそんな裏話はさておき、これからの計画を話会う。

「どうするのヴァイス？二つ名はばらしちゃってもいいの？」

「別に問題ないでしょ。それを知ったらバカな連中もちよっかい出  
そうとは思わないだろうし」

「じゃあ魔法はー？」



「それはある程度抑えて。学院にはスクウェアってことを話してあるけど、あんまり強すぎると変な疑いをかけられるかもしれないからね」

「たしかにそうね。それと、クレインに言っておくけど、魔法を使う時は杖を持ちなさいよ?」

「わかってるよー」

「僕からも最後に一つ注意しておくけど、魔法だけじゃなくて身体能力もある程度抑えてね。ノイもそうだけど特にフィーラだよ」

「わかってるわよ」

「ならいいんだけどね。じゃあ、もう今日は帰りな?」

三人を女子寮に帰し、タバサとキュルケの事を考える。

決闘フラグはもう立っているだろうから、防ぐべきはキュルケの衣装破損かな?

タバサの方は新しく買ってあげればいいし。

そうと決まれば、僕が動くのは舞踏会だけかな?

そして翌日、予想通りキュルケはクラスメイトの男子に色仕掛けをした。

補足しておくとその数は三人。

その三人はキュルケに交際を申し込みキュルケは承諾した。

で、その三人は決闘騒ぎを起こして一人が勝ち残ったわけだけど、キュルケはまた彼氏を作っていた。

うん、なんかもう酷いね。

実際に見てみるとこれはキュルケにも非があるなと思ってしまった。だからといって見捨てるつもりはないけど。

さてさて、キュルケの方は無事フラグも立ち、順調に進んでいる。やっぱり僕としてはタバサとキュルケには仲良くなって貰いたい

ら、決闘はやってもらう。

そしてタバサの方の決闘フラグが立つのは風の最初の授業。  
つまり今だ。

「今年の新生は不作だ」

わかっていると思うけど、これはギトー先生だよ。

スクウエアが四人も居るのに不作なんて頭がイカレテルんじゃないだろうか？

「入学書類を見たら、ほとんどがドットメイジではないか。ラインがやっと数名。トライアングルに至っては皆無だ。そして疑わしいがスクウエアが四人」

それを聞いた生徒たちは騒然としている。

誰だ？とか、本当か？なんて声が幾つも上がる。

キュルケだけは知っているので涼しい顔をしている。

タバサも無表情のままかと思い視線を向けると、少しだけ表情が変わっていた気がした。

「ヴァイス・ド・アンダルージャ、前に来い」

「はい」

面倒だなあ……

何をやらせるつもりだろうか？

「得意な系統は何だ？」

「水ですが？」

「そうか、ではフライをやってみろ」

結局フライをやらせるなら得意な系統を聞く必要ないだろう。  
この先生は何がしたいんだか……

「フライ」

面倒くさかったので、さっさとルーンを唱え空を飛び回った。

「これでいいですか」

「ああいいぞ。どうやら本当にスクウェアのようだな」

速度と高度から判断したのだろう。

確かに今僕は普通のスクウェアメイジが出せる程度の速度で飛んだ  
しかしそれは、全く本気ではない。

これが意味することはつまり

ペンタゴンクラス

にはなっていないです。

思わせぶりに言ったが別にペンタゴンにはなっていない。

あと少し、残り一枚の壁を上るだけって感覚はあるんだけど、それ  
がどうにも超えられない。

でも手加減していたのは本当。

「今の様に飛ぶんだぞ。では飛んでみる」

ギトー先生はそう言った。

どうやら僕の実力の確認とお手本を兼ねていたようだ。

性格は悪いが、教師としての仕事はちゃんとこなすようだ。

そして、この授業で僕レベルに飛べたのはクレインとフィーラだけだった。

ノイは土のスクウェアなので、流石に僕たちにはついて来れなかったようだ。

今回の授業でアングルージャ家の人間は全員スクウェアクラスである事が知れ渡った。

あのタバサに嫉妬したヴィリエも、スクウェアにはちょっかいだそうとはしなかったみたいだ。

やっぱりタバサには嫉妬したけどね。

そしてヴィリエはタバサに決闘を申し込みあっさりやられる。

こうしてちやくちやくとフラグは立っていき、とうとう舞踏会の日だ。

ちなみに、ノイ達はだれとも踊ってない。

誘いに来る上級生はいるのだが、片っ端から断っているのだ。

上級生も、相手が下級生とは言えスクウェアである事を知っているようで強引に誘ったりはしていない。

とはいえ、来るには来るが大した数ではない。

ノイ達は普通のドレスに身を包んでいるわけだが、キュルケがかなり挑発的なドレスを着ているのだ。

そっちに人が集まっっていて、あまり他の女の子は誘われていないように思える。

僕としてはノイ達の方が可愛いけどね！

復讐グループのリーダー格である、トネー・シャラントの事を観察していると、何か合図の様なものをだした。

僕はさりげなくキュルケに近づく。  
そしてキュルケの服が破けた。

「きゃあああああ！」

そう悲鳴を上げたのはキュルケではなく近くにいた女の子だった。  
キュルケをエスコートしていた美形の二年生は鼻血をだしてぶっ倒れる。

そこへ魔法を掛ける。

「ウォーターミラージュ！」

この魔法は、以前僕がアーリア家を抜け出す際に使ったものだ。  
対象を水の膜で包み、光を屈折させて周りからの視認を阻害する。  
今仲にいるのは僕とキュルケだ。

「キュルケ、大丈夫？」

僕は後ろを振り向かないように声を掛ける。

「大丈夫だけど、なんなのこれ？」

「これは簡単に言えば周りから姿が見えなくなる魔法だよ」

そう言って外を指さす。

外では、キュルケが突然消えたのでパニックになっている。  
そしてそれをノイ達が鎮めている。

「誰がやったのかしら？」

「知らないよ。ほら、早く寮に行くよ」

キュルケの手を引いて女子寮に走る。

キュルケの部屋にたどり着くと、魔法を解いた。

「じゃあ僕は一足先に戻ってるから」

そう言い残して寮を出る。

会場に戻ると、混乱は収まっていた。

「ミスタ、アングルージャ、説明して貰えますか？」

教師に何が起きたのかを聞かれ、自分が寮に送り届けた事を説明した。

教師は納得し、生徒達に軽い説明がされパーティーは再開された。

それから数日後、ヴィリエやトナー・シャラントが髪と服を燃やされて、塔から逆さづりにされた事件が起きた。

ヴィリエ達は自分達からぶら下がったと主張しているようだ。

それから更に数日後、キュルケからその話を聞きタバサに本をプレゼントした。

それまでタバサに本をプレゼントしなかったのは、タバサの本が燃やされた事は一般的な事件では無いからだ。

すぐに本をプレゼントしては、何故その事を知っているのかと思われるだろう。

そんな理由から少し遅れて本のプレゼントだ。

タバサは喜んでいたし良かった良かった。

ちなみにキュルケを寮に送った事について、パーティーが終わってから散々ノイとクレインに絞られた。

何故かフィーラはそんな二人を見て微笑んでいた。

### 第13魔（後書き）

どうも蛭夜です。

実は、もつと後に起こる事件のためにあるイベントをこなさなくてはならないのです。

そして、そのイベントをこなすには、転生者をもう一人出すのが一番手っ取り早いんですね。

そこでアンケートです。

? ……強い転生者を出して、ヴァイスのパワーアップイベントにもする。

? ……弱い転生者を出して、速攻で終わらせる。

? ……女の転生者にして、ヴァイスに惚れさせる。

? ……転生者とは違う方法でいく。

この中から一つ選んで下さい。

? だと作者的にはキツイですが、転生者を出して欲しく無いという人もいると思いますので選択肢に加えました。

悲しい事に票が一つも入らない場合は、?にするつもりですので。

それではご投票、お待ちしております。

## 第14魔

あれから数日が経ち、僕たちは普通の学院生活を送っていた。これといった問題は起きていないし、とても平和だ。

そんな中僕は、一つ思い出したことがあった。

ノイ達のルーンについてのことだ。

その昔、僕がまだアーリア家にいた頃、本か何かであのルーンを見たことがあるような気がするのだ。

僕の記憶が確かならばノイ達に刻まれたルーンは、神の影と呼ばれていた者の、使い魔に刻まれていたルーンだった筈だ。

最近それを思い出し、何度も図書館に足を運んでいた。

しかし全くと言っていいほど成果は上がらなかった。

僕の予想では、教師のみが閲覧を許される「フェニアのライブラリー」の中にあると思う。

そこで現在僕は、その手の話に一番食いつきそうなコルベール先生に本を見せて欲しいと頼んでいる。

「お願いしますコルベール先生。どうしても読みたい本があるので」

「それは私の一存では決められないのですよ。どうしてもと言うなら学院長に頼みなさい」

やっぱり普通に頼むだけじゃダメか……

「コルベール先生、神の影についてご存じですか？」

「聞いた事がありますね。しかしよく知っていませんでしたね」



少し食いついた。

この先生になら少しくらい本当のことを話しても大丈夫かな？

「実は、僕の妹がその使い魔であるかもしれません」

「なんですと！？それは本当なのですか！？」

うおう、引く位の食いつきっぷりだよ……

けど、後もう一押し。

「そうです。そこで知識が豊富で聡明なコルベール先生にお願いしているのです」

「ううむ。それが事実なら大変興味深いですね……いいでしょう、私が学院長の許可を取って起きましよう。そして後日、神の影について書かれた本を渡します」

とりあえず目的は達成したからよしとしよう。

そして僕は寮に戻る事にした。

寮の自室に帰ると、中にはクレインとキュルケとタバサがいた。

「クレイン、ノイとフィーラは？」

「モンモンの所にいつてるよー」

キュルケに化粧をしてもらいながら答える。

ちなみに、タバサは本を読んでいる。

「あなたはギーシュの所にいかないの？」

「今日はナンパするとか言ってたから僕はパスした」

「ふーん」

聞いてきたくせにどうでもよさそうだ。

さて、疑問に思っている人も多いだろうが、僕たちはすでにモンモンやギーシュと仲が良い。

先に接触してきたのはモンモンで、水の使い手として仲良くしました。ようとのことだった。

僕らはスクウェアなので、魔法を教えて欲しいとも思ったみたいだ。

それに便乗してギーシュは僕らに接触してきた。

その際ノイ達を口説こうとしていたので、一度土の魔法でボコボコにしたことがある。

僕は土のスクウェアでもあるので、それ以来僕を尊敬のような眼差しで見てくる。

そんなことがあり、原作の中心人物のほとんどと仲が良くなっている。

相変わらずルイズには接触していないけどね。

向こうから来たら仕方無いけど、わざわざこっちから関わりに行く気は無い。

「ヴァイス、この本の続き」

「それはまだ執筆中だからもう少し待って」

「わかった」

タバサは僕が書いたファンタジー系の本を読みあさっている。

幾つかのシリーズがあって、読み終わるたびに、続きは？と尋ねてくる。

僕が書いているのはそれだけじゃ無いのだが、タバサはそのジャンルしか興味が無いようだ。

「おわったわよ、クレイン」

「わーい！ありがとうー！」

「終わったの？ところで何のために化粧なんてしてるの」

「あなたのためだそうよ」

「どうーヴァイス兄！。好きになっただー？」

「化粧なんてしなくても元々好きだよ、クレイン」

化粧しないほうがいいような気もするし。

「あなた中々のプレイボーイよね」

「ヴァイス兄、今の告白？」

「なっ！そういうことじゃなくて……」

「可愛い反応ね」

「ヴァイス兄は初心だね！」

「……兄をからかうとは良い度胸だね、クレイン」

「え？」

フフフ、思い知らせてあげよう、この僕を怒らせるとどうなるか。

「こちよこちよこちよこちよ」

「あはははははは！苦しいつて！あはははははは！や、やめて！あははははははは！」

「フフフ、まだまだ終わらないよ。笑いすぎて腹筋が筋肉痛になるくらいまで終わらないよ」

「あはははははは！な、なにその地味な嫌がらせ！あはははははははは！」

「あー、私達はもう行くわよ？」

「そう？じゃあまた明日ね」

そしてキュルケとタバサは部屋から出て行った。

クレインは笑い疲れてぐったりしている。

しかしそれで終わるはど僕は甘くないのだよ。

「さて、第二ラウンドを始めようか？クレイン」

「い、いや。もう許して……」

「それで許す奴はこの世に存在しない！」

そして僕は再びクレインに飛びかかる。

そこへ

ガチャッ

ノイが入ってきた。

ベッドの上で怯えて服が崩れているクレイン。

それに飛びかかるうとしている僕。

現れる、ノイの中の鬼。

「お兄ちゃん、言い残す事はある？」

「ま、待て、ノイ。これには事情がある。」「シャラップ！」

「クレイン、お兄ちゃんが有罪か無罪かだけ答えなさい」

「え、ええと、どちらかと言えば有罪？」

「そう、わかった。残念なお兄ちゃん。さようなら」

その瞬間僕の意識は刈り取られた。

鋼鉄製のゴーレムにリンチにされたのだ。

僕が目を覚ますと辺りは真っ暗だった。

どうやら僕が寝ている内に夜になったようだ。

ろっすくに火を灯すと、机の上に紙が置いてあった。

【お兄ちゃん、勘違いでした。ごめんなさい。】

どうやらノイが書いたメッセージのようだ。

こちらにも非はあったのでよしとしよう。

中途半端な時間だったので、そのままもう一度眠った。

翌日の朝、食堂に行くとノイが謝ってきた。

「お兄ちゃん、昨日はごめんなさい。私、ちゃんと話も聞かないで」

「そのことならもういいよ。あの状況で勘違いしない方が難しいよ。さっ、ご飯を食べよう」

「うん、そうだね。ありがとうお兄ちゃん」

それから僕らは朝食を済ませ、教室に行き授業を受けた。そして放課後、僕の部屋にコルベール先生が訪ねてきた。

「ヴァイス君、神の影についての本を持ってきましたぞ」

「ありがとうございます。いつまでに返せば宜しいでしょうか？」

「次の虚無の曜日までに返してくれたまえ。それと、私にもわかったことを教えて欲しいのだが、いいだろうか？」

「わかりました」

そうしてコルベール先生は部屋を去った。

僕は目的の本を開く。

「神の影、神の影、あった！」

本のページをめくっていくと、神の影についての説明が書かれているページを見つけた。

内容は昔読んだものと大して変わらないようだ。

しかし、この本のメインは使い魔だ。

説明書きの次のページからは、使い魔について詳しく書いてあった。  
大まかな内容を抜き出すところだ。

神影の左手、スヴィーウル。

武器を無より創造し操っていた。

主の考えを理解し、絶妙なコンビネーションを見せていた。

神影の右手、アルスイオーヴ。

全ての生き物の言葉を理解し、従えていた。

生き物の成長を自在に操っていた。

神影の頭脳、ミヨズヴィトニル。

高度な演算能力を誇っていた。

人の心に小さな感情を生み出していた。

大体こんな感じだった。

そして予想通り、全てのルーンがノイ達のルーンと一致していた。  
原作には存在せず、僕たちに影響がある。

それはつまり、またしてもロリツ子（馬）の仕業だろう。

本当に余計なことをしてくれる。

この力がロマリアなどに知れたら、確実に利用しようとしてくるだろう。

とりあえずノイ達には話した方がよさそうだな。

学院関係の協力者としてコルベール先生にも話しておくか。

僕は能力などの大切な所をメモに写し、本を閉じた。

能力面から見てもノイ達が神影の使い魔である事に間違いはないだろう。

無からの武器の創造などは、今までそういうことを考えなかったために使えなかったのだろう。

つまり、意識的に武器を創造するといった感じで考えれば、武器を作り出せるということだろう。

とりあえずこの辺は実験が必要だ。

もう一つ確認したい事は、僕が神の影であるのかどうか。

確かにノイ達は神影の使い魔だ。

しかし僕が神の影であるのかはわからない。

もうすぐスクウェアを超えそうな辺りを見ると、たぶんそうなのだろうけど。

他にも詠唱必要無しとか、同時に複数の魔法が使えるとかがあった筈だ。

その辺も確認しなくてはならない。

原作のルイズの様に浮かれてはダメだ。

この力がどれほどであるのかをしっかりと確認し、どんなことに使えるのかを理解しなければならない。

そうするとまずはノイ達に話をした方がいいかな？

そして僕は許可も取らずに女子寮に入っていた。

この時の僕は神の影についてのことと頭がいつぱいだっただろう。  
当然教師にも説教されて、更にノイ達にも説教された。



## 第14魔（後書き）

喜ばしい事にアンケートに票が入っています。

そこで、希望が二つあったので選択肢を追加したいと思います。

女の強い転生者を出し、パワーアップイベント＋主人公に惚れさせる。

これを？にします。

それと現在の票数です。

？  
∴ 4 票

？  
∴ 4 票

？  
∴ 5 票

？  
∴ 5 票

？  
∴ 2 票

複数投票のものも、数として数えているので少し多めになっていると思います。

もしも迷っている場合は、複数投票でも構いません。

現在は？、？がリードしていますね。

それではまだまだご投票お待ちします！

## 第15魔（前書き）

ちよつとした募集が最後にあります。

## 第15魔

虚無の曜日。僕はコルベール先生に本を返し、出かける準備をしていた。

使い魔のルーンについては、想像通りで間違いなかった。

軽く能力の説明をしておこう。

ノイの能力は無からの武器の創造と、主の考えを理解する。

一つ目に関しては、言葉通り武器を生み出す能力のようだ。

ただし、しっかりとイメージをしなければならぬようで、複雑な武器を生み出すのは難しいようだ。

また、生み出した武器はいつまでも存在するのではなく、いずれ消えてしまう。

イメージがしっかりしているものほど長く存在するようなので、銃などの重火器よりは、剣や槍の方が長く使える。

二つ目の能力は、昔から顕在していた能力なので今更説明することもないだろう。

クレインの能力は、全ての生き物の言葉を理解し従える。

それともう一つ、生き物の成長を自在に操る。

全ての生き物の言葉を理解するという能力は昔から使っていた。

それと同時に、昔からクレインは色々な生物に好かれていた。

従えるというのは、無理矢理支配するのではなく、好意的になるくらいのものだろう。

クレインに明確な敵意を持っている相手には、効果がないと思われる。

二つ目の生き物の成長を自在に操るというのは、成長速度のことのようだ。

植物で試してみたが、縮んだり小さくなったりはしないが、もの凄

い早さで成長したりはした。

これは成長速度を速めたからだと思われる。

時間がなかったので、成長速度を緩めるのは実験出来なかったが、恐らくこれも可能だろう。

一つ目と二つ目の能力を応用して、植物を自在に操る実験をしていた。

クレインは植物に、僕を絡め取るように育って欲しいと伝えながら、成長速度を速めた。

すると、指示通り植物は、僕を拘束した。

精霊魔法にも植物を操る様なものがあるが、あれはあくまで操っているだけだろう。

クレインは種さえ持っていればどこでも植物を武器に出来るのだ。しかしクレインの能力だけでは、すぐに植物が枯れてしまうので、精霊魔法と同時に使うのが望ましい。幸いクレインは精霊魔法も使えるので、護身のための技としては充分に強力だ。

フィーラの能力は、演算能力と感情を発生させる。

演算能力に關しての説明は必要無いだろう。

感情を発生させるという能力は、本当に小さな感情を発生させる程度のような。

試しに、楽しいという感情を発生させたが、微妙だった。

しかし、悲しいという感情は違った。

最初は大きく変わらなかったが、じわじわと悲しいと思うようになっていた。

どうやらこの能力は、現状と反対の感情ほど強く効果が現れるようだ。

僕はノイやクレイン、フィーラと学院にいて普段から少なからず楽しいと感じているので、その上に更に楽しい感情を発生させられても大して変わらなかった。

しかし、全く悲しいと思っていない状態で悲しい感情を発生させられると、かなり効果があった。

この他にも、怒りや嫉妬、憎しみなどの感情も効果があった。すぐに消して貰ったのでそれほど大きな感情にはならなかったが、それでもそういう『負』の感情が生まれた。

この実験結果だけでは、負の感情ほど効果があるという感じに思える。

そこで、別の人間に楽しさや信頼の感情を発生させ、その効果を観察することにした。

幸いトリステイン貴族はプライドが高いので、嫉妬などの感情をもっている奴はゴロゴロいた。

その中の一人に、尊敬の感情を発生させた。

最初はあまり変わらなかったが、次の日から嫉妬していた対象への態度が変わった。

この結果から見て、フィーラ 능력は現状と反対の感情を発生させるということがわかった。

実はもう一つ面白いことがわかったのだがそれはまた別の機会に説明するとして。

能力の確認も出来たので、問題なくコルベール先生に本を返した。ちなみに、大したことではないのだが、僕も神の影ということがわかった。

杖がなくても、魔法の発動をイメージすれば魔法が使えたし、同時に幾つもの魔法を使うことも出来た。

身を守るための手段が強力になったとしか思っていないが、国には知られたくない。

知られれば絶対に戦争に使われる。

この世界にいる時点で戦争は免れないが、その中でも危険なところで使われるのは間違いない。

まあ、神の影っていうくらいだから、目立たずひっそりとしていれば大丈夫でしょ。

そんなことを考えてる内に支度が終わった。  
そこにタイミングよくクレインがやってきた。

「ヴァイス兄ー、こっちは終わったよー」

「僕も今終わったよ。じゃあ行こうか」

クレインと軽い話をしながら歩く。

学院の外にでると、クレインは口笛を吹いて風竜を呼ぶ。  
ちなみにこの風竜は、クレインの使い魔ではない。

ただ単に仲良くなった風竜だ。更に補足するなら韻竜。  
バツバツサと羽ばたき、大地に降り立つ風竜、フラン。

「フラン、ガリアまでよろしくねー」

「かしこまりました、お嬢様」

フランはクレインの執事みたいなものだ。  
性別は だけどね。

さて、疑問に思っている人のために説明すると、僕たちは今からガリアに行く。

しかも許可を取らないで風竜で乗り込むのだ。

乗り込むと言っても別段なにか攻撃をしかけるわけではない。

僕たちが向かうのはガリアのサビエラ村。

この時点で何をしに行くかわかった人は凄いよ。

「ほらー、ヴァイス兄ー、早く乗ってー」

「あ、ごめん」

クレインは既にフランにまたがっていた。

僕はクレインの後ろに乗る。

男としてどうなんだと思ったかもしれないが、フランはクレインの言う事しか聞かないのだからしょうがない。

「それじゃー行くよー」

クレインの声を合図にフランは飛び上がる。

そして大空の中を飛ぶ。

フランの飛行速度は速い。当然僕たちのフライよりもだ。しかしそんな速さで飛ぶ生物の上に普通に乘っけていられるわけもなく（クレインとフィーラは例外）、僕は風の魔法で体を支えている。

それからしばらくフランは黙っていたが、急に速度を落としてクレインに声を掛ける。

「そろそろガリアに入ります。このまま飛び続けると見つかってしまいます」

「だってー、ヴァイス兄ー。どうするー？」

「僕の魔法で見えなくするから大丈夫。でも早く飛びすぎると音とかでばれるかもしれないから、ここからは速度を落として」

「わかったー？フラン」

「かしこまりました、お嬢様」

フランに指示を出す場合、クレインを中継しないといけない。なんとも面倒な竜だ。

つと、そんなことより魔法を使わなくちゃ。僕は急いでウォーターミラージュを発動する。

これでとりあえず国際問題になることはない、と思う。

ガリアに入ってから三十分位でサビエラ村付近に着いた。

そこでフランから降り、歩いてサビエラ村に向かう。

「ねー、ヴァイス兄！。どうしてガリアに来たのー？」

「クレインの仲間に会ったためだよ」

「へー」

そう、今回の目的は吸血鬼であるエルザに会う事だ。

エルザが人間の血を吸い始めるのは、サイトが召喚される半年前だ。だから今はまだ大丈夫のはずだ。

そして出来ればアンダルージャ家に迎え入れたいと思っている。

クレインと話ながら歩いて数分すると、サビエラ村に着いた。

杖を持っているので貴族ということはわかったようだ。

ひそひそと聞こえそうで聞こえない声量で喋っている。

その中から一人の老人がやって来た。恐らく村長だ。

「貴族様、このような小さな村になんのご用でしょうか？」

「探してる人がいるんだ。エルザって言うんだけど、この村にいるよね？」

「は、はあ、エルザですか。確かにいますか」

「じゃあちよつと呼んでくれる？」

「は、はい。エルザ！こっちに来なさい」

そう声を掛けられて、金髪の少女はびくん！と身をすくめた。

嘘だつてわかつている演技ほど、見苦しいモノはないね。

「すみません貴族様。エルザは両親を貴族に殺されていて、貴族を恐れているのです」

「両親を殺された？村長の娘なんじゃ？」

「この子は一月ほど前に寺院に捨てられていたのです」

「そう、じゃあ杖は村長に預けるよ。クレインも」

「はーい」



僕とクレインは村長に杖を預けた。

その後、やっとエルザが出てきたが、話をする前にご飯を食べる事になった。

ご飯を食べた後、僕とクレインはエルザを連れて森の中に来た。

「さてと、用件はわかってると思うけど？」

「……なんのこと？」

エルザは年相応の少女のようにとぼける。

「そつ、とぼけるんだ、吸血鬼のエルザちゃん」

僕の言葉を聞いた瞬間に、エルザの顔は険しくなった。

「……どうしてそれを？」

僕があまりにも自信たっぷりなので、嘘ではないと判断したのだらう。

そして今エルザが聞いた、それ、とは、まだ血を吸っていないのにどうして知っているのか。

そして何故自分がここにいいのかを知っていたか、だらう。

「僕のちょっとした情報網ってところかな」

「そうなんだ。……ふふ、でも大ピンチだよ、お兄ちゃん。こっちの正体を知ってても杖がないんだからね」

楽しそうに言ってくれるよ、全く。

「少しは頭を使いなよ、君の事を吸血鬼だと確信した上で杖を置い

てきてるんだよ？他にも手段を用意してるとは思わないの？」

「だからなに？人間なんて魔法使わなければ吸血鬼に勝ってる所なんてないんだよ」

自分の力に大きな自信があるようだ。

そしてクレインが全く話についてこれていない。

「まあいいや。僕は君を倒しにきたんじゃない。君を家族にしたい来て来んだ」

「まさか話し合いが別の手段なの？そんなの応じるわけないじゃん。今自分がどういう立場なのかわかってるの？」

やっぱり効果的に話し合いを進めるにはある程度力関係をわかって貰わないとね。

そろそろクレインに活躍して貰おうかな。

「吸血鬼が相手だと手加減が難しそうだから、クレインやってくれる？」

「この前のやつでいいー？」

「いいよ」

クレインの確認に答えると、エルザの体が地面に縛り付けられる。

「なっ！どういうこと！？」

クレインの能力と精霊魔法の組み合わせ。

植物を自在に育てて自在に操る。

更にクレインは精霊にも好かれやすい。

そして生物にも好かれやすい。

並大抵の精霊魔法では、クレインの拘束から抜け出すことは出来な

い。

つまり、クレインに森の中で勝負を挑んだのが間違いなのだ。  
森の中でクレインに勝てるのは、僕が知る限りフィーラくらいだろ  
う。

と言うより、あのフィーラでも勝てるかどうかはわからないだろう。

ブランドマスター

「まあ、森の支配者にあらがおうつてのが間違いだったね」

「ヴァイス兄ー、何それー？」

「偉い知り合いにそう名付けられたんだよ」

そう、クレインたちの能力を理解した翌日、ロリッ子（小）の聲が  
頭に響いた。

（私が用意した能力にやっと気づいたわね！私が格好いい名前を用  
意して上げたから感謝しなさい！そして私を崇めなさい！）

これも中二っぽいが、前回よりはましだ。

というか、これまで中二っぽいから嫌だなんて言っていたら、世の中  
のほとんどの能力名を否定することになるし。

「さて、話し合いを始めようか？」

「……わかったわよ」

「僕としては家に来て欲しい。君の考え方は嫌いじゃないからね。  
さつきご飯の時に言ってたやつ」

そう、詳しく説明しなかったが、エルザは僕に、生きるために生物  
を殺すのは仕方無いよね的な事を言ってきた。その際、吸血鬼だけ  
に絞らなかったが、亜人が生きていくために人間を殺すのも仕方無  
いんじゃないの？と聞いてきた。世の中にはそういう考えを否定す  
る人間絶対主義者がいるが、僕はエルザの意見に賛成だ。殺された

いとは思わないけど、そうなってしまったら仕方無いだろう。

「吸血鬼だって生き物だからね。何かを犠牲にしないと生きていけない。でも人間を犠牲にすると襲われる。危険だよな？だから僕の家に来なよ。血なら皆がくれるよ？一人から沢山じゃなくて、大勢から少しずつ貰えばいいんだ」

「……それを信じられる要素がないよ」

まあそうだよな。

いきなりそんなこと言われても信用出来ない。

けど、すでに同じ待遇を受けている仲間がいたらどうだろう？

「信じられるよ。だってクレイン……この女の子は、吸血鬼だからね」

クレインはエルザに近寄って牙を見せる。

「！……なるほど……だから精霊の力が……」

「理解したみたいだね。どうかな？悪くないと思うけど？」

「断ったら？」

「別にどうこうする気はないけどさ、人を殺したらその時点で国とかに目をつけられると思うよ」

「……わかった。一緒に行くよ」

うん、ものわかりがよくて大変宜しい。

僕たちはエルザの拘束を解いて村に帰った。

そして、エルザの血族に心辺りがあるから引き取ると伝えた。

エルザも、僕と一緒に行きたいと言った。

村長はそれで納得し、僕たちはサビエラ村を去った。

「僕たちはトリスティンの魔法学院で暮らしてるんだけど、エルザは僕たちの実家で過ごして貰うから」

「私を一人にしているの？何するかわかんないよ？」

「ありえないね。エルザはそれ位わかってるでしょ？」

僕たちの家で問題を起こすなら、サビエラ村で問題を起こすのと同じで変わらない。

変わるとすれば、僕たちの家で問題を起こした場合、僕たちに永遠に狙われることくらいだ。

「私たちの家で問題を起こすなんてー、自殺行為だよねー」

「……全くだね！」

エルザはまだノイよフィーラの存在を知らない。

ノイは最凶だし、フィーラは最強だ。

あの二人に比べれば、僕たちなんて可愛いもんだ。

「エルザ、我が家には絶対に怒らせてはいけない少女と、絶対に刃向かってはいけない少女がいるから。気を付けた方がいいよ」

「……？よくわかんないけど……わかった！」

そして僕たちは、エルザを紹介するために、トリスティン魔法学院に向かった。

## 第15魔（後書き）

はい、とうとう現れました、新たなハーレム要員候補、エルザちゃんです。

ヴァイスはエルザの考え方に賛成派で、作者自身も賛成派です。まあ難しい話は置いておきましょう。

アンケートの途中経過です。

? : 8 票  
? : 4 票  
? : 6 票  
? : 6 票  
? : 3 票

このアンケートを取っているイベントをどこに入れるか決めました。まだそこまでそれなりがあるので、アンケートはまだまだ続きます。ご投票お待ちしております。

ついでに、新しくクレインに付けられた、プラントマスター森の支配者。

これ以外にも、二つ名と能力の使い方と二つ名の付いた理由を募集します！

例えば、クレイン

二つ名：ドラゴンプリンセス四竜の姫

能力：沢山の火竜、風竜、水竜、地竜を襲いかからせる。

理由：クレインは生物に好かれやすいので、火竜、風竜、

水竜、地

竜を従えている姿から付いた二つ名。

オリジナルの能力は採用出来ませんが、水竜、地竜のような、ゼロ魔世界のオリジナルなら採用出来ます。

ついでに、オリジナル魔法でも大丈夫です。

能力と魔法を組み合わせで超強い技を考えちゃって下さい！

クレインだけでなく、ノイやフィーラのでも大丈夫です。

一応私が考えたノイとフィーラの二つ名もありますが、いいアイデアならば使わせて貰います。

アンケートと違って考えなければならぬので難しいかもしれませんが、応募してくれると嬉しいですね。

## 第16魔

フランに乗って空を飛び、僕たちは学院に帰ってきた。

フランは学院よりも少し離れたところに降りて、僕たちを降ろし住処に戻った。

フランから降りて数分歩くと、すぐに学院に着いた。

「クレイン、僕の部屋で待ってるから、ノイとフィーラを呼んできて」

「はい」

僕はエルザを連れて自分の部屋に戻る。

クレインが二人を連れてくる間に、エルザに我が家の勢力関係を教える。

「いい、エルザ。これから僕の妹である女の子が二人来るんだけど、その二人にはあんまり刃向かわない方がいいよ」

「……？なんで？」

「はつきり言うけど、エルザじゃ話にならないレベルの実力があるからだよ」

「へー、そんなに強いのか？」

エルザの顔が好奇心でいっぱいになりかけている。

このままでは確実に攻撃を仕掛けそうだ。

「エルザ、命が惜しければ今考えてることはやめな。特に背の高い方の女の子は、僕やクレインよりも強い」

「！……うん、わかった」



エルザはクレインに手も足も出なかったことを思い出したようだ。しかもそれよりも強いときた。

実際のところ森ではクレインの方が強いかもしれないが、それでもフィーラの実力はとんでもない。

その後も色々と家のことを教えていると、ドアが開いた。

「ヴァイス兄ー、連れてきたよー」

「何のよう？お兄ちゃん？」

「今日はどこかに行つてみたいんだけど、それに関してのことかしら？」

「めでたいことだよ。はい、エルザ、自己紹介して。」

「吸血鬼のエルザだよ！ヴァイスお兄ちゃんの妹になったから！」

エルザは元気よくそう言う。

言動が外見と合っているのだが、実際の年齢は結構高いはずなので、演技をしてるのだろう。

それか、長い間演技をしていて、こっちの方が自然になったのか。

「そう、クレイン。訳を聞かせて？」

「よくわかんないよー？ガリアに連れて行かれて、その子と戦って勝ったから連れてきたのかなー？」

「ヴァイス、何があつたの？」

絶対に聞かれることだと思つていたので、既に言い訳は考えてある。

「可愛いから連れてきた」

「……………」

ノイは無言でナックルを創造して、僕の顔面を殴り始めた。

フィーラはニヤニヤ笑いながら部屋を出て行つた。

「ちよつ、まつ、がつ、ごふつ、やめつ、は、話をつグハッ！」

「弁明の余地はないよ……お兄ちゃん」

「……………」

エルザとクレインがガクガクと震えている。  
顔を真つ青にしてノイを見ている。

「エルザちゃん。何をされたか正直に言ってみて？」

満面の笑みだ。エルザが気の毒なほど震えている。  
歯がガチガチ鳴っている。

「べ、別に、何もされてないよ……」

「正直に言ってみて？」

「ヒッ！」

エルザもまさかこんな恐怖を味わうとは思わなかったのだろう。  
ノイの表情は笑顔のまま凍り付いている。

「か、帰ってくる時に、ふ、風竜の上で腰に手を回された、かな……」

確かにやったけど！

結局何もしてないんだからいいじゃん！

「…………ごめんね、エルザちゃん。大丈夫、罪は償わせるから。クレイン、エルザちゃんをアンダー ज्या家に送って上げて」  
「は、はい……」

そしてクレインはエルザを連れて出て行った。

二人がドアを閉めるまで手を振っていたノイは、ドアが閉まると同時に僕に抱きついて来た。

殴られると思って身構えていた僕は、突然のことに頭がついていない。

「お兄ちゃん……」

「ど、どうしたの？ノイ？」

今気づいたが、ノイは微かに涙を流している。

僕は混乱していたが、とりあえずノイを落ち着かせようと、優しく抱きしめて、頭を撫でた。

「お兄ちゃんに言ってみな？どうしたの？」

「お兄ちゃん……死んでないよね……」

死んでない？どういうことだろうか？

今回だってそれほど苦戦はしなかった。

心配させるようなことをしたつもりはない。

そもそも死んでないとはどういう意味だろう？

死なないでなら言われても仕方無いけど。

「大丈夫だよ。僕は生きてる。いきなりどうしたのさ？」

ノイは涙をぬぐうと、僕に夢の話をした。

「夢を見たの。お兄ちゃんが、誰かに殺される夢。場所はよくわからなかったけど、さっきわかった。お兄ちゃんが今日行ってきたガリアの村。その近くにある森だった。お兄ちゃんの記憶にある場所と全く同じだった。だから凄く恐くなった。もしかしたらお兄ちゃ

んは、もう死んでるじゃないかと思って」

「そつか……。大丈夫、僕は死なないよ。ノイを、うつんノイたちを残して死んだりしない」

夢、か。でもどこか違和感を感じる。

本来夢は一度見た記憶を整理しているものらしい。

その過程で記憶がごっちゃになったりはするが、現実で見た事ないものまでは見れないと聞いている。

それともここでは違うのだろうか。

地球とは違うのだから何があっても可笑しくはない。

「夢は夢だよ、ノイ。大丈夫、大丈夫だから」

何があっても可笑しくはないが、そんなものに踊らされるつもりもない。

僕は夢に惑わされたりはしない。

ノイは安心したのか、僕の腕の中で眠ってしまった。

ノイは僕に抱きついたまま寝てしまった。

僕もノイを包み込むように眠りについた。

エルザを家に迎え、ノイが不吉な夢を見た日から、半年がたった。夢のことに關しては何もわかっていない。

一度、ロリツ子（神）に聞いてみたが、特に心辺りはないらしい。詳しく問い詰めるつもりだったのだが、忙しいらしく、あまり話を出来ていない。

だからとりあえずこの件は保留になった。

エルザに関しては完全に家になじんでいる。

僕、ノイ、クレイン、フィーラの順でローテーションを組んで、様子を見に行ったりしているが、これといった問題もない。

強いて言うなら、エルザとティファニアが何か企んでいるようだが、まあ大したことじゃないだろう。

今日は虚無の曜日だ。ずっと学院にこもっているのももったいないので、街に出かけることにした。

最初は一人で行くつもりだったが、寮を出る時にノイと出くわし一緒に行く事になった。

特に欲しいものがあるわけでもないのに、ぶらぶらと歩き続けた。

街は人で賑わっていて、それなりに活気もあった。

しかしそんな街でも、一皮剥けば治安が悪いところもある。

なぜそんなことを言ったかといえば、単純にその現場に居合わせ、そして人を助けたからだ。

恐らく貴族であろう女の子の声が聞こえたのだ。

貴族だと判断したのは、杖がどうのこうのと聞こえたからだ。

大方、魔法で追っ払おうとして失敗でもしたのだろう。そして杖を取り上げられた。

建物の間にある細い道から声が聞こえてきた。

僕はそこに入って行き、様子を見てみた。すると、予想通り女の子が捕まっていた。

予想に反していたのは、その女の子が、桃色の髪に鳶色の瞳だったということ。

ルイズだ。特別な関わり方をしたくないと思っていたルイズであった。

しかし、いくら何でもこの状況を見逃すわけにはいけないと思い、

柄の悪そうな男を蹴り飛ばした。

男どもを全員気絶させた僕は、即座にその場所を移動した。  
ちなみに、ノイはどこかの店に入っていた。

僕はなにこともなかったように、ノイの元に行った。

「何か欲しいものでも合ったの？」

「ううん、見てただけ」

「そっか、じゃあそろそろ帰ろうか？」

「いいけど、いつもより早いね？」

「クレインとフィーラに会いたくなっただんだよ」

「……そう」

無難な理由だったと思ったのだが、ノイは不機嫌になってしまった。  
しかし今はそんなことに構ってられないので、すぐに店をでた。  
顔は見られていないと思うので、大丈夫だとは思うが、この辺で鉢  
合わせするのはまずい。

僕は魔法を使い、姿を見せないようにして街を出て、学院に戻った。

夜、僕は厨房に来ていた。

「マルトーさん。使えなくなっただ釜はありますか？」

「ああ、あるぜ。だが何に使うんだ？」

「いずれくる友の為に少しやっておきたいことがあるんですよ」

「よくわからんが、いいぜ。持っていきな」

僕、というより、僕たち兄妹は、コックやメイド、その他平民の従  
者と仲が良い。

この学院に来た時から、いろいろとお裾分けをしたり、していた。  
僕としてはやっぱり、マルトーさんみたいないい人とは仲良くして

いたい。

とはいえ、最初は態度も硬くて、貴族と平民みたいな感じで接されていた。

厨房の人たちも、何を企んでいるんだ？みたいな感じで、心を開いてくれなかった。

しかし、二月ほど前に起きた事件以来は、すっかり仲良くなっていた。

事件と言っても、貴族からしたら大した事ではない。

メイドが一人、過労で倒れたのだ。

しかし、貴族は治療を受けられるが、平民にそんな余裕はない。

しかも、元々体が弱かったようで、結構危ない状態だった。

もうわかったと思うが、僕がその子を治癒して以来、仲良くなった。

それからは、ノイやクレイン、フィーラとも打ち解けていき、良い仲間になった。

貴族のつきあいは、どうしても社交辞令や家に関してのことが出てくる（キュルケとタバサは例外）。

しかし、平民はそう言ったものではなく、純粹に仲の良い人と一緒にいる。

だから、ノイたちも表面上だけの友達じゃなく、心から友達と思えるような友達を作って欲しかった。

さて、話が大幅にぶれたが、今回僕はこの大釜を使って五右衛門風呂をつくるつもりだ。

サイトが作っていたのを今日思い出したので、早速今日から用意することにする。

マルトーさんに言ったのでは、サイトの為に作ったように思われるかもしれないが、本当はそれだけじゃない。

僕は大人数で広いお風呂に入るのよりも、小さくても一人で入る方が好きだ。

だから用意したのだ。

今まで作らなかった理由は、忘れていたからだ。

ゼロの使い魔についての知識が、段々と薄れている。

最後に呼んだのが転生前なのだから、もう15年も読んでいないのだ。

大まかなことは覚えているが、細々としたことまでは覚えていない。それでも特に問題はないと思っているからいいんだけどね。

ヴェストリの広場の隅っこで、釜の中に水を張り、温める。

魔法でやっているの、かなり早く出来た。

手早く服を脱ぎ、木に掛けてお風呂に浸かる。

「ああ、いい湯だ」

やっぱり一人でお風呂に入るのはいいな！。

誰にも気兼ねしなくて良いしね。

「極楽極楽」

しばらくお風呂に浸かって体を温めた。

お風呂から出て、体についた水滴を魔法で飛ばして、服を着た。

服といっても、現代でいうTシャツみたいなものだ。

素材は違うが、形はそんな感じだろう。

水滴は飛ばしても次から次へと吹き出る汗は止められないので、しばらく薄着で散歩をした。

汗が止まると、ヴェストリの広場の隅っこに戻る。するとそこにノイがいた。

「あれ？ノイ？」



ノイはビクツと反応すると、こちらを振り向いた。

「あ、お兄ちゃん。こんなところにいたの？」

「ごめん、探してたのかな？もう帰るよ」

「そ、そう、ところで、これは？」

「これ？これはお風呂、ノイも入ってみる？なんてね、冗談だよ」  
「もう、お兄ちゃん」

僕はノイと話ながら、お風呂に張った水を地面に流した。  
そしてノイと一緒に寮の自室に歩き出した。

私は今、ヴェストリの広場の隅っこの茂みに隠れている。  
どうしてこんなことをしているかの前に、今日の私の行動を説明するよ。

今日はお兄ちゃんと街に出かけた。

お兄ちゃんは凄く焦って寮に帰ろうって言うから帰ったけど、本当はもう少しお兄ちゃんと街にいたかった。

帰って来てからはいつも通りクレインやフィーラと遊んでいた。

夜になって、お兄ちゃんに会いに行こうと思って男子寮に行くと、一枚のメモが残されていて、お兄ちゃんはいなかった。

メモには、「マルトーさんの所に行ってくる」と書いてあった。

私は急ぎ足で厨房に行き、マルトーさんにお兄ちゃんはどこか尋ねた。

しかしマルトーさんは知らないようで、お兄ちゃんにあげたものを教えてくれた。

その後は気分を落ち着かせる為に散歩をしてから帰ろうと思って、ふらふら歩いていた。

そうしたら、どこからかお兄ちゃんの声が聞こえた。

声をたどっていくと、なんとお兄ちゃんが釜に入っていた。

中にお湯が入っているようで、湯気が出ている。

私はすぐにそれがお風呂だと気づいた。

そして現在に至る。それにしてもお兄ちゃん、どうしてこんなことしてるんだろう？

お風呂ならもつと大きいのがあるのに……

ハッ！まさかお兄ちゃん……私たちの乱入を待ってるんじゃない！

ど、どうしよう……でもそれならこんな人目に付かないところで小さいお風呂作ってる理由も頷ける。

学院のお風呂じゃ一緒に入れないもんねっ！

「あ、お兄ちゃん、そんなに見ないで……ダメ、私たち兄妹だよ……あ、そんなところ触ったら……」

妄想中です

「でも……私お兄ちゃんなら……そんな、こんなところで大胆だよ……」

妄想中です

「お兄ちゃん……人が来ちゃうよ……え、見せつける？……もう、お兄ちゃん……仕方無いなあ……」

妄想中です

「ハッ！」

気づくとお兄ちゃんがなくなっていた。くっ！なんてこと！着替えシーンを見逃すなんて！

あ、でも、あのお風呂、お兄ちゃんが浸かってたんだよね……

「くっ」

で、でもこんなのよくないよ、うん。

……なんか喉が渴いたな！。でも飲むものないな！。あ、じゃあお湯を飲めばいいんだ！。

そう、これは仕方無いことなの。喉が渴いたの。うん、大丈夫、やましい気持ちはないんだから。

「あれ？ノイ？」

ビクッ！

私は混乱を気取られないように声の方向に振り向く。

「あ、お兄ちゃん。こんなところにいたの？」

「ごめん、探してたのかな？もう帰るよ」

「そ、そう、ところで、これは？」

「これ？これはお風呂、ノイも入ってみる？なんてね、冗談だよ」

「もう、お兄ちゃん」

そしてお兄ちゃんはお湯を流してしまった。ああ、お兄ちゃんの残り湯が……

部屋に帰ると、なぜかルイズがいた。

「あなた、今日街に出てた？」

「そんなことより、勝手に人の部屋に入るなんて非常識じゃない？」

正直そんなに関わりたくないからかなり冷たい態度になっている。

「うっ、それについては謝るわ。ごめんなさい」

「ま、まあ、いいんだけどさ。で、街にいたかどうか、だっけ？」

「そう」

どうしようか。ていうかこんなにあっさり謝るのも想定外。

ゲルマニア貴族に対してはもっと高圧的だと思ったんだけど。

僕がどう答えるか思案していると、ノイが喋ってしまった。

「いたけどそれがどうかしたの？」

どうやらノイは少しご機嫌斜めみたいだ。

しかしそんなにあっさりばらさないでほしかった。

「そう、じゃあやつぱりあれはあなただったのね？」

「……はあ。そうだよ。それがどうかしたの？」

今更言い訳しても無駄だろう。聞こえないようにため息を吐いて答える。

「ありがとう、助かったわ」

「へ？」

「それじゃあ、私の用事はこれだけだから」

そう言つてルイズは出て行つた。

まさかお礼を言うとはね。でもあれはマナー、いや、貴族としての誇りを守つたつて感じかな。

助けられたからしつかりとお礼を言う。ルイズは良くも悪くも貴族らしい貴族だから、お礼を言つたのだらう。

ルイズ特有のツンデレ反応もなかったし、恐らくちょっと助けられた程度にしか感じてない。

サイトにはもつと助けられるわけだし、まあ大丈夫だらう。

「ノイ、そろそろ帰りな」

「もう？まだ来たばかりだよ？」

「今日は疲れた。早く休みたい」

「仕方無いなあ。じゃあ、また明日ね」

そう言つてノイは部屋を出て行つた。

僕はさつさと着替えて、眠りに落ちた。

## 第16魔（後書き）

どうも蛭夜です。

イベントを入れる場所ですが、色々と考えた結果大分早まることになりました。

なので、アンケートは次回投稿までです。

いきなりの変更でしたが、期間はそれなりにあったので問題ないでしょう。

現在の票数です。

？	：	8	票
？	：	4	票
？	：	6	票
？	：	6	票
？	：	3	票

オリ魔法なども絶賛募集中です。

次回サイト登場予定です。

今回ノイが狂ったのは作者の悪ふざけです。

## 第17魔（前書き）

アンケートは？になりました。  
？と結構接戦だったんですけどね。

## 第17魔

月日は流れ、僕たちは二年生になった。

そして今日は進級に必要な使い魔召喚の儀式。

すでに大半の生徒は終わっていて、後は僕たちとルイズだけだった。

「ミス・ヴァリエール。次は君の番だ」

「わかりました」

そう呼ばれたルイズは、何度もサモン・サーヴァントの呪文を口にするが、何も現れない。

そして失敗を繰り返して数回、やっと成功して、一人の少年が呼び出された。

「あんた誰？」

混乱している少年に、ルイズは問いかける。

「誰って……。俺は平賀才人」

「どこの平民？」

やっぱり呼び出された少年は才人だったようだ。

僕は少し距離をとり、ノイたちに顔を向ける。

「あのサイトって人、本当に平民だと思う？」

ノイが僕にそんなことを聞いてきた。

服装などから判断して、ただの平民だとは思えないようだ。



「変な格好はしてるけど、そうなんじゃない？」

ノイたちは神の影については知っているが、虚無などについては知らない。

当然ティファニアの虚無だって教えてない。

というより、ティファニア自信虚無だとは知らないので、わざわざ知らせる意味はない。

「終わったみたいね。次はノイじゃない？」

「あ、そうだね。じゃあ行ってくるよ、お姉ちゃん」

さて、今違和感を感じた人は正しい。

ノイは今、フィーラの事を『お姉ちゃん』と呼んだ。

アンダールジャ家に来た順番は、ノイ、クレイン、フィーラだ。

しかし、フィーラが一番末っ子というのは、今の容姿では無理だ。前にも説明したが、フィーラは身長が大幅に伸びた。

髪も背中に届くくらいのストレートにしている。

なので、兄妹の順番は、僕、フィーラ、ノイ、クレイン、ということになっている。

「我が名はノイ・ド・アンダールジャ。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし使い魔を召喚せよ」

ノイが詠唱を終えたようだ。

そして光る何かが浮かび上がる。

その中から出てきたのは、アイルー。

そう、アイルーだ。

「ここはどこにや？」

「トリステイン魔法学院だよ、って言ってもわからないか……」

ノイが困った様はこちらを見た。

（知識はあるみたいだから、使い魔のことを説明すれば？）

（……そうだね。そうしてみる）

意識共有でノイと会話をし、アドバイスをする。

ノイはアイルーに向き直り、使い魔のことを説明した。

アイルーは、説明を理解したようで、よろしくにゃ！と言っていた。  
ノイの番は割と早く終わり、次はフィーラの番だ。

「我が名はフィーラ・ド・アンダルージャ。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし使い魔を召喚せよ」

フィーラが詠唱を終えると、光る何かが浮かび上がる。

しかしそれは、今までと違いかなり大きめだった。

そして姿を現したのは、竜。この世界とは違う世界の竜。

簡単に言えばリオレウスだった。

ノイの所にアイルーが来たあたりから何となく来るような気はしていた。

リオレウスは暴れようとしたが、フィーラの強烈な殺気に当てられて大人しくなった。

ちなみにこの殺気に気づいたのは僕とノイ、クレインとコルベール先生、そしてタバサだけだ。

フィーラは範囲をかなり絞っていたので、それなりの使い手でもなければ気づかない。

すんなりと契約を終え、フィーラは僕たちのところに戻ってきた。  
ちなみにサイトがめっちゃめっちゃ驚いていた。

「ヴァイス、この竜のこと知ってるかしら？」

「まあ、一応、ね。あとノイの猫っぽいのも知ってるよ」

「そうなの？あ、この子の名前はルーにしたよ」

「私のはリオよ」

「そ、そうなんだ。良い名前だね」

何か普通に本来の名前の一部から付いてるよ。

こういう時ほどの二人はただ者じゃないって思うよね。

さて、次はクレインだが、何となく予想はついていた。

モン　ンで風と言ったらクシャルダオラだろう。

「我が名はクレイン・ド・アンダルージャ。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし使い魔を召喚せよ」

詠唱が終わると、光る何かが浮かび上がる。

それは予想していたものよりも小さかった。

そしてその中から風が吹いたと思うと、ゲートが閉じた。

「何もいないよー？」

「おかしいですね、成功したように見えたのですが……」

いや、いる。クレイン、というより、他の人には見えていないようだが、確かにいる。

「どこを見ておる」

「？どこー？」

「ここじゃ」

音が発生していた場所の風が、不自然に動き出し、人の形になった。

「わしを喚んだのはお主じゃな？」

「そうだよー」

「わしを使い魔にする気か？」

「嫌なら仕方無いねー」

「わしが帰りたいと言っただら？」

「別にいいよー」

僕はもの凄く驚いた。クレインが呼び出したのは、恐らく風の精霊。というかどう考えても風の精霊だろう。

ちなみに精霊というと、普段そこらじゅうに散らばっているのも精霊だが、クレインが喚び出したのは、それよりも上位の精霊だろう。原作で言う、水の精霊のような感じた。

周りの生徒は、風を操るなにかだと思っているようだが、僕以外には、コルベール先生とフィーラは気づいているようだ。

「お主は純粋な奴じゃな。いいだろう、ワシが使い魔になってやろう」

「本当！やったー！」

「ほれ、早く契約の呪文を唱えんか」

「うん。我が名はクレイン・ド・アンダルージャ。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔とせよ」

そしクレインは、唇だと思われる場所にキスをした。

風の精霊にルーンが刻まれた様子は特にないが、何かあったのだらう。

「わしは常にお主の側にいる。わしの姿が見えずとも、助けが欲しい時はわしを呼べ」

「うん。わかったー、フリーゼ」

「フリーゼとは何だ？」

「名前だよー？」

「そうか、わかった」

そう言つてフリーゼは大空へ溶けた。

生徒たちは何がおきたかわからないといった表情だ。

それにしても、我が家の妹はどんな人間離れしていくな……ああ、吸血鬼と悪魔だった。

ノイは人間だけだね。ちなみに皆が教室に帰る時、サイトは気絶していた。

そして僕はその日、部屋を出る事になった。

それというのも、ノイたちが僕の使い魔であることは生徒に伝えたので、ノイたちが僕の部屋に来る事になったのだ。

そして今の部屋では狭いので、大きな部屋を一つ借りる事になった。ちなみに、ノイたちが僕の使い魔だとした貴族のガキ共の一部は、何か言おうとしたが、実力も問題なく、貴族でもあるノイたちには何も言えなかった。

そして大多数は、あいつらなら納得、で済ませていた。

翌日の朝、食堂に行くとルイズとサイトがいた。

ルイズにはハッキリ言つてあまり関わりたくないが、あの街でルイズを助けて以来は普通に友人関係なので、話掛けたりしても全く問題は無い。

そして僕はサイトに関わりたい。やっぱり本来なら主人公な訳だし、色々興味がある。

「おはよう、ルイズ、サイト」

「おはよう、ヴァイス。あなたはいいわね、自分の妹が使い魔なんて」

「そうだね、でも人間の使い魔だつていいと思うよ、ね、サイト」

「あ、ああ、ていうかお前誰？」

「ああ、ごめん、自己紹介してなかったね。僕はヴァイス・ド・ア  
ンダルージャ。ヴァイスでいいよ」  
「そっか、よろしくな、ヴァイス」

最初は良い感じだね。あ、ちなみにノイたちは置いてきた。  
女の子は朝の準備に時間がかかるんだよね。

僕はサイトを挟んだルイズの隣に座った。

サイトは床に座っているので、並びとしては、僕、サイト、ルイズ  
だ。

すると、ノイたちがやってきた。

「お兄ちゃん？珍しいね、ルイズとご飯なんて」

「そう？ほら、サイトに興味があったから。ノイの仲間みたいなも  
のじゃん」

「ん、確かにそうだね」

そう言ってノイは僕の隣に座った。

「なあ、ルイズ。あの子も使い魔なんだよな？」

「そうよ、それがどうかしたの？」

サイトがノイのことを見てルイズに尋ねる。

「なんであの子は普通に座ってるの？」

「ノイはね、貴族なのよ。ヴァイスの妹で、ヴァイスの使い魔なの。  
そして使い魔である前にここの生徒なの。しかも飛び級の。わかっ  
た？」

「ふーん」

サイトは不思議にそうにこちらを見ている。

兄妹にしては似てない、と思っているのだろう。

「僕たちは本当の兄妹じゃないからね」

「うお！びっくりした。エスパー？いや、魔法使いか」

「顔に書いてあったよ、似てないなあ、って」

「まじ？」

「まじまじ」

それでお互い顔を見て笑い合う。

やっぱりサイトとは仲良く出来そうだ。

そんなやりとりをしていると、クレインとフィーラも来た。

「ヴァイス兄、先に行かないでよー」

「珍しいわね、ヴァイスがルイズと一緒になんて」

「色々あつてさ」

説明がめんどくさくなったので適当に答えておく。

「なあ、ヴァイス、その二人も妹なのか？」

「義理のね」

「へー」

クレインとフィーラは、僕とノイの正面の席に座った。

そして、始祖ブリミルと女王陛下がささやかな糧がどつたらこつたらと言った。

ちなみに僕たちは兄妹はクチパクだ。その後にいただきますと言っている。

サイトはパン二切れではもの足りないようで、ルイズを恨めしそうに見ている。

「サイト、足りないならこれ食べな」

僕は自分の分の食事を、皿に分けてサイトに渡す。

「い、いいのか？」

「いいよ、僕は元々少食なんだよね。この学院のご飯は豪華すぎるよ」

これは本当のことである。家ではさっぱりとしたものをよく食べていたせいか、ここでの食事は脂っこくて困る。それはノイやクレインも同じで、いつもは最終敵にフィーラが全て食べていた。フィーラはエネルギーをかなり使うので、食べられるのなら食べておくらしい。

普段の食事の量でも問題はないみたいだけどね。

「ちょっとヴァイス、人の使い魔に餌をあげないでちょうだい」

「折角女王さまから貰った食事を無駄にする訳にもいけないでしょ？僕はもう食べれないから、食べたい人にあげるんだよ」

女王さまと言われるとルイズは弱い。ルイズは基本的に権力を振りがざしたりして相手を押さえ込んできたようなので、論破するのは容易い。原作でもルイズは理不尽なことで怒っていた。もしも立場が対等なら、サイトでも簡単に論破できるだろう。

「サンキュー！俺もヴァイスの使い魔になればよかったぜ」

「なんですって？」

「なんでもないです」

今のはサイトの失言だね。

食事が終わると僕たちは教室に移動した。



食堂には使い魔は連れ込めないが、教室は可能なので、ノイのルーがいた。

クレインの周りに風が吹いていたので、フリーゼもいるのだろう。リオは流石に連れ込めないので、シルフィードと一緒にいる。当然のように僕たちは原作組同じ教室だった。

ちなみに席は、僕を中心に右がフィーラ、左がクレインで、後ろにノイだ。

サイトたちの方を見ると、色々と質問をしているようだ。すると教室にシュヴルーズ先生がやって来た。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

それから原作通り、ルイズとマリコルヌが喧嘩をし、先生がそれを止め、土系統の大切さについて話した。そして先生が真鍮を錬金し、もったいぶって自分がトライアングルだと言った。しかし、このクラスには土のスクウェアがいるということは知れ渡っているのだ、大して関心されなかった。

そしてそれを聞き、サイトがルイズに質問をすると、私語は慎みなさいと注意され、先生に錬金をやってみると言われた。生徒たちはそれを止めたが、結局ルイズは教壇の前に立った。

「クレインは爆風をどうにかして、僕は爆発の被害を抑えるから」「はい」

ルイズが錬金の呪文を口にし、杖を振り下ろすと、案の定爆発した。僕はルイズと先生の前に水の壁を作り、爆発の被害から守る。

そしてクレインは、爆風を窓に向かわせるよう誘導した。こうして被害は抑えられた。

「今、水の壁を出したのと、爆風を誘導したのは誰ですか？」

先生は何事も無かったかのように問う。

「僕たちですが？」

僕とクレインが立ち上がる。

「ではあなたたちが、全員スクウェアという兄妹ですか？」

「はい、そうなります」

「皆さんも、彼らのように、咄嗟のことにも適切な判断を行えるように、精進しなさい」

結局その授業は中止となった。

ルイズは生徒たちに、成功の確率ゼロと言われ、サイトはそれを聞いて何か納得していた。

そしてルイズとサイトは壊れた機の修理をやらされている。

ちなみに僕たちがスクウェアということは一年のうちに知れ渡っていたので、特に騒ぐ人もいなかった。

数時間後、昼食の時間帯となり、僕たちはキュルケとタバサと一緒に食事をしていた。

途中、サイトがとぼとぼと食堂を出て行ったがまあ大丈夫だろう。しばらく経って、食事を終え、デザートが運ばれる時間になると、サイトは銀のトレイを持って、食堂に現れた。

そしてギーシュが、モンモンとかにぶつ叩かれて、サイトと口論になり、食堂を出て行った。

どうやら例の決闘のようだ。サイトがヴェストリの広場に向かった後、シエスタがやって来た。

「ヴァイスさん、お願いです、止めて下さい！サイトさんが死んじやいます！」

「決闘のこと？どうせあんなの遊びだから。ま、危なかったら止めるよ」

「ありがとうございます！」

僕はノイたちを連れて、ヴェストリの広場に着いた。

そしてギーシュが一体のゴーレムを出し、なにやらサイトに言っていた。

サイトはすでに怪我だらけで、ボロボロだった。

僕は地面に手をかざして、剣を一本錬金する。

「サイト！本気で戦うなら、これを使いな！」

僕はサイトのそばの地面に剣を投げる。

それを見たルイズが、こちらを見た。

「何考えてるの！これじゃあ本当に決闘になっちゃうじゃない！」

「すればいい。ギーシュ！！聞こえてる？」

「聞こえてるぞ」

「貴族が魔法を使うなら、平民が剣を使っても文句はないよね？そうじゃないと公平じゃないしね」

「いいだろう、確かに片方だけ武器を使うんじゃ不公平だしね。いいだろう、その剣をとりたまえ」

サイトは僕の投げた剣を取る。すると左手のルーンが光る。

そしてサイトは、一瞬で青銅のゴーレムを切り裂いた。

ギーシュは焦って残り六体のゴーレムを出し、五体のゴーレムにサイトを襲わせる。

しかしサイトはそれすらも簡単に切り裂く。  
ギーシュは残ったゴーレムを咄嗟に自分の盾に置いた。  
次の瞬間そのゴーレムもなんとなく切り裂かれる。

「ひっ」

ギーシュは顔面に蹴りを食らい吹っ飛んだ。

サイトはギーシュめがけて跳躍し、ギーシュの右横に剣を突き立てた。

「続けるか？」

「いや、恐れ入ったよ。参った」

サイトは剣から手を離し、少し歩くと倒れそうになった。

僕はそれを支え、治癒の呪文をかける。

サイトの傷はみるみる塞がっていき、傷は綺麗になくなった。

ちなみにこれは精霊魔法を使っている。

いくらスクウェアとはいえ、秘薬も無しにこんなにすぐ傷を治す事は出来ない。

ギャラリーは多いが、これが精霊魔法だとわかる人はいないだろう。  
僕はサイトを地面に寝かせ、広場を後にした。

## 第17魔（後書き）

蛍夜です。

使い魔についてのことですが、精霊って使い魔にできんの？みたいな突っ込みは受け付けません。作者がやりたかっただけです。

アンケートの結果は？ですが、票数はこちらです。

？  
… 12票

？  
… 4票

？  
… 11票

？  
… 6票

？  
… 3票

幾つかオリ魔法の案なども来ています。

とても感謝しています。

次に投稿するのは、アンケートで？が勝っていたらというIFです。

## あつたかもしれない物語（前書き）

番外編です。

アンケートで？が選ばれていた場合、こつこつ子が出てきましたという、今更何の意味が？的なものです。

なので過度な期待はしないで下さい。

ちなみに、使い魔召喚のところなので、重要なところ以外は17魔と類似しています。

## あつたかもしれない物語

月日は流れ、僕たちは二年生になった。

そして今日は進級に必要な使い魔召喚の儀式。

すでに大半の生徒は終わっていて、後は僕たちとルイズだけだった。

「ミス・ヴァリエール。次は君の番だ」

「わかりました」

そう呼ばれたルイズは、何度もサモン・サーヴァントの呪文を口にするが、何も現れない。

そして失敗を繰り返し返して数回、やっと成功して、一人の少年が呼び出された。

「あんた誰？」

混乱している少年に、ルイズは問いかける。

「誰って……。俺は平賀才人」

「どこの平民？」

やっぱり呼び出された少年は才人だったようだ。

僕は少し距離をとり、ノイたちに顔を向ける。

「あのサイトって人、本当に平民だと思う？」

ノイが僕にそんなことを聞いてきた。

服装などから判断して、ただの平民だとは思えないようだ。

「変な格好はしてるけど、そうなんじゃない？」

ノイたちは神の影については知っているが、虚無などについては知らない。

当然ティファニアの虚無だって教えてない。

というより、ティファニア自信虚無だとは知らないので、わざわざ知らせる意味はない。

「終わったみたいね。次はノイじゃない？」

「あ、そうだね。じゃあ行ってくるよ、お姉ちゃん」

さて、今違和感を感じた人は正しい。

ノイは今、フィーラの事を『お姉ちゃん』と呼んだ。

アンダールジャ家に来た順番は、ノイ、クレイン、フィーラだ。

しかし、フィーラが一番末っ子というのは、今の容姿では無理だ。前にも説明したが、フィーラは身長が大幅に伸びた。

髪も背中に届くくらいのストレートにしている。

なので、兄妹の順番は、僕、フィーラ、ノイ、クレイン、ということになっている。

「我が名はノイ・ド・アンダールジャ。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし使い魔を召喚せよ」

ノイが詠唱を終えたようだ。

そして光る何かが浮かび上がる。

その中から現れたのは、少女。

ヒスイ色の髪を肩くらいのショートカットにした、ボーイッシュな少女。

少女は地面に足を付けると、ぶつぶつと何かを呟き始めた。



「フィーラ、あの子がなんて言ってるか教えて」

僕はとても真剣な表情でフィーラに伝える。

あの少女の周りの精霊の動き、見覚えがある。

あれは、鏡でみる僕の精霊の動きだ。

「仕方無いわね……。『なんで？折角来たんだからそこはルイズとか主要キャラの使い魔になるのがセオリーでしょ？あの糞神ふざけんじゃないわよ。全く誰だかわかんないし、描写もされなかった脇役？嘘でしょ？どうなってんのよ。だって私が主役でしょ？ここ私の世界でしょ？先輩が一人いるって言ってたけど、そいつはどこにいるのよ』みたいなことをずっといつてるわよ？頭が残念な子なのかしら？」

確信した。あの少女は転生者だ。しかも自分がオリジナル主人公だと思っっているタイプ。

はつきり言っただけ。僕の計画が狂う。だったら潰す？いや、相手に交戦の意思がないならそれは避けたい。しかもノイの使い魔……勘弁して欲しい。

「我が名はノイ・ド・アンダルージャ。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔とせよ」

僕が考え事をしている内に契約が終わったようだ。

少女はガツクリと肩を落としている。

戻ってきたノイに話掛ける。

「お帰り、ノイ。人を使い魔にしたんだ」

「うん。私もビックリしたけど、これはこれでいいかな？」

「こんにちわ」

僕はノイの使い魔になった少女に話しかける。

「こんにちわ……。……！」

少女は小さく答えた後、思い切り顔を上げた。  
その目は驚愕で見開かれている。

「名前を聞いてもいいかな？」

「イル。あんたは？」

「ヴァイス、ノイの兄だよ」

「へ」

イルはそう言つて僕をマジマジと見つめた。  
恐らくイルは僕の正体に気づいている。

「イル、私やお兄ちゃんは気にしないからいいけど、他の貴族の前ではそういう喋り方はやめた方がいいよ」

「ん、わかった」

どうやらノイとは普通にやっていくようだ。まあノイはルイズみたいな過激な性格じゃないから、全く問題ないと思うけど。

「イル、話があるんだけど？」

「ヴァイスも？ 実は私も話があったんだよねえ……」

「ノイ、すぐ戻るつもりだけど、遅くなったら先生に言つといて」  
「うん」

僕とイルは学園を出る。  
そして近くの森に入った。

「単刀直入に言うけど、あんた私の先輩よね？」

「やっぱり気づいてたみたいだね。僕もそれが聞きたかったんだよ。それで、確かに僕は先輩だけど、それがどうかした？」

「あはっ、消えて欲しいなーって思ってるんだけど」

どうやら僕の予感当たったようだ。

相手がどれくらい強いのかはわからないが、あれだけ自信があるということは、それなりに強い能力を貰っているのだろう。

「一応言っておくけど、僕は強いよ？」

「残念無念また来週！。確実に私の方が強いんだよねえ」

「根拠を教えてくれるかな？」

お互いの能力を知らないこういった状況では、いかに相手から情報を聞き出すかが鍵になる。

「漫画とかではさ、偉そうに相手に能力喋るけど、わざわざそんなことする理由、ないよね」

「……そうだね」

確かにその通り。僕だって聞かれたからと言って教えたりはしない。

「けど、私だけ相手の能力を知ってるっていうのも公平じゃないよねえ。だから、教えてあげるよ」

イルは僕的能力を知っているのか。恐らくロリッ子（馬）の仕業だろう。

それでも相手の情報を引き出せるのなら、まあいいか。

「私が貰ったのは、あんたが貰ったのと同じ能力とスペック。更にそれに一つ追加で、無限の魔力。これがどういうことかわかる？。あんたがどれだけ強い能力を持っても、私も同じ能力を持つてること。そして私は魔力が切れない。ねえ、これでも勝てる？」

……なるほど、あんなに自信満々だったのにはそういう理由があった訳か。

確かに、普通に考えればこれは絶対に勝てないね、イルが。

「残念なのはイルだよ。そもそもそれだと、僕は五秒くらいでイルに勝てる」

「はあ？何言ってるの？私は主人公なんだよ？負けるわけないじゃん。私の能力は、火系統のトライアングル。それ以外のスクウェアリミッター解除。特別な瞳。杖無し、詠唱無しの魔法発動。魔法の同時使用。精霊魔法の使用。体術、剣術。そして無限の魔力。本気で私が負けると思ってるの？」

「長ったらしい前置きはもういいよ。始めよう」

「……後悔するさせてやんよ」

僕はリミッターを解除し、魔法を発動させる。

「グランドブースト！」

足に風を収束させ、速度を飛躍的に向上させる魔法。

僕はイルの後ろに一瞬で回り込む。

「あんたの攻撃は見え見えなのよ！」

イルはそれに対応し後ろに振り返る。

恐らくイルが僕の動きを追えているのは『瞳』のおかげだ。

僕はそれにかまわず、イルの鳩尾に狙いを定め腕を引く。

「隙だらけなのよ！ウィンディアイシクル！」

イルの魔法には杖も詠唱も必要無い。

しかし、イルは魔法を発動出来なかった。

そして僕は拳を振り抜く。イルは堅く目を瞑った。

「……あれ？」

「だから言っただでしょ？五秒で倒せるって」

僕は拳を寸止めしている。

これを当てなくても、いつだって僕は勝てる。

「どうして……なんで……」

「そんなの簡単でしょ、イルが魔法を理解してないから。魔力があるだけで魔法が使えるなら、誰だって魔法が使える。イルは魔法を使う練習とかしてないでしょ？」

「でも……あなただって私と同じ力を……」

「イルは、ロリッ……じゃないか、神から能力を貰う時、その能力の説明を聞いた？」

「聞いて……ない……。私が聞いたのは、あんたが今どれだけ強い  
か……」

そう、イルは僕の『今』のスペックを聞いて勘違いしたのだ。

イルが貰ったのは、僕が『昔』貰った能力。

つまり、何もしていない場合何の役にも立たない能力。

「やっぱりね。僕が貰った能力は、魔法と体術の実力の青天井。つまり最初はただの一般人。更に言うなら、リミッターの解除はスク

ウェアになつてから可能」

「なっ！？嘘でしょ！？」

「本当だよ。どんな天才でも、土台がなければ天才にはなれない。君は天才になれるけど、土台を作っていないから魔法が使えないんだ。僕の動きを追えたのは『瞳』のおかげ。それだけは最初から使えるからね」

「そんな……嘘だよ……」

はあ……。弱い。力がじゃなく心が。これを聞いて絶望するとはね。努力をすれば、魔力無限な分自分の方が強いということに気づいていない。

そして脆い。今にも壊れそうだ。

「……………強くなればいいんじゃない？」

「え？」

「強くなつてまた僕を殺そうとすればいいだろ。いつでも相手になつてあげるよ」

「私を、殺さなくて良いの？あんたを殺そうとした相手だよ？」

「結果的に何もしてないんだからいいよ。それにイルは、ノイの使い魔だからね。もう家族みたいなもんだよ」

「……か……ぞく？」

「そう、家族。あ、そろそろ戻った方がいいかなー」

僕はショックで腰が抜けているイルをお姫様抱っこして学院に戻った。

私には家族がいなかった。

小さいころに虐待されて、私は養護施設に預けられていた。周りの皆は優しくしてくれるけど、本当の愛情を感じたことなんてなかった。

私が小学生高学年になるころ両親が死んだ。事故だったらしい。

私は特になにも思わなかった。

私が高校生になるころに、養護施設は潰れた。

私は親戚に預けられることになった。

死んだ父の親戚だ。

その家の母は、私を常に疎ましそうに見ていた。

その家の父は、私に劣情を抱いていた。

そして私は襲われた。

何の前触れもなく、取り押さえられた。

私はその家の父を蹴飛ばし、外に逃げ出した。

そして脇目もふらず走っていた私は、車に轢かれてあっけなく死んだ。

私は真つ白な空間で神と出会った。

神は自分の好きな世界に行ってみないと聞いた。

私は頷いた。私は神から幾つか本を借りてそれを読んだ。

その中から私はゼロの使い魔を選んだ。

私はこれで愛して貰えると思った。

沢山の人に愛される主人公ヒーローになれると思った。

だから私は『自分』を作った。皆に愛される明るい『自分』を。

だけど神は私以外にもその世界に主人公ヒーローがいると言った。

私はそれを消して私だけが主人公ヒーローになろうと思った。

だから私はその主人公ヒーローと同じ、それ以上の力を貰った。

そして私は負けた。あっけなく、あっさりと敗北した。

私は結局誰にも愛されなかった。

私が消そうとした主人公<sup>ヒーロー</sup>に消されるんだと思った。  
ただどあいつは私を消そうとしなかった。  
それどころか私を家族と言った。

私はその時、この人が私の英雄<sup>ヒーロー</sup>だと思った。

学院に帰ってくると、なんだか騒がしくなっていた。

「ノイ、何があつたの？」

「それが、お姉ちゃんが見た事もない竜を……って、お兄ちゃん！  
なにやってんの！」

「ああ、これは色々あつてさ。それよりフィーラがどうしたって？」  
「……まあいいよ。お姉ちゃんが珍しい竜を呼び出したんだよ。それでさっきまで凄い戦いをしてたんだけど、さっきお姉ちゃんが勝つたんだ。今契約中だよ。って、言ったそばから終わったみたいだね」

フィーラが大きな竜を従えて、こちらに歩いて来た。

僕はその竜を見て、とても驚いたが、フィーラならやりかねんと思つた。

「リオレウス……」

「リオレウス？何それ？お兄ちゃん知ってるの？」

「イル、あれリオレウスだよな？」

「そうだね、間違いなくリオレウスだと思うよ」

「お兄ちゃん！リオレウスって何！」

「あ、ああ、火竜みたいなもんだよ」



「ふーん」

そう、あの有名なりオレウスだった。  
あれも異世界から喚んだってことになるんだろうな……

「どう？ヴァイス、格好いいでしょ？」

「うん、なんていうか、こいつに乗って空を飛ぶフィーラは凄い格  
好良さそうだよ……」

僕はリオレウスの頭を撫でながらそういう。

「この子の名前はリオ。なんとなく思い浮かんだのよね」

「そっか……きつと必然だよ」

「そうかもしれないわね」

僕とフィーラはお互いの顔をみて笑い合う。

そしてフィーラは、リオを連れてどこかに行った。

「では最後に、ミス・クレイン」

「はい」

クレインは嬉しそうに答え、呪文を詠唱する。

「我が名はクレイン・ド・アンダルージャ。五つの力を司るペンタ  
ゴン。我の運命に従いし使い魔を召喚せよ」

クレインがそう唱えると、光る何かが現れ、その中から風が吹いた。  
そしてゲートが閉じた。

「何もいないよー？」

「おかしいですね、成功したように見えたのですが……」

いや、いる。クレイン、というより、他の人には見えていないようだが、確かにいる。

それは僕と同じ『瞳』をもつイルもわかったようだ。

「どこを見ておる」

「?どこー?」

「ここじゃ」

音が発生していた場所の風が、不自然に動き出し、人の形になった。

「わしを喚んだのはお主じゃな?」

「そうだよー」

「わしを使い魔にする気か?」

「嫌なら仕方無いねー」

「わしが帰りたいと言ったら?」

「別にいいよー」

恐らくあれは風の精霊。というかどう考えても風の精霊だろう。

周りの生徒は、風を操るなにかだと思っっているようだが、僕とイル、それとコルベール先生とフィーラは気づいているようだ。

「お主は純粋な奴じゃな。いいだろう、ワシが使い魔になってやる  
う」

「本当!やったー!」

「ほれ、早く契約の呪文を唱えんか」

「うん。我が名はクレイン・ド・アンダルージャ。五つの力を司る  
ペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔とせよ」

そしクレインは、唇だと思われる場所にキスをした。  
風の精霊にルーンが刻まれた様子は特にないが、何かあったのだろ  
う。

「わしは常にお主の側にいる。わしの姿が見えずとも、助けが欲しい時はわしを呼べ」

「うん。わかったー、フリーゼ」

「フリーゼとは何だ？」

「名前だよー？」

「そうか、わかった」

そう言つてフリーゼは大空へ溶けた。

生徒たちは何がおきたかわからないといった表情だ。

それにしても、我が家の妹はどんな人間離れしていくな……ああ、  
吸血鬼と悪魔だった。

そして僕はその日、部屋を出る事になった。

それというのも、ノイたちが僕の使い魔であることは生徒に伝えた  
ので、ノイたちが僕の部屋に来る事になったのだ。

そして今の部屋では狭いので、大きな部屋を一つ借りる事になった。  
ちなみに、ノイたちが僕の使い魔だった貴族のガキ共は、何か  
言おうとしたが、実力も問題なく、貴族でもあるノイたちには何も  
言えなかった。

## 第18魔（前書き）

今回は戦闘です。

うまく書けたかはわかりませんが、とりあえず見て下さい。

## 第18魔

サイトがギーシュと戦って気絶した翌日、僕はフィーラと共にリオに乗って空を飛んでいた。

理由は、タバサが吸血鬼の本を読んでいたのと、今日授業をサボってどこかに行こうとしているからだ。

原作でも、番外のタバサの冒険でこの時期に吸血鬼を倒しに行ったから、普通なら問題ない。

しかし、吸血鬼、というかエルザは、すでに僕の家で保護しているのだから、タバサが吸血鬼について勉強しているのはおかしいのだ。この日以外にもタバサは任務に行くので、サボるだけなら別に気にしない。

僕が引つかかっているのは、吸血鬼のことだ。

もしかしたら、僕が干渉した事によって大変なことになるかもしれない。

そういった理由から僕らは今、シルフィードよりも高く飛んで尾行をしている。

ちなみにクレインはアンダルージャに帰ってエルザの相手をしている。ノイは学園で勉強中だ。

「ごめんね、フィーラ。こんなことに付き合わせちゃって」

「いいのよ。クレインやノイじゃ手に余ることなんですよ？」

そう、その通りだ。

前回は相手がエルザだったのと、森に行く可能性が高かったからクレインを連れて行ったが、今回は森で戦う事になるかはわからないし、なにより相手が強かった場合、クレインでは対応しきれないと判断した。

ノイはそれなりに場数を踏んでいるから、実力が下の相手には遅れ

を取らないが、クレインの場合は実力があっても、それを適切に使えるかわからない。

だから今回はフィーラを連れてきた。

（その判断、正しいわよ）

（この声は！？ロリツ子！？）

（ロリツ子って言うなって言ってるでしょ！まあいいわ、それよりも重要な話があるの）

（このタイミングで話掛けてきたって事は、吸血鬼のことかな？）

（そうね、それもあるわ。よく聞きなさい、その世界にあなた以外の転生者が居るわ）

（居る？行つたじゃなくて？）

（そうよ、数ヶ月前からすでにその世界に行っていたわ）

（どうして今言つたの？）

（気づけなかったのよ。私たち神の世界に数人裏切り者がいてね、今は全員始末したんだけど、そいつらが色んな世界をめちゃくちゃにしようとしたの）

（それで転生者が……）

（そう、裏切り者の始末が終わつたのが最近なのよ。それで調べてる内にその世界にも転生者がいることを知つたの。だけど私はもうその世界に干渉出来ないから、あなたに話掛けるの）

（つまり、僕に止めるって言ってるの？）

（そう、私が唯一その世界に関われるのはあなた。だから、あなたに教えてるのよ。もう一人の転生者があなたみたいな人間なら仲良くやってもいいわよ？でも、そうじゃない時は遠慮せずに殺りなさい）

（わかった。それで、吸血鬼は？）

（もう一人の転生者は、あなたが義理の妹を侍らせてるように、数ヶ月の間に吸血鬼の仲間を作つたの）

（その内の一人がガリアで悪さしてるってこと？）

（そうなるわね。それと、あなたに新しい能力とかをあげたいところだけど、今あなたに能力をあげると、同じ能力がもう一人の転生者のところにも行くようになってるの。だから私から力を貸す事は出来ないわ。ごめんなさい）

（いいよ、それじゃあその吸血鬼を捕まえて転生者をおびき出すかな）

（ヴァイス、死んじゃダメよ）

（オツケー）

さて、どうしたもんかな……

転生者は仲間になれるような相手なのだろうか？

しかし、転生者の仲間ってことはその吸血鬼、結構強いな。

タバサが先に行って戦っても勝てるとは限らない。

……仕方無い、気は進まないけど、行くか。

「ヴァイス？どうしたの？急に黙り込んで？」

「ああ、ごめん、何の話だった？」

「クレインやノイじゃ手に余るんでしょって話」

「そういえばそうだったね。確かにそうだよ。その点フィーラなら安心だ」

「そんなに危険なことをするのかしら？クレインはともかく、ノイでもダメなんて」

「実際のところわからないけど、戦いになったらたぶん危険だよ」

「そう」

「フィーラ、計画変更。タバサの横について」

「わかったわ」

フィーラはリオに話掛け、タバサのところに行くように伝える。リオは速度を上げ、高度を下げた。

そしてシルフィードの横につく。

「！」

「や、元気？」

「……どういづつもり？」

「ちよつと今回の件、僕にも手伝わせてくれない？」

「……どこまで知ってるの？」

タバサの瞳にはいつもと違う何かが宿っている。

それは怒りか、悲しみか、僕にはわからないが、良い感情だとは思えない。

「全部だよ」

「……わかった」

何がわかったのかは知らないが、とりあえずタバサは承諾してくれるようだ。

これで後は、イザベラの許可を取るだけだ。

タバサがいることにより、楽にガリアに入ることが出来た。

一年前はこそそやっててからなあ……

それから少し飛び、プチ・トロワに到着した。

騎士などに変な目で見られたが、タバサが付き人だと誤魔化してくれた。

それからすぐに、イザベラの居る部屋に通された。

タバサと今回の相手だとか吸血鬼の会話をした後、イザベラはこちらを見た。

「で、お前は誰だい？」



「ゲルマニア貴族の、ヴァイス・ド・アンダルージャと申します」  
「わざわざこいつと一緒にいるんだ、吸血鬼退治に同行でもするのかい？」

「はい、今回の吸血鬼退治に同行させて頂きたいのです」

「……まあいいだろう。もの好きな奴だね、何も出ないよ？」

「問題ありません」

それで話は終わり、僕たちは部屋から出た。

他に用事も無いのですぐに吸血鬼のいる村に向かう。

その村の名前は、サビエラ村だった。

「エレーヌに友達がいるとはね」

わたしは誰もいなくなった部屋でぽつりと呟く。

しかし本当に意外だった。

あのエレーヌに友人がいるなんて。

ああいう、エレーヌを守ってくれそうな人がいて本当によかったよ。

「それにしても、ヴァイス・ド・アンダルージャ……アンダルージャ……」

どこかで聞いた事があるような気がする。

エレーヌを任せられるか、調べる価値はありそうだね。

「元素の兄弟を呼びな！」

サビエラ村に着くと、村は焼け野原になっていた。

「ハハハハハハッ！！泣き叫ベツ！！跪けッ！！」

「アキラ、その辺にしておけ、すでに焼き尽くされている」

一人の少年が火球を放ちまくっている。  
そして背の高い男がそれを窺める。

「フィーラ、落ち着いて」

「私は落ち着いてるわよ。ヴァイスこそ頭を冷やしなさい」

フィーラは僕よりもこういう経験多くをしている。

その分僕よりも冷静だった。

確かに僕は少し爆発仕掛けていた。

落ち着いてよく見ると、二人の男がただの人じゃないことに気がついた。

「フィーラは背の高い男の方を、僕はもう一人と戦う」

「任せて」

周りの精霊の動きが僕と類似してる。

恐らく少年の方が転生者。

そして背の高い男は吸血鬼だ。

「タバサは自分の身を守ってて」

タバサは何かを言おうとしたが、返事も聞かずに走り出す。  
すでにフィーラは男に突っ込んでいて、随分遠くに吹き飛ばしたの  
を追撃しているようだ。

「リミットオーバー  
限界突破！」

ヴァイスは100%の力で走り出し、一気に距離を詰め、少年に蹴  
りを放つ。  
しかし少年はそれを腕でガードした。

「今ので吹き飛ばないんだ、君は転生者だね？」

「ご名答だぜ。で、どうすんだ？」

「この状況を見て、僕は君と仲間になりたいとは思わない」

「良い答えだあッ！！俺もお前を潰すつもりだったからなあ！丁度  
いい！」

そう言つて少年はヴァイスの腹に蹴りをいれる。  
ヴァイスはそれを喰らつて後ろに飛ばされる。

「ウォーターエクスプロージョン」

更にそこに、少年は追い打ちをかける。  
しかし、爆発で舞い上がった砂埃が晴れると、そこには無傷のヴァ  
イスが立っていた。  
それを見た少年は、ニヤリと笑つて手をかざす。

「トルネード」

少年がそう唱えると大きな竜巻が発生する。

竜巻はヴァイスへとももの凄い速度で迫る。

そしてヴァイスに当たりそうになった直前、竜巻が消える。

しかしその竜巻の後ろに、何体ものゴーレムが待機していて、一斉にヴァイスに襲いかかる。

ヴァイスはそれと同等の数のゴーレムを錬成し、襲いかからせる。

「お前さっきから俺と同じ魔法で相殺させてるだろ？」

「……まあ今のゴーレムを見られたら隠しきれないか。そうだよ、魔法で僕に勝つのは諦めた方がいいんじゃない？」

その言葉を聞いて、少年は狂気に満ちたような笑みを浮かべる。

ヴァイスの背中に気味の悪い寒気が走る。

「俺が杖なし詠唱なしで魔法使ってるの見てたよなあ？ スペックは負けてねえんだよ」

「……僕に体術で勝てるのかな？」

「勝てねえだろうなあ。ただそれは技だ。単純な力と速さなら俺の方が上だ」

少年がそう言った次の瞬間、ヴァイスの視界から少年が消えた。

そしてヴァイスは思い切り蹴飛ばされる。

今回は全く対応出来なかった。

地面に打ち付けられ、少し転がって体勢を立て直す。

「グッ……それも、能力かなんか？」

「何言ってるんだ？ 純粹に魔法だ」

そして少年はまた消える。

次の瞬間またヴァイスは吹き飛ぶ。

今度は家の残骸にぶつかり、地面に倒れる。

「ガハッ！」

「大したことねえなあ。これで終わらせてやるよ」

少年はそう言って空に手をかざす。

「消え失せな！メテオストライク！」

すると少年を中心に大嵐が発生する。

そしてあつという間に少年は見えなくなった。

近くにあるものを全て巻き込み、唸るようにヴァイスに迫る。

「風風風風水のペンタゴンスペルだ！切り刻まれろおおおおー  
――！！」

「グアアアアアアアアアアアツツツ――！！！！！」

森の中、悪魔の女と吸血鬼の男が睨み合う。

「あなたたちの目的は何なの？ どうしてあんなことをしたのかしら？」

「さあな。アキラはこの世界を壊すと言っていた。だから俺は一緒に居る」

「なるほど、じゃああなたもこの世界を壊すことには賛成って事ね

？」

「そうだ」

「じゃあやるしかないわね」

フィーラの言葉を合図にしたかのように、植物がフィーラに絡みつく。

フィーラは杖を落としてしまい、苦悶の表情を浮かべ、身動きが取れないで居る。

男はすでに警戒を解いており、悠長に喋り出した。

「しかし丁度よかったな。さっきの少年はアキラが探していた少年のようだしな」

「探していた？どういうこと？」

フィーラは男に不思議そうに尋ねる。

男は特に変わりなく平坦な口調で答える。

「詳しくは聞いていないが、あの少年を殺すつもりだったらしいな。すでに学園や実家にも刺客を送ったんだがな。あの少年の家族を全員殺すと言っていたぞ」

「あなた今なんて言った」

フィーラは冷たい声でもう一度尋ねる。

その目には、怒りがありありと浮かんでいる。

「あの少年の家族を全員殺す」

「フフ、フフフ、そう、それは女子供無関係に？」

「そうだな。だからお前も殺す。真実を知らずに死ぬのは嫌だろう。だから話した。では死ね、人間の娘」

そう言つて男は、フィーラを縛る枝を更にきつくした。

その枝はどんどんフィーラを締め付けていく。

しかしフィーラは何の声も上げない。

そして唐突に、満面の笑みを浮かべた。

「調子に乗るなよ、吸血鬼風情が」

「なっ!？」

「情報を引き出す為に捕まってやったのを勘違いして自分の実力を過信したか？」

フィーラを拘束していた枝が急に緩くなる。

そして今度は男を拘束する。

「馬鹿なっ!ここの精霊とは契約していたはずだ!なぜ俺の言う事をきかない!」

「私は貴様らのように契約しなければ精霊の力を行使することが出来ないクズとは違う」

「お前はっ!お前は何者だと言うんだっ!？」

「おふざけが過ぎたな、吸血鬼。私の家族に手を出したことを後悔して死ね」

その言葉と同時に男を縛り付けていた枝が燃え上がる。

炎は男を中心に一瞬にして周囲を燃やし尽くした。

そこにあつたものはほぼ全てが灰となった。

そんな中、フィーラはその炎を意にも介さず立ち上がる。

「地獄の手土産に持って行け、私は悪魔だ」

## 第18魔（後書き）

アプロディーテさんの魔法を使わせて頂きました。

次回はクレイン対吸血鬼！の予定です。

次回で決着するかもしれませんがね。

出来れば戦闘は一人一話で書きたいんですが、描写が難しいんですよね……



## 第19魔（前書き）

今回はフラン対吸血鬼と、クレイン対外道吸血鬼です。

ちょっとクレインが暴行を加えられるので、お気を付け下さい。

## 第19魔

場所はアンダルージャ家。

クレインは今、エルザに系統魔法を教えていた。

「ウインド」

クレインがそう唱えると、風が巻き起こる。  
そしてエルザの方を見る。

「ウインド」

クレインほどでは無いが、風が発生する。

エルザはすでに系統魔法を使えるのだ。

「うーん、もう教える事ないよー」

「じゃあ今日はこの辺にしましょ？ね？」

「はい」

近くにいたティファニアが魔法の講義を終わらせる。

そこへ一陣の風が吹いた。

「クレイン、なにやら妖しい輩がおるぞ」

「？それは敵なのかなー？」

「わからん、とりあえず接触するぞ。お主らはここで待っておれ」

「行くなら早く行こー」

フリーゼは何かを見つけたようで、クレインと共に屋敷を出て行く。  
すると家の外でこそそと動き回っている男を二人見つけた

一人は大柄で、もう一人は痩せている。

「誰ですかー？」

クレインが声を掛けると、二人の男はビクッと、跳び上がる。そしてクレインの方を向き、安堵のため息を吐く。

「ガキかよ、焦らせやがって。おい、アンダルージャ家ってここでもいいのか？」

「そうだよー」

「そうか、じゃあ死ねよ」

そう言つて大柄な男は唐突に剣を振りかぶる。

ウインドバリア  
クレインは咄嗟に風の障壁を展開した。

ウインドフォース  
風の障壁は、ドーム状に風を吹かせ、攻撃を受け流す魔法だ。そして風の力で距離を取る。

「いきなりなにをするのー！もー！」

「クレイン、奴は敵じゃ。明確な悪意を感じる。倒せ」  
「はい」

それからフリーゼは、クレインにだけ聞こえるように小声で何かを言った。

それを聞いたクレインは、とても嫌そうな顔をする。

「面倒だよー、なんでー？」

「お主のためじゃ」

「仕方ないなー」

会話を済ませたクレインは、口笛を吹く。

すると、風の韻竜、フランが人間の姿で魔法を使い飛んで来た。長い金髪で、身長も百六十はある。

「どういたしました？お嬢様」

「力を貸して欲しいのー」

「かしこまりました」

フランは敵の方に顔を向ける。

直感でフランはこの二人が吸血鬼だと言う事に気づいた。

「作戦タイムは終わりかあ？お嬢ちゃんたちよお」

そう言つて大柄な男は剣を構えて突つ込んでくる。

そしてその剣の刀身には、炎が渦巻いている。

クレインはブレイドを使い、男の剣を受ける。

しかし、体格の差で少し押され気味になる。

そこをフランがエアハンマーで援護する。

男は思いきり吹き飛び、もう一人の痩せている男の方へ飛んでいった。

そして起き上がるなり男に文句を言い始める。

「お前も手伝え！何のんびり突つ立ってんだ！」

「女子供に手を上げるのは好きじゃないんだがな」

「じゃあお前は背の高い方の女をやれ、俺はガキをやる」

「構わんが、何故だ？」

「ガキの泣きわめく声は最高に気持ちが良いからなあッ！！ヒヤハハハハハハッ！！」

「……外道が」

痩せた男はそう言ってフランに魔法を放つ。  
大きな土の塊がフランを襲う。  
言うまでもなく精霊の力だ。

「こざかしい」

フランはそう呟き土の塊を突風でなぎ払う。  
そして男が次の魔法を放つ前に、すでに詠唱が完成している魔法を放つ。

「テンペスト」

男の正面にももの凄い風が吹き、吹き飛ばされる。  
男は森の中に飛んでいった。  
フランはそれを追いかけて森に入る。  
風の使い手であるフランは、気配でどこにいるのかがわかる。

「隠れても無駄だ、カッタートルネード」

フランの放ったカッタートルネードは、周りの木々を巻き込みながら男に迫る。

しかし男はそれよりも更に大きい竜巻を発生させた。  
二つの竜巻が衝突し、大きな衝撃が駆け抜けたあと残っていたのは男の竜巻だった。  
フランは竜巻に巻き込まれる。

「グッ……クッ……ガハッ！」

竜巻に巻き込まれていた木や岩がフランに大きなダメージを与える。  
最初の内は魔法でなんとかやり過ごしていたフランだが、段々と数

が増えていき、直撃した。  
竜巻が消えると、フランは地面に落下する。

「ガッ！……ハア……ハア」

「貴様では私に勝てないだろう。ここら一帯の精霊とは我々が契約している。本来の力の半分も出せないはずだ。その状態でそれだけ戦ったお前は見事だ。せめて楽に殺してやろう」

「私はスプラッタが嫌いなんだ」

「いきなり何を言っている？」

「だからなるべく使いたくなかった」

フランは淡々と言葉を紡ぐ。

男はそれに焦りを感じ、大きな炎球を自分の周りに大量に発生させる。

「レクイエム」

その言葉と同時に男は破裂した。

爆発ではなく破裂。

爆風で体がなくなる事もなく、グチャグチャと地面に落ちた。

「真空を作り出す魔法。故に炎も燃える事はできない」

すでに原形を留めていない男に話しかける。

フランは男のパーツを魔法で集め、大きな穴を作りその中に埋めた。

「せめてもの敬意だ。お前は強かった。そして私は、スプラッタが嫌いだ」

そう言ってフランは気絶した。

屋敷の外でクレインと大柄な男は魔法を放ち合っている。

男が魔法を放てばクレインがそれを消し飛ばす魔法を放つ。

クレインが魔法を放てば男はそれを消し飛ばす魔法を放つ。

しかし、精霊の力は男たちが契約しているので、威力でクレインは負けていた。

そのためすでにクレインは傷だらけだ。

「早く泣きわめけよ！おら！」

男はかなりの大きさの炎を放つ。

クレインはそれを風で掻き消そうとしたが、威力が足らず逆に炎が大きくなってしまふ。

クレインは風ウインドフォースの力を使いかろうじて炎を避けた。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

「おらおらどうしたあ！息が上がってんぞッ！」

炎を避けて少し息を整えていたクレインの腹に男は蹴りを入れる。

「カハッ！……ハア……ハア……ガッ！」

男は蹴り飛ばされ地面に寝転がったクレインの頭を踏みつける。  
そして寝転がっているクレインをもう一度蹴り飛ばす。

「ゴホッ！……ハア……ハア……」

男は接近戦に強く、剣の扱いがうまい。

ウィンドフォースウィンドアーマー

そのため、風の力や風の鎧を使っていたとしても危険だ。故に遠距離の魔法を使う事になる。

しかし男は魔法も強力だった。

なまじ性格が最悪な奴は無駄に強い。

クレインはかなり苦戦していた。

実際魔力も切れかけている。

「ケケケツ！いいことを教えてやんよ！」

「……ハア……ハア……いいこと？」

「ああ、絶望を更に強くする情報だ。お前の兄貴は今頃殺されてるぜ、他の奴らもなあ！」

それを聞いたクレインは、一瞬もの凄く驚いた。

そして顔を俯かせ、プルプルと震え出す。

「どうだあ！？恐くなったかあ！？ヒヤハハハハハハッ！」

「……ヴァイス兄やノイ姉、フィーラ姉にも手を出し立ったってこと？」

「そうだつてんだろツ！お前の家族は皆殺しだツ！さあ！泣け！叫べばぐらっ！」

男は最後まで言う前に顔を蹴られて吹き飛んだ。

そしてそこには、さっきまで疲れ切っていたクレインがいた。

「てめえ！何をしゃがった！」

「これが……ペンタゴンってやつかなー……………」

クレインの魔力は強大に増加していた。



さきほどまで無くなりそうだったとは思えないほどの魔力が、クレインの中で渦巻く。

「ねー？誰が死ぬのー？私かなー？ヴァイス兄ー？かなー？それとも、あなたかなー？」

「ちよつと魔力が上がったくらいで！調子に乗んなーッ！」

そう叫んで駆け出そうとした男の膝が、ガックリと崩れ、四つん這いになった。

男はなにがなんだかわからない様子でクレインを見上げる。

クレインは男を見下ろして満足そうに笑っている。

「今の私は何人遍在作れるんだろー？」

そう言つてクレインは遍在の呪文を唱える。

男は逃げようとするが全く足が、いや膝が動かない。

そしてクレインの遍在が現れた。

一人、二人と増えていきその数は二桁を超えても止まらない。

「ああ……ああああ……ああああああー……！！！！！」

男は完全に恐怖に取り憑かれた。

得体の知れない相手。

自分が先ほどまで優勢に戦っていた相手に大きすぎる恐怖を抱いている。

「とりあえずこれくらいかなー」

クレインのその言葉で遍在の発生が止まった。

現在の遍在の数は三十体。

そして全員が、風の力、風の鎧、風の武器を纏っている。

ウインドフォースウインドアーマーウインドウェポン

「風妃乱舞、翻弄するよー」

ザ・クイーン・オブ・ウインド

その言葉で全ての遍在が動き出す。

数体の遍在は空で待機する。

そしてクレインは、未だに四つん這いになっている男の腹を蹴り上げた。

ウインドウェポン

風の武器の力で、男は空に舞い上がる。

そして空に待機していた遍在の一体が、飛んで来た男にかかと落としを喰らわせて地面に落とす。

それを下にいる遍在が蹴り上げる。終わる事のないお手玉。

ウインドウェポン

風の武器の効果で、男は凄い速度になっている。

未だに意識があるのかは不明だ。

数分それが続けたクレインは、高速で落ちてきた男を蹴り上げないで地面に激突させた。

「ガハッ！」

「帰ってお菓子食べよー」

男は全身が骨折しているが、死んだわけじゃない。

吸血鬼ゆえのしぶとさだ。

そしてクレインはそれをわかった上で男にとどめを刺さなかったのだ。

「後悔させてやる……絶対に復讐してやる……」

男は憎しみに満ちた目でクレインの後ろ姿を見る。

そこへ一陣の風が吹く。

「甘い奴じゃ。世の中あのヴァイスとかいうガキみたいな奴ばかりではないと言っただろう」

それはフリーゼ、風の精霊だった。

フリーゼは男に近づき、エアハンマーで上から叩きつぶした。

「まだ生きてるじゃろ。お前のような奴を生かしておくとか害がある  
のでな、始末するぞ」

「くそ……お前……何者だ……」

「さてな。では冥土の土産にいいことを教えてやろ。さっきお前  
と戦った少女は、全力じゃないぞ」

「何言つてやがる……当然だろ……精霊は俺の味方なんだ……全力  
で戦える訳がない」

「バカが、全力で戦えなかったのではなく全力で戦わなかったのじ  
ゃ」

「なんだと……そんなことする理由がどこに……」

「成長のためじゃ。あいつは、わしの力を借りんでも戦える強さがある。  
それを目覚めさせるためじゃ」

「お前の力、だと？お前は何者だ……」

「さあな、最後に一つ教えてやろ。お前の膝が動かなくなったのは、  
凄く速度で成長したからじゃ。お前の膝はすでにヨボヨボじじ  
いと同レベルじゃぞ。しかし吸血鬼は寿命が長いからのう、時間が  
掛かってしまったようじゃな。さて、これで疑問はないじゃろ、安  
心して死ね」

フリーゼはそう言って男の酸素を奪う。

男はゴキブリのようにしつこくのたうち回り、息絶えた。

「わしが力を貸していれば、お前なぞ二秒で倒せたのだから」

フリーゼはそう呟いて空に溶けた。

## 第19魔（後書き）

フランのレクイエムはアプロディーテさんから頂いた魔法です。

一撃必殺スプラッタ魔法。確かにあまり使いたい魔法ではありませんね。

あと、なぜ真空中で破裂したか気になる人はググって下さい。  
作者は何となくそうなるってことしか知りません。

そしてクレインに蹴る踏みつけるの暴行を加えたゲス野郎ですが、もつとむごたらしく殺そうと思ったんですが、やり過ぎるとよくないと思いあの程度になってしまいました。（希望があればもつとむごたらしく書き換えます）

それと、ゲス野郎の膝は、クレインが戦闘中ずっと膝関節を高速度で成長させていました。なのでガクガクになったのです。

怒りでペンタゴンクラスになったクレインのペンタゴンスペル、風ザ・ク妃乱舞は、もつと遍在出せます。

最後に宣伝です！

最強の魔法使い、ただしHPは1。

私のオリジナルです。興味がある人は是非読んでみて下さい！  
人気投票も待ってます！

## 第20魔（前書き）

p v 4 0 0 0 0 0、ユニーク5 0 0 0 0、超えました！

読んで下さる皆様のお陰です！

ヴァイスは現在大ピンチ。

フィーラは勝負にもならないくらい圧勝。

フランとクレインは苦戦して勝利。

そして今回のノイは、無双です。

そしてロボットが一杯出てきます。

ネタを知らない人は、とにかく強いロボットが出てると思ってくれればいいです。

## 第20魔

ノイは今、魔法学院のヴェストリの広場で風の講義を受けていた。クレインは実家でエルザの面倒をみているから気にしていないが、ヴァイスとフィーラが無断でサボった事に対して、ノイは怒っていた。

風の先生であるギトーにもグチグチ文句を言われたのである。かなりイライラしている。

ちなみにサイトは既に目が覚めて授業を見学している。

原作では後二日は眠っていたが、ヴァイスの治療のお陰でかなり早く目が覚めたのだ。

そして事件は起こった。

不審な男が三十人ほど学院に侵入したのだ。

しかもどうとうと正面から。そして学院で働いているメイドが一人捕まった。

男たちはメイドを連れて、広場にやって来た。

「俺たちは吸血鬼だ！今から証拠を見せてやるが、抵抗しようなんて考えるなよ！」

彼らは全員吸血鬼だった。

それもエルザとは段違いに強い。

タバサでも一対一でようやく勝てるレベルだろう。

それが三十人どう考えても学院に勝ち目はない。

頼みの教師はほぼ全員隠れている。

唯一出てきたのはコルベール先生だけだった。

しかし、人質を取られているため身動きが取れない。

巻き込まれたくないからか、騒ぎに気づいているが寄りつかない者

ばかりだ。

そして吸血鬼はメイドに噛みつこうとする。

しかしそのメイドは、ノイと仲の良いメイドだった。

そしてこんな状況、更に朝からずっとイライラしていたノイが黙って見ている筈もない。

「切り裂け！創造武器！《透円刃》！」  
とうえんば

[illegible]

メイドを捕まえていた男の両腕が地面に落ちる。

そして次々と他の男の体に傷が入って行く。

男たちは混乱してうまく対処出来ていない。

その隙にメイドは逃げ出した。

「やってくれるじゃない……何が目的か知らないけど、友達に手を出した事後悔するよ」

「あいつだ！間違いない！奴がアンダルージャだ！」

「あれ？目的は私なのかな？」

「そうだ！お前の一族を皆殺しにする！ヴァイスとか言うガキを出せ！」

「今はないよ。それと、実家にもあんなたちみたいなのが行ったの?」

「そうだ、ククク、どうだ？ 恐怖したか？」

ノイはそれ聞いても特に心配はしなかった。

クレインがいるのだから何の問題もないと考えたのだ。

そしてノイは、溜まりに溜まつた鬱憤を敵で晴らす事にした。

「ようするに敵なんですよ？ だってたら遠慮しないでいいよね？」

「貴様が何をしたのかは知らんが、これで終わりだ！」



さきほどから喋ってる相手がばらばらで顔を覚えられない、とどうでもいいことを考えているノイ。

三十人はいた吸血鬼の内、二、三人は血を流して倒れている。

そして男たちのリーダー格が精霊の力を使った。

男たちを中心に竜巻が発生する。

アキラが使っていたほどの威力はないが、十分に強力な攻撃だ。これではノイの《透円刃》は届かない。

《透円刃》、ノイの意思で自由に動く透明のチャクラム。

ノイたちの能力がわかった日からすでに一年近く経っている。

ノイはこれまで、ヴァイスの頭の中を覗きまくって地球のアニメなど見ていた。

それによりノイの想像力、イメージ力は格段に高くなっている。

今では《透円刃》のように、実際ではありえない武器を作り出す事も出来る。

ちなみに、ヴァイスはノイにそのアニメのことを夢でよく見ると言い訳している。

「確かにこれじゃあ無理かな」

ノイは《透円刃》を消して、新しい武器を創造する。

竜巻の中の吸血鬼たちは、遠見の魔法を使ってノイの様子をうかがっている。

するとノイの足に、金属のブーツのようなものが現れる。

そして、ノイは膝を屈め、ジャンプするような体勢をとる。

すると次の瞬間にはノイがその場から居なくなっていた。

「上だ！奴は上から来る！」

リーダー格の男はそう指示する。

確かに状況から見ればノイは上から来るだろう。

そして予想通り、上から何かが降ってきた。

しかしそれは、ノイではなかった。

『むげんパンチ  
無限拳！』

降ってきたものは人型のゴーレム。

そしてそのゴーレムの腕が伸び、一人の吸血鬼の体を貫通する。

「ゴハッ！」

腹に穴が開いた吸血鬼は、苦痛で顔を歪めているが、死んではない。  
い。

腕がゴーレムに戻ると、吸血鬼は血を吹き出す。

そして人型ゴーレムは地面に降り立った。

『創聖のアクエリオン！！』

「くっ！なんだこれは！」

混乱した吸血鬼は魔法を解いてしまう。

すると地面から、別の人型ゴーレムが飛び出してくる。

『フルドリライズ！』

地面から飛び出してきた人型ゴーレムの全身からドリルが伸び、周囲にいた吸血鬼を串刺しにする

その程度で死にはしないが、吸血鬼たちのほとんどが傷を負っている。

『天元突破！グレンラガン！』

たった二体のゴーレムを相手に百戦錬磨の吸血鬼たちが血を流している。

そして、何も無いところからいきなりノイが現れた。

「創造武器、《陽炎》<sup>かげろう</sup>」

「貴様っ！どういうことだ！？」

「私は一步も動いてなかったってことだよ」

《陽炎》、光の屈折を利用して姿を消す武器。

つまりノイがジャンプするような仕草を見せたのも演技だったのだ。そしてその仕草に引っかけかり、注意が上に向いた時に二体のロボットを錬金して創造した。

「そのゴーレムは私の創造武器を搭載したロボット」

形だけなら地球で人気のあるロボットを模倣することもできるだろう。

しかし技まで完璧に模倣するにはノイの力が必要だ。

そしてこのロボットはヴァイスの前世の趣味でもあった。

そのため、他のことよりも、より鮮明に記憶に残っていたためそれを再現出来るのだ。

ちなみに、ヴァイスはこれをよく夢に出てくると言い訳している。

「さてと、後残ったのは……結構いるし……面倒くさいからこれで終わらせよっつと」

「おい！お前ら魔法を放て！」

この少女に危険を感じた吸血鬼は何かされる前に倒そうとした。  
しかし少女は、そんな隙は与えない。

「行くよ！私のスーパーロボット軍団！」

そこには沢山の人型ゴーレムがいた。

大きさは全て普通の人間程度だが、デザインはモデルを忠実に再現している。

そして一斉に吸血鬼たちに襲いかかる。

サイトは最初の二体を知らなかった。

年代的にもサイトが知らないロボットだ。

しかし後から出てきたロボットは知っていた。

「マジンガーZにゲッターロボ、グレートマジンガー、ゴッドシグマ、ザンボット3、トライダーG7、オーガス、グラヴィオン、ダンクーガ、鋼鉄ジーク、エヴァンゲリオン、コン・バトラーV、ガイキング、ボルテス？、ゴッドマーズ、ライダーン、それにサイバスターまで……………」

ロボット祭りだ、俺は夢でも見ているのだろうか？サイトはそう思っ  
て目をこすった。

しかし目の前の光景は変わらない、ロボットたちがアニメの中でしか  
お目にかかれないと思っていた技で敵を倒していく。

サイトは吸血鬼の襲撃に最初は戸惑ってなにも出来なかった。

そして今もボーツと突っ立てるだけだ。

しかし、自分に優しくしてくれる数少ない貴族であるノイが戦っているのを見て、頭が覚醒した。

俺も戦わねえと、サイトはそう思い、何か使えるものが無いかを探す、何も無い。

サイトは心底嫌だったが、ギーシュに頼んで剣を錬金してもらおうとすると、ルイズに止められた。

「止めなさい、あんたが行っても足手まといよ」

「でも！女の子が戦ってるのにただ突っ立って見てられっか！」

「ギーシュを倒したからって勘違いするんじゃないわよ。吸血鬼はギーシュの百倍以上も強い。そしてノイは、それよりも強い。あんたそんな戦いについていけるの？」

「それは……」

「今は見てなさい。それがノイのためよ」

ノイのスーパーロボット軍団はちやくちやくと吸血鬼たちを倒している。

そして今、ノイは吸血鬼のリーダー格の男と対峙していた。

「大したことないね、吸血鬼っていうのも」

「黙れ！最早この状況で出来る事は貴様の首を刈る事のみ！覚悟しろ！」

「お兄ちゃんに刃を向けようとした分際でよくいうよ。親玉はどこ？」

「言うわけ無いだろう。しかしいずれ、貴様の兄も殺される！」

「フッフ、フッフッフ、ねえ、私って偉いと思わない？怒りをこんなに我慢したんだから」

ノイは突然笑い出した。

ノイに言っではいけない言葉の中で、第一位はヴァイスのことだ。ヴァイスの悪口は許さないし、なによりヴァイスを殺すなどの、たまった日には、生きて帰れる保証はしない。

あの夢を見た日から、ノイはヴァイスの敵に容赦はしないと決めているのだ。

そしてノイは、この時本気で怒った。

ノイは本気で怒る時、暴れ回るのではなく笑い出す。これはヤンデレの兆候ではないだろうか？

「あははははははっ！！死になさい」

ノイの体を沢山の武器、金属が覆っていく。

鎧のようにそれを身に纏い、ノイは動き出す。

足には超高速ダッシュが可能な靴。

右腕には衝撃派を飛ばすガントレット。

胴体には銃口だらけの鎧。

完全武装状態のノイ。

「ザ・クイーン・オブ・アース  
土妃咆吼！！」

ノイの体中にある銃口から一斉に鉛弾が発射される。

リーダー格の男はそれを避けた。

しかし、弾は全て男に吸い込まれるこのように軌道を変えた。

「グアアアアアアアー！！！！」

「創造武器、《蛇追弾》じゃついだん」

《蛇追弾》、蛇のように自在に軌道を変えて相手を追撃する弾。しかし吸血鬼はその程度では死なない。

男は痛みで一瞬意識を手放したが、すぐに復活する。  
しかし、その一瞬の間にノイは距離を詰めている。  
ノイは男の腹に手を添える。

「創造武器、《波動甲》」  
「ゴフッ！」

するとそのガントレットからもの凄い衝撃が放出された。

男は吹き飛ばされ、ゴロゴロと大地を転がる。

それを見て、ノイは全ての武装を解き、後ろを向いて歩き出す。  
そこへ、待ってましたと言わんばかりに男は立ち上がり、飛びかかる。

周りからは、後ろ！や、危ない！という声が響く。

そして振り向いたノイの腕には、グローブのようなものが。

ノイは男を避け、通行人とすれ違うように自然に男の横を通る。  
すると男は動けなくなった。

「私って結構色々な二つ名が付いてるんだけど、一番気に入ってるのは、曲絃師って言うんだ」

「貴様、何をした！」

「創造武器、《死鋼線》動かない方がいいよ、うっかり力を入れちゃったら切り刻んじゃうからね」

男はそれを聞いて自分の状況を理解した。

自分の体には鋼線が巻き付けられているのだと。

ノイは不敵に笑い、その場にいる人間に話しかける。

「心臓が弱い人は目を瞑っててね！それじゃあ行くよ！5！」

「やめろ！やめてくれ！」

「4！」

「嫌だ！」

「3！」

「謝る！アキラのことも喋る！」

このカウントの時点でその場にいたほとんどの人間が目を瞑っている。

吸血鬼は顔が真っ青だ。

ノイは笑顔を崩さない。

「2！」

「助けてくれ！誰か！」

この期に及んで殺そうとしていた相手に助けを求める男。  
ノイはイラツと来て少し力を入れてしまった。

「グアアアア！！食い込んでいる！嫌だ！」

「1」

「助け」

それは言葉にならなかった。

ノイはカウント1で思い切り力を込めた。

生徒の中には、脅しだと思っているもの、0で殺すと思っているものがいただろう。

まさかこんな生物の生死の場面で、悪ふざけとしか思えないようなことをすると予想出来た生徒が何人いただろうか。

しかしノイはふざけていたわけではない。

恐怖をじっくりじっくりと与えて、心の準備が出来ていないタイミングで殺す。

ヴァイスにあだなす者にはそういった殺し方を心がけているのだ。そもそも、その死に様と死体を目にした者のはごくわずかだ。



ノイは切り刻んだ後すぐに、死体を燃やし尽くした。  
周りもすでに処理は済んでいる。

全てのゴーレムに火炎放射を付けておいたのだ。

ノイはスーパーロボット軍団を土に戻し、全ての武器を消滅させて  
呟いた。

「私はクレインほど甘くないよ」

その言葉を言うと、糸が切れたように倒れた。

あれほどの創造武器を同時に作り出すのには無理がある。  
しかも魔法も同時に使っていたのだ。

今回の一件で、ノイは確実にペンタゴンになっただろう。

「何で、ノイが日本のロボットを知ってるんだ？」

そして、サイトの中で、疑問と希望が生まれた。

## 第20魔（後書き）

アプロディーテさんから頂いた、二つ名、曲絃師使わせて頂きました！

そしてノイの無双！

能力だけでみれば確実にノイが最強なんですよね。  
それに対応出来る実力があるので、フィーラが最強なんですけど。

ロボの数追加！  
書きたくなっていました！

## 第21魔（前書き）

今回のヴァイスはマジギレヴァイスです。

そしてアキラとの最終決戦！

果たしてヴァイスは勝てるのか！？

## 第21魔

アキラは自分の魔法でズタズタになった村を見回す。

メテオストライクの発動後、ヴァイスの姿が見えないのだ。

ヴァイスは確実にメテオストライクに巻き込まれていた。

ではなぜ、死体が見つからないのか？

それはヴァイスが生きていることを意味する。

アキラはすでにその答えにたどりついており、村やその周辺を探して歩いている。

魔法を使えばすぐだが、そんなつまらないことはしない。

アキラは、自分に見つかることに恐怖して隠れるヴァイスの姿を想像して、顔を歪めていた。

一方ヴァイスは、森の中にいる。

その近くにはタバサがいた。

ヴァイスはメテオストライクに巻き込まれた直後、脱出は不可能と判断して治癒の魔法を使い続けた。

傷ができてはふさがり、できてはふさがりの繰り返しで、魔力的にも限界が近づいていた。

そして魔法が止まると、地面に打ち付けられ、気を失っていたところをタバサに救出された。

今では意識も覚醒している。

「ありがとう、タバサ。でも、早く逃げてね」

「待つて。どうするつもり？」

「戦うけど？ どうせあいつが本気で探せばすぐ見つかるだろうし、それよりも奇襲した方が得策だからね」

「やめた方が良い。あなたはすでに限界。今なら私の方が戦える」

「魔力的には限界でも、基本的な体術なんかでは僕が戦った方がい

い」

魔法は使えなくても、ヴァイスは限界突破が出来る。それだけでも充分タバサよりは戦えるだろう。タバサはそのことを知らない為、ヴァイスの実力を見誤る。

「まあ、死ぬ気は毛頭ないけど、もしものがあつたらノイヤクレインに伝えて。僕のことは忘れろって」

「あなたは差し違えてでも相手を倒すつもりでいる。命は大切にすべき」

「……………無理でも、やらなきゃいけないんだ。家族のためだから」

ヴァイスは前だけを見て走り出す。

その頭の中は、すでに、アキラをどうやって倒すか、ということしか考えていない。

魔力は切れかかっているが、切れた訳じゃない。

ならば魔法を使つての奇襲が有効だろう。

それにいざとなつたら精霊魔法だつてある。

倒してやるさ、そんなことを考えて、アキラがいる地点に走る。

ヴァイスがアキラを見つけると、アキラは座っていた。

一休みしているらしく、特に警戒している様子もない。

限界突破状態の蹴りが効かなかったんだ、魔法か何かで強化した方がいいだろう。

そう考えたヴァイスは足にブレイドを纏わせる。

ヴァイスの足が、青白い光に包まれる。

思い切り走り出し、首にブレイド付きの蹴りをお見舞いする。

ガキーンツ！と、甲高い音が響く。

そしてアキラは、何事も無かったように振り返る。

「おいおい、奇襲とは汚ねえなあ。しかもしぶとい野郎だあ」

「……冗談キツイよ」

「ヒヤハハハハハハハッ！ テメエが奇襲してくるくらい読めてんだよッ！ そうでもしなきゃ勝ち目ねえもんなあ！ なあ！ ハハハハハハハハッ！！」

「……何をした？」

「簡単だあッ！ 硬化させたただけだぜえ？ んなこともわかんなくなっただかあ！」

ヴァイスは地面を蹴って距離を取る。

次の瞬間、世界が変わった。

何もない真っ白な空間。

いるのはヴァイスとアキラだけ。

「邪魔されたら興がさめるからなあ！ 邪魔が入らないようにしてやっただぜえッ！」

「っ！ こんなことが出来るなら最初から僕を閉じ込めて置けばよかったんじゃない？」

「冷静ぶって情報引き出そうと必死だなあッ！ あまりにも惨めだから教えてやんよッ！ 俺のこの力は俺と他人を一人異空間に閉じ込める！ そして一度閉じ込められた場合、どちらかが死ぬまで外には出られない！ 当然外からの干渉も不可能だぜえ」

「……真剣に一騎打ちってこと？」

「勘違いすんなよお！ 俺はこの世界を潰すつもりだがなあ！ なるべく強い奴と遊んでえんだよッ！ テメエをあっさり殺したらこの先つまんなそうだからなあ！ チャンスをくれてやるよッ！」

「……貰っという悪いけど、そう言うこと言ってる敵って大抵やられるよね？」

「それはフィクションの話だぜえ？それとも自分が都合よく強くなれると思ってんのかあ？」

ヴァイスは無言でナイフを構える。

ヴァイスは話の途中にそれに気づいた。

勝率は半分もないが、それでも最早後戻りは出来ない。

ヴァイスはすでに走り出していた。

本当に都合良く、ヴァイスはパワーアップした。

しかしヴァイスは、どこか様子がおかしい。

「チッ！怒りで理性がぶっ飛んだか……。つまんねえやつだ」

技なんて全く無い、素人同然のような動きだった。

ヴァイスは遠くに吹っ飛んでいき、白い地面に赤い液体をまき散らして落下する。





振りが単調な為、躲すのは簡単だが、その速度が段々と上がっていることにアキラは疑問を感じる。

違う人間なのだから、思考が違ふのはあたりまえ。

考えたからと言って、簡単にヴァイスが何をしているのかわかるわけじゃない。

「頑張つたら報われるなんてお約束展開はなあつ！空想の産物なんだよっ！」

「アアアアアアアアアアアアツツツツ――！！！！！」

何度吹き飛ばしても立ち上がるヴァイスに苛立ちを隠さないアキラ。しかし実際、さきほどからヴァイスはただ吹き飛ばされているだけ。勝利の確率など、一%以下に見える。

それでも自分に刃向かって来る、ヴァイスに、怒りをぶつける。

「精神崩壊したクズの分際で、調子に乗んじゃねえぞお！」

「ガハッ！ アアアアアアアアアアアツツツツ――！！！！！」

!!

頭を殴られて、地面に思い切りたたき付けられるが、すぐに起き上がって突っ込んでくる。

そこでアキラは更に異変に気づく。

「傷が、治ってるだ」と

「アアアアアアアアアアアツツツツ！！！！！」

ヴァイスの単調な攻撃を避けながら、考える。

何も考えずに振っているナイフなど、なれば考え事をしながらでも避けられる。

傷が治っているということは水の魔法を使っているということだ。

そして更に一つの違和感。

ヴァイスの身長や、体格が、最初に比べて大きく感じるのだ。わずかな変化を長時間でしているようなので、中々気づけなかった。それらのことをつなぎあわせ、ヴァイスの魔法を予想する。そして、ある結論にたどり付いた。

それに気づいてアキラは慌ててヴァイスから離れようとする。

しかし時すでに遅く、ヴァイスのナイフは、いつの間にかアキラの心臓を貫いていた。

「ゴフツ！」

ザ・キング・オブ・ウオーター

「水王君臨。頑張った者が必ず報われるわけではありません。しかし、頑張らなかった者が報われる道理はないでしょう?」

ヴァイスは深々と刺さったナイフをためらいなく引き抜く。

ナイフが突き刺さっていた胸から、血が噴出する。

アキラは血を吐いて地面に倒れる。

大地には二輪の赤い花が咲く。

「デメエ……最初から……」

「そうですね」

ヴァイスは先ほどまでのような狂ったような表情から一転して、無表情になる。

その瞳に何の感情が宿っているのかはわからない。

しかし、ヴァイスの返答が、最初から精神崩壊などしていなかったことを物語っている。

「説明しましょうか?最初から?」

「頼むぜえ……答えには自信があるが……一応な……」

「いいでしょう。まず、この空間に入った時、私が限界だったこと

は真実です」

ヴァイスは淡々とその時の情報を口にする。  
その声には一切の感情もうかがえない。

「そしてあなたが私を挑発した時、私は本気で怒りました」  
「マジギレ状態だったってことだろ……つまり、あれは演技だったわけだぁ……」

ヴァイスはマジギレした時、敬語で喋るようになる。  
その昔クレインを攫った夜盗を退治した時も、ヴァイスは敬語だった。

そしてその口調が丁寧になればなるほど、ヴァイスは怒っている。

「はい、理性が消し飛んだ振りをして、あなたの油断を誘う」  
「油断したつもりは……無かったんだがなぁ……」

説明をするヴァイスの背後の風が、不自然な動きをする。  
ヴァイスはそれに気づかず説明を続ける。

「わざと大振りで単調な攻撃をして、それに慣れさせる。そして隙ができたところをぐさりと一突き」

「あの速度を……説明しろ……ゴボツ！」

アキラは口から血を吐き出す。

ヴァイスは特に気にした風もなく話し続ける。

「簡単な話です。水は命、体を司る。独自の魔法で細胞を急速に活性化させ、身体能力を飛躍的に向上させました」

「やっぱりな……徐々にスピードが上がってたのは……そのせいか

……」

「そうです。傷については代謝が上がったからですね。そしてこの体は……」

そう言つてヴァイスは自分の体を眺める。

その体は、十代の少年のようなものではなく、二十歳ほどの青年の体だった。

「細胞が急速で活動したので、成長が早まったのです」

「ケケケ……なるほどなあ……わかりやすい解答ご苦労さん……」

「私からも聞きたいことがあります。あなたは風で身体能力を補助していましたね？」

「そうだぜえ……そしてペンタゴンだあ……お互い同じペンタゴンのはずなんだがなあ……」

アキラもそれだけがわからなかったようだ。

いくら不意を突かれたと言っても、同じペンタゴンであれほどの速度差が出るのはおかしい。

アキラは使っている魔法が違う、では済まされない、もっと大きな差があるような気がしていた。

「そうですね。それが私の嬉しい誤算です。私はペンタゴンではなく、ヘキサゴンです」

「なっ!？」

アキラは驚愕で目を見開く。

ヴァイスはスクウェアだった筈だ。

なぜそれが、いきなり二つも上がっているのか。

「簡単です。私は、本当にちょっとしたきっかけでペンタゴンにな

れる位の実力を持っていました。その状態の時に、マジギレですよ？それも過去最高に怒りましたよ。理性が吹っ飛んだのは演技だなんて言いましたが、最初は本気でしたからね」

「ケケケ……触らぬ神にんとやらだなあ……もう聞くことはないか？」

「はい、もういいです」

「そうかよお……じゃあなあ！」

男は語尾に力を入れてそう叫ぶ。

そしてヴァイスの後ろに待機させていた、風の刃でヴァイスを切り裂こうとする。  
エア・カッター

「残念でしたね。私は、少し話をした程度で、家族に杖を向けた敵を許す気はありません」

その言葉を最後に、アキラの意識は途切れる。  
エア・カッター  
風の刃は自然に消滅した。

「凍り付く罪血。あまり気分のいい魔法ではありませんね」  
フリーズブラッド

凍り付く罪血、刺さった事にも気づかれないほどの細い氷の針を、相手の体中の血管に刺していく。そして刺さった氷の針の温度をマインスまで下げ、体内に流れる血液を凍り付かせる魔法。

ヴァイスは話をしている最中に何本も何本も氷の針を刺していた。そして、アキラを殺した。

アキラの死により、真っ白い空間は、粉々に砕け散った。

そして周りを見ると、そこは森の中だった。

アキラの死体が見えないことに違和感を感じたヴァイスの元に、神の声が届く。

（ヴァイス、やったまいたいね）

（うん、かなりギリギリだったけどね）

（あなたの妹たちもそれぞれ吸血鬼を倒したわよ）

（そっか。一安心だよ。ところで、あいつは？）

（あいつって、アキラ？まだ名前知らなかったの？アキラは神の世界で消滅したわ）

（そっか……きつとあいつ……アキラにも、世界を壊したくなるよなことがあったんだろうね……）

（黄昏れてるところ悪いけど、あいつは頭がイカレテルただのキチガイ野郎よ？前世でも裕福な家庭でそだったしね。何か刺激が欲しいから世界を壊すとかほざいてたわよ）

（……）

（冗談じゃないわよ？ま、もう完全に消滅したから安心しなさい）

（そつ。じゃあこれで本当にめでたしだね）

（ああ、それと、あなたの体、異空間から戻る時に治してあげたわよ）

（え？……いつのまに……）

治した、というのは、細胞活性のことなどだ。

大人の体になっていたが、来た時と同じ状態に戻っていた。

（今回だけよ。もうあんな魔法使わないようにしなさいよ）

（たぶん大丈夫でしょ。それこそ、神の世界で事件でも起きない限り）

（グッ……悪かったわよ……ごめんなさい）

（ま、済んだ事は忘れよう！早くフィーラに合流してノイたちに会わないと）

（ちよっと待ちなさい。今回のお礼に、あなたの願いを三つだけ叶えるわ）

（この世界には干渉出来ないんじゃないの？）

（あなたには干渉出来るって言ったでしょ。今はもう転生者もないし、大体のことは叶えてあげるわよ）

（うーん、保留で。別に今叶えたい願いはないし）

（そう、まあいいわ。本当に感謝してるわ。ありがとうね）

（どういたしまして）

それで神の声は聞こえなくなった。

ヴァイスは、森で取った花を、村の中心に添えて、フィーラの気配を探した。

フィーラとは割と簡単に会えて、タバサと一緒にヴァイスを探していた。

服はボロボロだが、体には傷一つ無いヴァイスの体を見て、タバサは驚いていた。

とりあえずタバサが受けた任務を完遂したので、ヴァイスとフィーラは先に学院に向かってリオに乗った。

タバサはこのことをガリア王家に伝えず、適当に嘘をついて吸血鬼を倒したと報告した。

理由はヴァイスにそう頼まれたからだ。

ヴァイスはフィーラと吸血鬼たちについて話をしていた。

なぜ狙われたのか、心辺りはあるかなど、色々なことをフィーラはに聞かれたヴァイスは、僕にもわからないと言ってその場をやり過ぎた。

実際、世界を壊そうとしているキチガイ集団になぜヴァイスが狙われたのか、普通はわからないだろう。

ヴァイスは転生のことについて、妹たちだけにでも話しておこうかと考えたが、やめた。

ヴァイスとフィーラは、お互い心にもやもやを残して、学院に飛んだ。

## 第21魔（後書き）

勝ちました、我らがヴァイス。

しかしファイラとサイトは疑問を持ち、ヴァイスは悩み中。

一応オリジナルイベント編はここで終了です。

元々熱血バトルにする予定はあまりなかったもので、これから先の戦闘はヴァイスたちの無双になりますね。

そして今、かなり悩んでいるのが、ロリッ子をこの世界にゲスト出演させることです。

ハーレムに加える予定は今の所ありませんが、一回位実体でヴァイスの前に登場させたいところです。

しかし、考え無しでやると物語が荒れるから困るんですよね……

フリーズブラッド

凍り付く罪血は、ドラグリーンさんに頂いたものです。

ありがとうございます。

他にも、魔法を考えて下されば、使用可能な場面で使用したいと思っています。

誰でも構いませんよ？

そして次回は人物紹介！

今日中にあげようと思ってますが………頑張ります！

ちなみにこれは、感想で希望があったので紹介をいれます。

最後に！

目次ページの下の方にある人気投票ですが、あれで上位のキャラは番外か何かを書こうと思っているので、是非投票して下さい！



それでは、さようなら！

人物紹介（21魔まで）（前書き）

感想で希望があったので書きました。

今日中に出来てよかったです……

見落としている点があったら報告してください。

## 人物紹介（21魔まで）

ヴァイス・ド・アングルジャ（旧、ケイト・ド・アーリア）

言わずと知れた、我らが主人公。

ロリツ子（神）に選ばれて、ゼロの使い魔の世界に転生した。

現在15歳。（今年で16歳）

それほど格好いいわけでもないが、地味だというわけでもない。  
中途半端な顔立ち。

水はヘキサゴン。

土はスクウェア。

風はスクウェア。

火はトライアングル。

土はもうすぐペンタゴンになりそうなくらいの実力。

火は相変わらず変わりなし。

転生者との戦いで水のみヘキサゴンになった。

神の影で、杖無し、詠唱無しで魔法が使用でき、同時にいくつもの魔法を使える。

精霊魔法も使えるが、カウンターなどは使えない。

原作で出てくる『精霊の力』と、本作で出てくる『精霊魔法』は似ているが、少し違う派生をした別物。

いずれ本編で明かされる。

ロリツ子（神）に貰った力

魔法と体術の限界は青天井で、成長し続ける。

体のリミッターを外し、100%の力を出す事が出来る。

ただし、どこかのゾンビのように力を溜めて100%以上の力を出すのは無理。

リミッター解除時のみ、自然治癒能力が向上される。

特別な『瞳』。現在出ているのは、精霊を見る力と、内部構造や情報を把握する力。

よく使う魔法は、ウォーターエクスプロージョン。

二つ名は『爆水』。

過去に鎌を愛用したが、最近は全く使われていない。

ちまたで有名な呼び名は『死屍の兄妹』。

歩く厨二病になった感じがして、ヴァイスはかなり嫌がっている。

現在の最強魔法は、ザ・キング・オブ・ウォーター「水王君臨」

細胞の活性化により、飛躍的に強大な力を得る魔法。

代償に自分の成長速度がかなり早くなる。

使い魔。

ノイ。

クレイン。

フィーラ。

ヴァイスの歩んだ道。

ケイト・ド・アーリアとして生まれ、8歳の時にノイを連れて家を出た。それからは地球の知識を利用し、一年間で莫大な資金を稼ぎ、ゲルマニアで貴族となった。母親に土くれのフーケを選び、アンダルージャの土地を買って、ヴァイス・ド・アンダルージャとなる。そしてしばらく平和な日々をゲルマニアで過ごす。10歳の時にツエルプストー家と仲良くなり、ティファニアを家に迎え入れる。それから数ヶ月後、攫われていたクレインを保護し、義理の妹としてアンダルージャ家に迎え入れる。それからはまた平和な日々が続く、12歳の時に使い魔を召喚する。それがとんでもない強さの悪魔である、フィーラ。少し戦闘をした後、フィーラと使い魔の契約をして家に迎え入れる。そこへ更に、ノイとクレインがゲートをくぐってやってきて、三人を使い魔とした。それから精霊魔法で作った石や、カード、ライトノベルのようなものを売り出し更に財力を強化する。そして14歳の時、学院に入学した。学院で神の影のことや、その使い魔のことを調べたりした。入学して少ししてから、ガリアに無断で進入し、吸血鬼のエルザを義理の妹として家に迎え入れる。二年生になり、使い魔召喚などのイベントをこなし、キチガイ転生者を始末して、現在に至る。

ノイ・ド・アンダルージャ

元は平民で、村が亜人に襲われていたところを、ヴァイス（当時ケイト）に助けてもらい、行動を共にするようになった。

現在は13歳（もうすぐ14歳）

銀色の髪を、現在はツインテールにしている。

整った顔立ちで、少しつり目気味の勝ち気な少女。

土のペンタゴン。

今回の一件で、精霊魔法を会得する。

神影の左手、スヴィーウル。

無から武器を創造する能力を持つ。

想像力やイメージ力次第では、どんな武器でも作り出す事が出来る。ただし、死や、絶対を操る力を持つ武器の創造は不可能。

そういったもの以外は作れるが、想像力、イメージ的に、作るのが厳しい武器も多数ある。

うまくイメージして作った武器ほど、長く使える。

ただし、消すのは任意で可能。

他にも、派生として少し珍しい武器創造が出来るのだが、今は秘密。

一般的な二つ名は、『鋼鉄』

一部では、『曲絃師』

出てきた武器

《透円刃》。目に見えない透明のチャクラムを、自分の意思で動かす事が出来る武器。

《陽炎》。光を屈折させ、自分の姿を視認させない武器。足甲型なのは、敵に勘違いさせるため。

《蛇追弾》。狙った相手を追尾する弾丸。

《波動甲》。手のひらの部分から強力な衝撃派を放つ武器。

《死鋼線》。ありとあらゆるものを切り裂く鋼線。伸縮自在で、それが切断出来ないものは、自らの手にはめるグローブだけ。

他にも、スーパーロボット軍団など。

現在の最強魔法は、ザ・クイン・オブ・アース「土妃咆吼」

創造武器や金属を自分の身に纏い、死角をなくす魔法。  
体中、全ての場所から武器が現れ、相手を攻撃する。

使い魔

ルー（アイルー）

ノイの歩んだ道。

ノイとして生まれ、六年間村で平和に暮らす。そんなある日村に亜人が攻めてきて、両親を殺される。そこをヴァイスに救われ、行動を共にするようになった。10歳の時にヴァイスの使い魔になり、自分が神影の左手であると知ったのは、13歳の時。それ以来、ヴァイスの頭の中を覗きまくって想像力を鍛えていた。学院では平和に過ごし、二年生で使い魔のルーを召喚する。学院に攻めて来た三十人の吸血鬼を相手に、完全無双して現在に至る。

クレイン・ド・アングルージャ

一人でフラフラしていたところを夜盗に捕まり、そこをヴァイスに助けて貰った吸血鬼の少女。

それ以来ヴァイスの義妹になっている。珍しい、かなり若い吸血鬼だ。

現在10歳（もうすぐ11歳）

金髪のストリートで、長さは背中に届くくらい。

身長は140くらいで、最近は背が伸びてない。

あどけなさが残るといふより、まだまだ幼い少女。

風のペンタゴン。

精霊魔法は使えるし、風に限れば全ての精霊がクレインの味方。

神影の右手、アルスイオーヴ。

生物の成長速度を操り、意思を通じさせることが出来る。

成長速度を操る場合、効果を及ぼす範囲が限定されるほど、効果が上がる。

吸血鬼との戦いで、膝関節のみを集中的に成長させていたのはそのため。

一般的な二つ名は、『風妃』

一部では、『森の支配者』  
プラントマスター

植物のある場所では無類の強さを誇り、それがなくても風を自在に操る。

本気で遍在を作れば、三桁を軽く超える。

使い魔ではないが、風の韻竜であるフランとは仲がいい。

本編ではフランも人の姿で戦った。

また、風の精霊を使い魔として味方に付けている。

現在の最強魔法は、『ザ・クイン・オブ・ウィンド風妃乱舞』

遍在を何十体も出し、その全てに身体能力補助の魔法がかけられて



いる。

使い魔

フリーゼ（風の精霊）

クレインの歩んだ道。

五年間、母に育てられ、いきなり捨てられた。そこを夜盗に捕まり、ヴァイスに助けられた。そのため、世の中のことを全く知らなく純粋。それから屋敷で平和に暮らしていた。ヴァイスが学院に行く三年前、ノイから、ヴァイスがトリステインの学院に行こうとしているという情報を知り、勉強と魔法を頑張り始める。無事9歳で学院に入り、それから平和に暮らしていた。二年生で風の精霊、フリーゼを使い魔にし、実家に侵入してきた吸血鬼を一人屠って現在に至る。

フィーラ・ド・アンダルージャ

ヴァイスに使い魔として真つ先に召喚された、悪魔の少女。当時はヴァイスと大差ない身長だったが、現在は大きくなった。

現在は???歳

今は亜麻色の髪をポニーテールにしている。

大人っぽく、色っぽい美人。

系統魔法は計測不能。

精霊魔法を操る。

神影の頭脳、ミョズヴィトニル。

高度な演算能力と、感情、または心を多少操る力がある。

対象者が現在持っている感情とは逆の感情を発生させることができる。

また、現在持っている感情を成長させることも出来る。

更に、ある程度感情を小さくすることも出来る。

二つ名は、『獄炎』

とんでもなく高い身体能力を有しており、頭もスーパーコンピューターレベルにいい。

なにより精霊を味方に付けるのがうまく、風以外の三つの精霊魔法は誰よりもうまく扱える。

その全ての魔法が高威力で、相手を殺さないで倒す事の方が難しい。

現在の最強魔法は不明

使い魔。

リオ（リオレウス）

フィーラの歩んだ道。

ヴァイスに召喚される以前は不明。ヴァイスに召喚されてからは、楽しい毎日を送っていた。魔法学院に入学し、二年生でリオを使い魔にする。乗り込んだガリアで、調子に乗った吸血鬼を瞬殺して、現在に至る。

ロリツ子（神）

ヴァイスをこの世界に送った張本人。最近神の世界で事件があったが、解決した。その事件で裏切った神の一部のせいで今回の転生者騒ぎは始まった。

結構上位の神で、それゆえに嫉妬をかうことも多かった。

いくつかの世界を管理しているが、一番よく見ているのはヴァイスの転生した世界。

なぜかそれが一番面白いのだ。

ロリツ子と言われることを嫌がるが、定着したあだ名は覆らないだろう。

現在本編に登場させるか考え中。

フラン

クレインの親友。風の韻竜で、実力はシルフィードとは比べものにならない。

クレインが一年生の時、偶然森で出会い意気投合したのが出会い。自分よりも風に愛されているクレインを見て、フランはクレインを主と決めた。

台詞だけ見ると、執事みたいだが、実際は で、人間体になると金髪美人のお姉さんみたいな容姿だ。

対吸血鬼戦で活躍し、自らの使ったスプラッタ魔法を見て気絶するという、可愛い一面も。

イル

番外編にのみ登場した転生者。前世で色々あり、キャラを作つてヴァイスを葬ろうと企てていた。ヴァイスに敗れ、その心に感動し、ヴァイスに惚れた。もしかしたら再登場もあるかも？

#### グロウス・ド・アーリア

ヴァイスの元父親。利益を上げる事を第一に考えている。ヴァイスに平民の娘を家に迎えることを認めず、その結果ヴァイスは家を出た。それをグロウスは攻めておらず、ヴヴァイスの手紙に書いてあったように探さない事にした。また、ヴァイスが動きやすくなるように、ケイト・ド・アーリアは死んだという事になっている。

#### グレイシャ・ド・アーリア

ヴァイスの元母。心優しい人で、グロウスの本音をいつも見抜いている。ヴァイスがいずれ家を出るであろうことも予想していた。人の本筋を見分けるのが得意なアーリア夫人。

#### ウィーデ・ド・デルシラ

土地名は初登場。元伯母で、暴風のウィーデ。厳しいように見えて、優しい一面もあり、筋の通っている人。家出したヴァイスを心配し、連れ戻しはしないが、見守る事にした。

## 人物紹介（21魔まで）（後書き）

蛍夜「久しぶりにやって来ました、in後書き」

イル「番外しか出番がなかったイルです」

ロリ「ロリッ子と言われ続ける神です」

蛍夜「テンション低くね？」

イル「だって私もう関係ないもん。敵だったアキラの方が一回出演多いし」

ロリ「私はすでに人気投票で、ロリッ子を登場させるべきか？の質問で一票入ってるから満足なんだけどね」

イル「私だって出たいー！蛍夜、私のも質問置けー！」

蛍夜「まあ、いいけどさ……」

イル「私、人気投票に票入ってるんだから……きっと大丈夫……」

ロリ「ねえ、私はどうにでも後付できるけど、イルはどうすんの？あったかもしれない物語……。パレルみたいなもんじゃない？」

蛍夜「その辺は別の世界ってことにして、お前が連れてくればいいんだよ」

イル「お願いね、ロリッ子」

ロリ「あなたそれが人をお願いする態度？」

蛍夜「わー、ロリツ子の額に青筋が浮かんでるよー」

ロリ「棒読みすぎるのよーっ！」

イル「私は自分の世界に帰ります。そしてヴァイスと幸せに暮らします」

蛍夜「私のヒーロー（笑）」

イル「笑うなあー！」

蛍夜「さて、いい感じで二人が壊れたところで、イルのアンケートも一応追加しておきます。それでは、さようなら」

イル＆ロリ「「ちょっとこっちに来なさい」「」

蛍夜「……………ひー」

イル＆ロリ「「その棒読みがむかつくのよおー！……」」「」

蛍夜「アンケートいじってたらデータ消えた…………」

イル「じゃあ私に入った票は！？」

蛍夜「無効だ…………」

イル「そんな……」

蛍夜「投票して下さった方、申し訳ありません。こちらの不都合で  
今までの人気投票のデータが飛びました。もしよろしければ、もう  
一度投票して下さい」

## 第22魔（前書き）

色々な所で書きましたが、人気投票のデータが一回飛びました。

申し訳ありません。

もしよろしければ、また投票して下さい。

それと、今回は後日談のようなものです。

最後の方にシリ阿斯が入ります。



## 第22魔

吸血鬼を倒して気絶したフランは、数時間で目を覚ました。

気配を確認して、クレインの位置と敵がいなかを確認する。

周りに誰もいないことを知ったフランは、一旦アンダルージャ家に  
戻ることにした。

家からはあまり離れていない為、人間の姿でもすぐに着いた。  
正面から家に入り、クレインを探す。

フランは何度か人間の姿でこの家に入った事があり、構造は把握し  
ている。

フランは、まず最初にクレインの部屋に向かった。

部屋にたどり付くと、ドアをノックする。

すると中から、入っていいよー、とクレインの声が聞こえる。

「お嬢様、お怪我はありま……お嬢様!？」

「大丈夫だよー。あんまり痛くないからー」

クレインは傷だらけでベッドに横たわっていた。

すでに何度も治癒されたようで、命に別状はない。

幸い痕になりそうなほど深刻なものはないが、それでも主人に傷を  
付けた者をフランは許せない。

「お嬢様、その傷は誰につけられたのですか？」

「さー？名前は知らないよー？」

あまりにも呑気なクレインだが、フランはそれでいいと思っている。  
この幼い主人が憎しみにとらわれるところは見たくない。

そう考えてクレインを見つめていたフランの耳元で、小さな声が聞

こえた。

「心配するでない。こやつに傷を付けた輩はわしが葬った」

「！風の精霊さま！？」

「大きな声を出すでない。今はこやつの使い魔じゃ」

それを聞いて、フランは、この少女を主と決めた自分の判断が間違  
って無かったことを思い知らされる。

風の精霊さまを使い魔にするとは……。流石お嬢様です、フランは  
そう考えて、部屋を出た。

主の無事は確認出来た。次は奴らが何者なのかを調べなくてはなら  
ない。

フランは冷静に判断して、トリステイン魔法学院に行くことにした。  
吸血鬼たちは、クレインではなく、アンダールジャ家を狙っていた。  
つまりこの家の中心であるヴァイスが関係しているのは間違いない。  
奴らが何者で何を企んでいるのか、それを確認するためフランは空  
を飛ぶ。

吸血鬼三十人を相手に全くの無傷で勝利したノイは、気絶してから  
数十分で目を覚ました。

周りを見ると、それは自分の部屋だった。

ノイは、状況を頭の中で整理し、オスマン学院長と話しをするべき  
だと判断した。

学院内でノイは、ちょっとしたヒーローのような存在になっている。  
最後のグロテスクな殺し方を目撃していない生徒は、吸血鬼たちが

ら自分を守ってくれた強い少女と思っている。

教師でも、実際あの場に居合わせたコルベール先生と、魔道具で一部始終を見ていたオスマン学院長しか最後は見えていない。

生徒に至っては、ほんの数人。それもルイズやキュルケのように、原作に関わった人物だけだ。

教師たちはなぜ学院に吸血鬼が攻めて来たのか全くわかっておらず、王宮にも調査を要請したが、学院を守ったノイに対する評価は良い。

そして元々可愛い。普段は必要以上に目立つ行動を控えている為、キュルケやルイズに隠れがちだったが、今回の一件で皆、ノイに注目した。少しつり目がちな瞳が、凜々しさを感じさせ、戦闘となると格好良くも見える。そんな風に目立ってしまったノイを、青春まつただ中の少女少女が放っておくわけもない。

そんなこととはつゆ知らず、ノイは普通に学院内を歩いてしまった。寝ている時は、先生がそつとしてあげなさいと言ったため誰も騒がなかったが、起き上がった今は違う。

ノイがまず最初に異変を感じたのは視線。

何故かやたらと熱っぽい視線で見つめられるのだ。

そして極めつけは、手紙。

まだ吸血鬼を倒してから数十分しか経っていないにも関わらず、ノイは二十通近くラブレターを貰った。

しかもその全てが女子だった。

ノイは意味がわからず、貰った手紙をポッケにしまっていたが、流石に入りきらなくなり、一旦部屋に引き返した。

さて、考えてみて欲しい。ノイは、使い魔として男子寮のヴァイスの部屋で過ごしている。

最初はいきなり出てきたノイに対応出来なかった男子が、戻ってきたノイに群がり始めたのだ。

デートに誘ったり、口説いたり、ここにヴァイスがいたら全員ただでは済まなかっただろう。

ノイは用事があるからと全て断り、学院長室に走る。

そうしなければすぐに誰かに引き留められてしまうのだ。

何とか学院長室にたどり付き、ノックをする。

中からオスマンが入りなさいと声をかけ、ノイは部屋に入る。

部屋には、オスマン学院長とコルベール先生がいた。

「失礼します」

「して、何のようじゃ？」

「先ほどの吸血鬼の襲撃についてです」

「ふむ、何か知っておるのか？」

「吸血鬼たちは、奴がアンダルージャだ、と言いました。それはつまり、アンダルージャ家の者を狙っていたということになります」

「何か心辺りがあるのかの？」

「いえ、それが全くわかりません。しかし、友人が殺されそうなところを黙って見ているわけにもいかず、応戦しました」

「それはわかっておる。それについて罰を与える気はない。むしろ感謝している。当然じゃろう、君がいなければ、あの数の吸血鬼に勝つのは不可能であっただろうからの」

そこで一旦言葉を句切る。

そして次にコルベール先生が話し始める。

「ミス・アンダルージャ、あの武器や姿はなんなのですか？」

「うっ……そ、それは」

「言いづらいこと……やはり、君は歴史の闇に消えた神の影の使い魔なのですね？」

「！?……どうしてそれを知っているのですか？」

「一年ほど前に、ミスタ・アンダルージャ、いや、ヴァイス君に聞いてね」

「兄に……そうですか兄が話したのなら信用に足る人だと言うことですね」

そしてノイは、自分たち兄妹のことを話した。

神の影であるヴァイス。

その使い魔である、ノイ、クレイン、フィーラ。

能力や名前など、大まかなことを伝えた。

「神の影……ほとんどの書物に記録が残されていない、始祖ブリミルを影で支えていた存在」

「そうらしいです。そして、はっきりと教えてはくれませんが、兄は虚無を使える者を知っていると思います」

「虚無じゃと？なぜそのようなことが？」

「わかりません。ですが、普段はそんなそぶりを見せないのに、たまに虚無についてぶつぶつ言ってるんです。それに行動が不自然な時もあります。なので恐らく、兄は虚無について何か知ってます」

そう、ノイはヴァイスが何か隠し事をしていることに気づいていた。何年も一緒にいるのだ、わからないわけがない。

それはクレインもフィーラも同じだ。

二人とも、ヴァイスが何か不自然なところには気づいている。

でもそれが、何かを企んでいるわけじゃなく、この平和を守るためだということも、わかっている。

だから誰も追求しない。それが一番幸せなのだ。真実は、時として残酷だ。

「うむ、ではもう下がった良いぞ」

「ミス・アンダルージャ」

「名前で呼んで下さい、先生。兄の信用している先生ですから」  
「では、ノイくん、君は今学院で凄い人気だ、気を付けるのだぞ」  
「……？何で人気なんですか？」  
「気づいてなかったのかい？君が学院を吸血鬼の魔の手から救ったと噂が流れているよ」  
「は？昨日の今日どころか、つい数十分前のことですよ！？」  
「規模は小さいが、君はこの学院の英雄みたいなものだからね」  
「……わかりました、気を付けます………」

ようやくノイは手紙やデートのお誘いの理由がわかった。  
今まで目立たないようにしていたが、静かな学院生活とはおさらばだ。

数少ないスクウェアで、嫉妬されることはよくあったが、恐らくそれもほとんどなくなるだろう。

ノイは少し憂鬱な気分で自室に戻った。

サイトはノイが起きたという話を聞き、急いで男子寮に向かった。  
ノイはすでに学院長室で話を終えた後で、部屋で休んでいる。  
他の生徒は、流石に部屋に入る勇氣はないようで、部屋の前でうろちしているのが結構いた。  
しかしサイトはそんなことに構ってられない、もしかしたら帰れるかもしれないのだ。  
他の生徒に邪魔をされないように、ノックもしないで部屋に入る。  
中ではノイが、着替えをしていた。  
下着姿である。しかし、驚いたのは、ルイズが着ているような物ではなく、ブラを付けていたのだ。

やはりノイは地球のことを何か知っている。サイトはそう思った。しかし、着替え中に侵入してきたという事実は変わらない。ノイは創造武器、《紫電》でサイトを気絶させた。

創造武器、《紫電》。簡単に言えばスタンガンのような物。

サイトが気絶から目を覚ますと、寝間着姿のノイがいた。これまた日本のパジャマみたいだ。しかし、無断で侵入して着替えを見てしまったのだ、最初にやるべきことはやはりあれだろう。

「すいませんでしたー！」

サイトは土下座した。

しかしノイは、すでに大して怒ってもいなく、サイトを見て、嘆息した。

「あんな風に入ってくるなんて、大切な用事なんですよ？でもノックくらいしてよね」

「ご、ごめん……。それで、話なんだけど、日本って知ってる？」

「！？……ちょっと待って」

ノイはそう言つて、何かの魔法を使った。そして真剣な顔でサイトに向き直る。

「何をしたんだ？」

「サイレントとロックをかけたのって言ってもわかんない？」

「ああ。それで話の続きだけど……」

「知ってるわ、日本。アニメや漫画、ライトノベルやゲーム。独特の文化があるらしいわね。それだけじゃなく、私が今着ている物も、

日本のものを参考にしたらしいしね」

「俺っ！その日本から来たんだ！」

「本当っ！？実在したんだ……日本」

「なあ！どうして日本を知ってるんだ！教えてくれ！俺は日本に帰りたいんだ！」

「……全部お兄ちゃんの頭の中にあつたわ。……おかしいと思った夢にしては鮮明すぎるのよ。でもだとすると、何でお兄ちゃんは日本のことを知ってるの？」

「おーい、戻ってこーい」

「あ、ごめん。それで私は詳しくは知らないの。でも、お兄ちゃんなら、帰れる方法もわかるかも」

「そっか……。でも、なんでヴァイスは日本のことを知ってるんだろ？見た目はこっちの人っぽいけど……」

「ところで、どうして私に日本のことを聞いたの？」

「ああ、さつき変な男たちと戦ってただろ？そんな時に出てきたロボットが、日本のものだったから」

「そうなんだ。お兄ちゃん、あれが大好きでさ、前にお兄ちゃんの前で披露したら、夢が叶った！、なんて言って抱きつかれちゃった！えへへへへ……」

「そうか、ヴァイスはロボットが好きなのか。俺も結構好きだったからなあ……。そういや、なんでガンダムはなかったんだ？」

「あー、お兄ちゃんはあるガンダム好きじゃないんだって。スパーロボットが素晴らしい！って言ってた。あと、マジンガーZは最高とも言ってた」

「へーそうなのか。しかし、聞けば聞く程謎が深まるな……」

「そうだね……。ま、帰って来たら聞きなよ」

「ああ、サンキュウな」

サイトはそう言って部屋を出た。

ルイズの部屋に帰ると、洗い物が待っているのだが、帰れるかもし



れないと思うと、どうってことはなかった。

僕とフィーラはリオに乗って、数時間でトリスティン魔法学院に帰還した。

人がいない広場に降り、周囲を確認する。

なぜか、花束やらプレゼントやらを持っている人が一杯いた。

「今日って何かあったっけ？」

「私は知らないわ」

「そうだよねえ、ていうかさ、吸血鬼はどこいった？」

「ノイでしょ。あの子は数で押し切れる相手じゃないのよ」

「それもそうだね」

それでも一応心配なので、自室に向かう。

途中、知らない女生徒に、お姉さまを下さい！とか言われた。何の事だろうか？

部屋の前に着くと、何故か知らない人が沢山いた。

「なにやってんの？」

その声を掛けると、全員一目散に逃げていった。失礼な人達だよ、まったく。

ドアを開けると、ノイがいた。

「ただいま。ノイ、やっぱり大丈夫だったね」

「おかえり。やっぱりって、知ってたの？お兄ちゃん」

「うん、親玉を倒してきた」

「……お兄ちゃん、どうしてお兄ちゃんはいつもそうやって適切な対処が出来るの？今思えば、エルザのことだって不自然だよな？」

「いや、今回は、ちよつと怪しいな」なんて思ってたら敵が居ただけだよ」

「じゃあ何で怪しいと思ったの？お兄ちゃん、そろそろ話してよ、本当の事」

「そうね、ヴァイス、あなたは気づかれてないと思っていたみたいだけど、あなたが私たちに隠し事をしていることくらい知ってるのよ？一応言っておくけどクレインもよ」

……まあ、隠し通すのは難しいよね。

いつかは話すつもりだったし、それが今でも問題は、ないか。

「わかった。その前にクレインを迎えに行こう。風の精霊とフランがいるから、負けてはいないと思う」

「そうだね、わかった」

「仕方無いわね、いいわよ」

そうと決まればクレインを迎えに行きますか。  
すると、ドアが開いた。

「ヴァイス、貴様に聞きたいことがある」

見知らぬ金髪の女性が入ってきた。  
でもこの精霊の動き、見た事がある……

「君は……フラン？」

「貴様の前でこうなるのは初めてだったな。まあそれはいい。あの吸血鬼たちは何者だ？」

「ああ、それか、それについてはクレインがいる時に説明するよ。ていうか今から迎えに行こうと思ってたところだよ」

「お嬢様は今休んでいる。戦いで傷を負った。それを癒やしているのだ。あと一日寝れば完治する。だが私は、その吸血鬼たちを許さない。そしてお嬢様が傷を負ったのが貴様のせいならば、私は貴様を許さない」

「……許さない、か。そうだね、もしかしたら死んじやってたかもしれないんだ。許されることじゃないよ。もしもフランが、僕を殺したくなったら、殺せば良い。僕は、自分の敵を倒すのが精一杯で、皆を守れなかった」

そうだ、守るだなんて言っただけながら、結局僕は自分のことしか出来なかった。

むしろ皆を危険にさらした。

僕は、何の為に強くなったんだろう？

「何言ってるのよヴァイス。別にあなたが悪いわけじゃないでしょう」

「あいつの狙いは僕だった。だから僕が皆を家族にしたせいで、傷つけてしまったんだ……」

そうだ、僕が身勝手なことをしたせいだ。

僕は、守りたい者を守れなかった。

「家族にしたせいってなによっ！私は感謝してる！私のために、一度貴族の立場まで捨ててくれたお兄ちゃんに感謝してるよっ！それが間違いだったって言うなんて、お兄ちゃんでも許さないよっ！」  
「そうよ、ヴァイス、私たちは自分の意思であなたと共にいるの。あなたに守って欲しくて一緒にいるんじゃないわ。あなたを守りたくて一緒にいるのよ」

「僕を……守る？どうして……？僕は……皆を守るんだ……」

「家族だからでしょっ！家族なんだからっ！お互いに守り合って当然でしょっ！クレインだって、きつとそう思ってるっ！」

「ヴァイス、あなたは どうして 私たちを守りたいの？」

「どうして？そんなの、大切だからだ。」

大切な家族で、皆で楽しい時間をいつまでも過ごしたいから……皆と、ずっと一緒にいたいから……

「大切……だから……」

「そうよ、私たちだって、あなたが大切なの」

「私はっ！お兄ちゃん守るって決めたのっ！お兄ちゃんに助けられて！その後もずっと足手まといでっ！そんなの嫌だったっ！だから今度は私が守るって決めたのっ！」

そんな風に思ってたんだ……ノイ。

足手まといなんて思ってた事ないのに。

「ノイ……ファイラ……。ごめん、フラン。僕のことを死ぬほど憎くても、僕を殺さないでくれるかな？僕には、一生守り続けたいものがある」

「私はお嬢様の僕だ、お嬢様が貴様を殺すと言うなら、殺さない。それと勘違いするな、許しはしないが、私は貴様を評価している。」

明日お嬢様を連れてくる。それまでは大人しくしている」

「わかった」

フランは窓から飛び降り、風竜になって空を羽ばたいて飛んだ。

僕は、一瞬とは言えなんで道を間違えたんだろっ？

守っていいこう、これから。僕の家族を。

「ところで、ノイ、その手紙と花束とプレゼントはなにかしら？」

「これ？実は吸血鬼を倒したせいで英雄扱いされてるの。それだけで目立っちゃってね」

「まあ、ノイは元々可愛いから、目立ったら凄いモテるだろうね」

「……………」

「どうしたの？ノイ。顔が真っ赤だよ？」

「ヴァイス、これから大変よ。きっと色んな生徒にあなたは敵視されるわ」

「なんで！？僕なにかした！？」

「したわ。学院のアイドルのハートを盗んだのよ」

「えー。そもそもアイドルって誰さ。聞いた事ないんだけど……………」

これからも僕の日常は大変そうです。

## 第22魔（後書き）

蛍夜「いやー、今回は旧タイトルの、守りたい者の為だけに、に適した回だったね」

イル「そんなことより人気投票よ、人気投票。あんたデータ消えたってどういうこと？」

蛍夜「そのままです。今までの票が全て消し飛んで無効になった」

イル「嘘でしょ！？私本編に登場出来そうな勢いだったじゃん！？」

蛍夜「それよりもフランの人气が凄かったがな。というかフランで結構格好いいよね」

イル「そうね、竜にしてはキャラが立ってるわね。メイン側の悪魔より目立ってるんじゃない？」

フィ「それは私のことを言ってるのかしら？」

イル「すいませんしたー！」

蛍夜「でも実際フィーラは出番とか見せ場が少ないよね」

フィ「それはあなたのせいでしょう？それより私のキャラ紹介不明な点多すぎない？」

蛍夜「いや、だって悪魔だぜ？わかんねえよ、なにしてたかなんてあ、一応言っとくけど、別に過去に凄いことがあったとかの伏線じ

やないから」

イル「あんたそれ本気？」

フィ「絶対本気よ。まあ、それは後付けでどうにでもできるからいいとして」

蛭夜「予定はないがな」

イル「後、嫁の事で勘違いしてる人いるわよね？」

フィ「そういえばそうだったわね。ティファニアに正妻の票が入ってたものね」

蛭夜「そうそう、ティファニアはハーレム入りする予定は今のところないです。ノイ、クレイン、フィーラ、エルザで選んで頂けると幸いです」

イル「まあ、どうしてもって言うなら参考にはしてあげる」

蛭夜「なんでそんな偉そうなんだよ！イルが言ったとおり、一応参考にはするので、どのキャラに入れても構いません。それこそフランクやイルに正妻の票を入れても構いません」

フィ「なんでもありね」

蛭夜「この作品はなるべく読者さまの意見を参考にするようにしているからな」

イル「いい作者ぶってんじゃないわよ、糞作者が」

蛍夜「お前もう後書きにも出さないから」

イル「すいませんでしたー！」

蛍夜「私のヒーロー（笑）」

イル「いつまで引っ張るのよー!!」

蛍夜「それではさようなら」

イル「無視すんなー!!」



## 第23魔（前書き）

今回は物語が大分動きます。

ヴァイスの真実もそうですが、もう一つイベントがあるので。

## 第23魔

今日も何事も無かったかのように授業が行われ、それに参加する。クレインはまだ帰って来ていない。

朝のご飯の時や、休み時間に、ノイは色々な生徒に囲まれていた。学院を救ったヒーローとして見られているのだらう、兄の僕としても鼻が高い。

ノイが実力を披露してしまった時点で、兄妹である僕たちも少なからず目立つ。

ならばいつそのこと実力を隠すのは止めようということ、今日は物を壊さない程度に、実力を発揮している。

『鋼鉄』、『獄炎』、『爆水』、『風妃』、この二つ名はトリステインでも有名だ。

しかし、それが誰なのかまでは知れ渡っていない。

今までは必要以上に注目を集めないように、黙っていたからだ。

しかし、その必要はなくなった。

すでに充分に目立っているのだ。今更これを明かしたからと言って大して変わることでもない。

ということ、わざわざ自分から教えはしないが、聞かれたら答えることにしている。

聞かれるのはもっぱらノイなのだが、ノイが『鋼鉄』だとわかれば、その兄妹である僕らが『獄炎』、『爆水』、『風妃』であることは予想がつくだろう。

現に僕は何度か『爆水』かと聞かれたし、フィーラも『獄炎』かと聞かれたらしい。

そんな感じで学院での知名度を上げている僕たちだが、それに嫉妬する者も出てくるだろう。

学院の英雄であるノイは基本的に皆に好かれているが、その周りに

いる僕やフィーラを気に入らないと思っっている生徒もいるようだ。まあ、そういう生徒は全員フィーラの手によって改心させられるので問題ない。

午前中の授業が終わり、昼食の時間となる。

そして食堂へ移動する時、窓からフランが見えた。

その上にはクレインが乗っている。

昼食はとりあえず後にして、外に出る。

すると、人間型のフランと、クレインが、こちらに歩いて来ていた。

「クレイン！良かった、怪我は大丈夫？」

「うん！もう治ったよー！」

「そっか。それじゃあ、大切な話があるんだ」

「え、それって、告白ー？」

「まあ告白と言えば告白だけど……。とりあえず部屋に行こう」  
「うん！」

クレインを先に部屋に向かわせて、フランに向き直る。

「ありがとう、フラン」

「貴様に礼を言われる筋合いはない。感謝しているのなら真実を話せ」

「そうだね……。僕たちもいこう」

フランを連れて、自分の部屋に戻る。

恐らくノイとフィーラも二人が帰ってきた事に気づいてる。

午後の授業はサボることになりそうかな。

部屋に着き、ドアを開けると、すでに三人は集まっていた。

「早いね」

「フランが見えたからよ」

「ほら、お兄ちゃん、もう役者は揃ったよ」

「？ねー？何か始まるのー？」

「早く話せ、スプラッタにするぞ」

いつか来ると思っていたんだよね、こんな時が。

前にもこんな風に思ったことがあったな、確か、ノイと家を逃げた時。

これで皆が僕を嫌いになっても、仕方ないか……。

「まず最初に、僕がこの世界の人間であることは確かだよ。ただし、前世の記憶を持っている」

「前世？自分が生まれる前って奴？」

「そう、僕の前世は、地球という星の日本という国で暮らす、男子高校生」

「じゃあ、サイトに近づいたのは、懐かしかったから？」

「サイトの出身を聞いたんだ。でも、それは違う」

そう、ここからが重要だ。

ノイは僕の記憶を良く見るし、それをフィーラやクレインに伝えて  
いるから、皆日本の言葉や文化は知っている。しかし、ゼロの使い  
魔だけはブロックがかけられている。

「ここからが重要だよ。日本には、色々な物語があることは知って  
るよね？」

「うん。漫画とかアニメでしょ？」

「そう、そしてこの世界のベースは、ゼロの使い魔という物語の世  
界なんだ」

「え？」

「僕は、この世界に自分の意思で輪廻転生した」

「じゃ、じゃあ、私たちは、ただのキャラクターってこと？」

「違う、この世界は、ゼロの使い魔という物語によく似た別の世界。だから皆自分の意思で動いてるし、皆自分の物語の道を歩んでいる」

「つまり、私たちは、お兄ちゃんの介入で違うものとなったゼロ使い魔の世界に生きてるってこと？」

「そうだよ。でも、誰かに動かされるとかそういうことじゃない。ゼロの使い魔って言う物語に、ノイたちは出てこないからね」

「じゃあ、私たちは自分の意思で生きてるってことでいいの？」

「うん、これ以上考えると哲学になるからね。僕たちは僕たちの意思で生きてると思えばいいよ。そして、本来ゼロ使い魔という物語の主人公は、ルイズとサイトなんだ」

「でも、すでに沢山のイレギュラーが発生してるんだよね？」

「そうだよ。聞くよりも見る方が早いね。ちよつと待ってて」

僕はノイたちに待ったを掛けて、頭の中で念じる。

ロリツ子（神）、聞こえてるんでしょ？

（聞こえてるわよ。あとロリツ子言つのやめなさい）

（もうブロック解いていいよ。本当の事話すから）

（そう？あなたには期待してるのよ、頑張りなさい）

それでロリツ子（神）の声は聞こえなくなった。

恐らくもうブロックは解かれているのだろう。

「ノイ、いいよ僕の頭の中を見てみな」

「う、うん」

ノイは少し戸惑いながら目を瞑る、そして数分間その状態のままですいて、急に目を開いた。

その目は驚きに満ちている。

「わかったかな？」

「うん……。私たち、本当は全然関係ないんだね……」

「そうだね。クレインも、生物の意思疎通が可能なら、僕の考えることもわかるでしょ？」

「うん……。もう、見たよ……」

クレインも驚いているようだ。

いつもの間延びした声じゃなくなっている。

「とりあえず、ノイはフィーラに、クレインはフランに内容を話して」

二人は要点をまとめて簡単に説明した。

フィーラとフランも驚いている。

「わかったかな？お母さんやティファニアは、すでに家で保護してる。だから原作も当然ぶち壊れてる。そして、僕はロマリアを潰す」  
「でもどうやって？それよりもガリアの方が危ないよ」

「ガリアはなんとかできるんだ。そして、ロマリアを潰す為の種もすでにまいてある。そのうちジョゼットも保護しに行くよ」

「？何で？何か大切なの？」

僕は実のところ原作十六巻までしか読んでいない。

しかし、ジョゼットが王族であることは知っている。

二次創作などで読んだことがある。

「ジョゼットがロマリアの仲間になると面倒なんだ」

「よくわかんないけど、それはまあいいや。それで、ロマリアを潰

す種って何？」

「そんなの、娯楽に決まってるじゃん。この世界は娯楽が少ない。だから僕はカードや本を売り出したんだ。まあ、いずれわかるよ。そして最後に、僕はこの世界の神と知り合いなんだ」

「それってブリミル？」

「違うよ、全然別の神。ここからがフランの知りたかった事。あの吸血鬼たちは、僕と同じように前世の記憶を持つ男が集めた吸血鬼で、世界を壊そうとしてたんだ」

「なぜだ。貴様はすでにその男とやらを倒したようだが、なぜ世界を壊そうとした」

「刺激が欲しいから、だってさ」

「なんだと？そんなことのためにお嬢様を傷つけたのか！」

「そうみたいだね。フラン、怒りが収まらないなら相手になるよ？」

「別に貴様に言っている訳ではない！私はその男が許せないのだ！」

「そっか……。さ、これで僕が隠してたことは全部話したよ。僕を嫌いになったかな？」

「そんなことない！」

「ありえないわ」

「ヴァイス兄のことは好きだよー」

こんなに沢山隠してたのに、本当言ひ家族を持ったな……。僕は、幸せ者だよ。

「別にお兄ちゃんが前世の記憶を持ってるからって、何かが変わるわけじゃないしね！」

「そうよ。それにヴァイス、あなた昔から計画を練ってたでしょ？この世界をハッピーエンドに導く」

「私はヴァイス兄がいればそれでいいよー」

「そっか、ありがとう、ノイ、クレイン、フィーラ」

何も変わらないんだ、家族じゃないか。  
ふと気がつくと、フランがこちらを見ている。

「どうかしたの？フラン？」

「水を差すようで悪いが、サイトはどうする気だ？」

「ああ、サイトは、この世界にしばらくいて貰うよ。帰そうと思えばたぶん帰せるけど、今居なくなれると困る」

「じゃあ、お兄ちゃんが日本の事を知ってるのはどうやって言い訳するの？」

「夢で大丈夫でしょ？サイトは流されやすいし」

「そうか、では私は帰るとしよう。お嬢様、何かあればいつでも私を呼んで下さい」

そう言つてフランは窓から飛び立っていった。

結構長く話していたようで、午後の授業がもうすぐ終わりそうだった。

「今日はもうこのままでいいか。あ、そうだ、他の人には言わないでね、僕の事」

「わかってるよ。お兄ちゃんと私たちだけの秘密だよ」

「お腹空いたー、ご飯ー」

クレインがいきなりそう言った。

そういえば僕たちもお昼を食べていない。

「まだ食堂は開かないし、じゃあここで作るっか？」

厨房で適当に余ったものを貰い、魔法を使ってささっと料理を作る。それを食べて、今の状況を考える。

ノイ、クレイン、フィーラ、フランには僕の正体を明かした。



それでも今まで通り変わらない。

だったら今まで通り原作ブレイクをしていけばいいかな。

次は、確かデルフリンガーを買いに行くイベントだったかな。

あ、そうだ、サイトに温水石をあげよう。

冷たい水で洗濯物を洗うのは大変だしね。

そういえばノイは今モテモテなんだっけ。

ノイもそろそろ彼氏ができるのかな？

そうだったら、やっぱり少し寂しいかな。

きつと皆、いつかは……あれ？

ノイはまだしも、クレインとフィーラはどうするつもりだろう？

「ねえ、クレイン、フィーラ。今好きな人とかいるの？」

「「ヴァイス（兄）」」

「いやいや、そうじゃなくて、男としてだよ。付き合いたいとか、結婚したいとか」

「「ヴァイス（兄）」」

「え？」

いやいや、待て待て。僕たちは兄妹だ。

あ、そうか、冗談か。

まったく、兄をからかうもんじゃないよ。

「冗談でしょ？まだいないとか？」

「冗談じゃないよー？私ヴァイス兄と結婚したいもん」

「私も冗談じゃないわよ？あなたほど面白い人はそうそういないものの」

「いやいやいやいや、待とうよ！僕たちは兄妹だし！それに、異種族だし……」

「ヴァイス兄、私たちは義理の兄妹だよー？それとも、私じゃダメー？」



## 第23魔（後書き）

蛍夜「恒例になりつつあるな」

フラ「私は初登場だ。それよりお嬢様はどこだ？」

ロリ「今日はいないわよ？」

フラ「そうか、ならば帰る」

蛍夜「ちょ、お前待てって！」

フラ「なんだ、貴様になど用はない。失せろ！クズが！」

ロリ「酷い、作者にそこまで言うんだ……」

蛍夜「フランは何故か勝手に動き出すんだよ、最近出番増えたし」

フラ「貴様などに操られるなどありえないからな」

ロリ「あ、クレインだ」

フラ「お嬢様、何なりとお申し付け下さい」

蛍夜「嘘だ。そして態度に違いがありすぎる！」

フラ「貴様、覚悟は出来ているのか？」

蛍夜「え？ちょ、今の俺じゃな、ゴベラッ！」

イル「作者が吹っ飛んでいなくなったから、私の登場よ！」

フラ「誰だ？貴様？」

イル「ノイの使い魔！番外ただけだけど」

フラ「ああ、クソ蛍夜が言っていた、たった一回しか登場していない脇役か」

ロリ「覚え方に棘があるわね」

イル「言ってなさい！私には人気投票でもう二票も入ってるのよ！」

ロリ「ああ、データが消えちゃった後ね。私にも一票入ってたわ」

フラ「なあ？お嬢様がいないから帰って良いか？」

イル「あんただんだけクレインを愛してるのよ！」

フラ「五月のハエが」

ロリ「イルにはわかんないと思うわよ」

イル「わかるわよ！うるさいって言いたいんでしょ！めんどくさいのよー！」

フラ「お嬢様がいないとやる気が出ないのだが？」

ロリ「蛍夜も吹っ飛んだし、これで締めちゃいましょう」

イル「ヴァイスがとうとうハーレムを作り始めたわ。果たしてヴァイスはどうするのか!？」

ロリ「タイトルのまったく問題になってないと思うけど、こころ期待!」

## 第24魔（前書き）

今回は区切るところが難しかったので少し短いです。

## 第24魔

ノイ、クレイン、フィーラが、ハーレムを作らないと死んでやるという、とんでもない事を言った日から数日が経った。

全員目がマジだったので、断るわけにもいかず、事実上ハーレムを作ったことになる。

どうしてこうなった……

当然そんなことを公言するわけにはいかない。

だから普段は今までの通りの生活を送っている。

一目につかない自室などでは、色々と強要されるが、それ以外では今まで通りだ。

そもそも、クレインは僕のことを兄として慕っているのだと思うし、フィーラはこの状況を楽しんでいるのだと思う。ノイからはおおよそ兄に向ける愛情を超えた物を感じるが、関係的にはきつと今までと変わらない。

そうそう、あの日の翌日、サイトが僕に色々と聞いてきた。

サイトは自分が異世界から来たことを説明し、何故日本の事を知っているのか、とか、帰り方を知らないか、とか、それはもう色々聞かれた。

僕はそれの全てを夢で見たで押し切った。

ここはファンタジーで魔法もあるし、そういうのがあっても不思議ではないだろう。

サイトはこの世界について詳しくないし、口八丁で乗り切った。

それはそれとして、サイトとは仲がいい。

夢とは言え日本のことを知っている相手と話せるのは嬉しい、サイトはそう思っているのだろう。

僕も久しぶりにそういう話が出来る相手ができて、結構楽しい。

今日の授業でもサイトはルイズを挑発するようなことを言って、蹴られていた。

進歩しないというか、学習しないというか。

色々と家事をやるのに便利な物をあげたのだが、役にたっているのだろうか？

そういえば明日は虚無の曜日だ。

原作で言うところとデルフを買いに行く日だった筈。

先に行つて少しデルフを見ようかな？

そんなことを考えながら一日を過ごし、午後の授業が終わつて自室に戻る。

ちなみに夕食は食堂で食べてない。理由は、うん、行けばわかる。部屋のドアを開けると、テーブルに皿が乗つていて、その上に料理が盛りつけられていた。

「……ノイ、張り切つたね……………」

「あ、お兄ちゃん！待っててね、もう少しで出来るから」

「クレイン、この寮の一室は、一部屋の筈なんだけど？」

そう、僕の部屋にいくつかのドアが着いていて、何故かいくつかの部屋が存在している。

おかしいな、この部屋は確かに広がったけど、あんなにドアはなかったんだけど……。

「ノイ姉が造つたー」

「造つた！？部屋を！？どうやって！？」

「部屋そのものを武器と見立てて創造した、って言つてたー」

「ノイは神か！？」

どうなつてゐるんだ！？



能力だけを見るとノイがどんどんチート化していくんだけど……。

「あら、お帰り、ヴァイス」

「ただい」

ただいまと言えなかった。フィーラの体からは湯気が出ていて、体にはタオルが巻き付けられている。

きつと今フィーラが出てきたドアの先は風呂だ。

「一応聞くけど、その先ってお風呂？」

「そうよ。部屋に帰って来たら、ノイが色々な部屋を創造していたわよ」

「本気でノイは神か!？」

何か最近、人間離れたことをしても、愛の力だよ!とか言って済ませている。

愛の力で君の能力はどれだけ強くなるのさ……。

「皆、ご飯出来たよー」

「ノイ、部屋を創造したのはわかったんだけどさ、スペースはどうしたの?隣は確か違う人の部屋だよな?」

「何言ってるの、お兄ちゃん?異空間に決まってるでしょ?」

「ノイは神か!？」

異空間って……。

それを武器に見立てて創造したってことでしょ?  
どんだけイメージ力上がったんの?

ああ、違う、きつと今のノイの力は、妄想力だ。

「うん、もういいよ。深いことは気にしないから」

「ほら、冷める前に食べちゃお」

ノイがそう言つて、クレインとフィーラを座らせる。  
僕も椅子に座つて箸をとる。

なぜに箸があるの？

ていうかノイがさつき入つてた部屋は何？キッチン？

「……いただきます」「……」

「……いただきます」

気にするのはよそう。

考えるだけ無駄なんだ。

そう、無駄なんだ。

皆で仲良く夕食を食べて、お風呂に入る。

うん、まんま日本のお風呂だった。

どうなっているのだろうか？

風呂から上がり、部屋に戻ると、クレインはすでに眠っていた。

フィーラは本を読み、ノイは携帯ゲーム機を……！！？

携帯ゲーム機！？

「え！？ノイ！？どういうこと！？」

「？ああ、これ？お兄ちゃんの頭の中のを造つたんだよ。ほら、鈍器として使えば武器でしょ？」

「ねえ、本気で神？」

「お兄ちゃんのもあるよ、えっと、もん たーはんー？だっけ。それが入ってるから。それと、充電は切れないよ」

携帯ゲーム機を鈍器に見立てて造つて、更に充電必要ないように創造したと……。

うん、もはやバグに近いね。

「ある程度進んだら通信しようね」

「ノイもやってるんだ」

「うん、以外と面白いね。あ、あとフィーラの使い魔に似てるのが居ただけど？」

「間違いないよ。ていうかフィーラはやらないんだ？」

「私にはそういううちましましたの合わないのよ。ごめんなさいね」

「それもそうだね、フィーラがやったら壊れそうだし」

ということ、モン　ンを始める。

ちなみに、P　Pの3rdだった。

そのまま完徹でモンハンをやり続け、気がつくと朝だった。

うん、ゲームはなるべく控えよう。

どうやらノイも一睡もしていないようで、目の下にクマができていた。

「ノイ……ゆっくり寝てな……」

「そうする……お兄ちゃんは？」

「ちよつと用事があるから……」

そう言っ僕はフラフラ部屋を出た。

学院を出て、魔法を使い空を飛ぶ。

二時間程度で城下町に着き、目的の武器屋を探す。

狭く汚い道を進んでいくと、武器屋の看板を見つけた。

中に入ると、店主がまっとうな商売してますとか言ってきたが、別にそういうつもりできたわけじゃない。

ちよつと剣を見に、と言っ店物の物を物色する。

そしてデルフを発見し、手に取る。

すると剣が喋り出した。

「おでれーた。てめ、担い手の相棒じゃねえか」

「インテリジェンスソード、悪くないね」

「俺のことがわかんのかい？ ちょうどいい、俺を買いな」

「申し訳ありません、貴族様、こいつは口が悪くて」

店主は頭をぺこぺこ下げる。

別に気にしてないんだけどね。

「できれば買いたいんだけどね、君を使うのは僕じゃない」

「あ？ どういうこった？」

「まあ少し大人しくしててよ。たぶんもうすぐ来るから」

僕がそう言つと、店の中に二人の客が入ってきた。

ルイズとサイトだ。

店主はまた何か言っていたが、ルイズは剣を買いに来たと言った。

「や！ ルイズにサイト」

「ヴァイス！？ なんでこんなところにいるのよ？」

「ヴァイスじゃんか！ どうしたんだ？」

「野暮用でね、それより剣を買いに来たならこれにしな」

そう言つて僕はサイトにデルフを渡す。

サイトは不思議そうにその剣を眺める。

「おいおい、てめ、使い手か！ おでれーた、おい、俺を買いな」

「剣が喋った！？ 面白いな、ルイズ、俺こいつが欲しい」

「ええー、もつといい剣にしなさいよ」

「いいじゃんか、これいくら？」

「百で結構でさ」

「んじゃ、推薦人である僕が払うよ」

新金貨を百枚置いて、店を出る。

とりあえず、これでイベントは完了。

あの見かけ倒しの剣が出てきてないから、決闘フラグたないかな？  
キュルケならなにかやるだろうけど、フーケのイベントもないし、  
ワルドのイベントまでは平和かな？

そいじゃさっさと帰りますか。

僕は魔法を使って空を飛ぶ。

来る時は頭が覚醒してなかったから二時間掛かったが、今回は一時間で学院に着いた。

部屋に帰ると、クレインとフィーラは出かけていて、ノイは寝ていた。

僕もベッドの中に潜り込み眠ることにした。

夜に目が覚めると、クレインとフィーラが僕を見ていた。

どうやらノイはまだ寝ているようだ。

「ん、おはよう」

のびをして二人に挨拶をする。

するとクレインが僕に抱きついて来た。

「ヴァイス兄、おはようじゃないよー」

「そうよ」

フィーラはニヤニヤしながらこっちを見ている。

こんな時間に目が覚めちゃったらまた眠れないよ……。

仕方無い、散歩にでもいこうかな。

「ちょっと散歩してくるよ」

「いつてらっしやゝい」

「なるべく早く帰ってくるのよ」

「子供じゃないんだから大丈夫だよ」

部屋を出て、外に行き、適当にブラブラ歩く。

すると、本当の方で爆発音が聞こえた。

なにかと思って見に行くと、サイトが吊されていた。

「おーい！なにやってんのー！」

大声でルイズとキュルケに話しかける。

すると、二人はこちらを振り向いた。

二人に近づいて話を聞く。

やっぱり剣についてのことみたいだった。

「あー、そのこと？キュルケ、あの剣飾りだから使えないよ」

「そうなの！？」

「うん、だから僕はインテリジェンスソードを渡したんだけどね」

「あなた気づいてたの？」

「そりゃね、ルイズ、サイトを降ろすよ？」

「……わかったわ」

サイトを縛る縄を風の魔法で切り、レビテーションをかけてゆつくりと地面におろす。

サイトは心底ほっとしたような顔をしていた。

「ありがとな、ヴァイス。死ぬかと思ったぜ」

「ほら、さっさと寮に戻るよ」

タバサ以外の皆を寮に帰して、二人になる。  
実はまだあの後のことを聞いて無いのだ。

「タバサ、あの後大丈夫だった？」

「問題ない。そちらは？」

「片付けたよ。巻き込んだじゃってごめんね」

「構わない。私では倒せなかった」

それで会話は終わり、お互い男子寮、女子寮に戻る。

自室に戻ると、ノイは既に起きていて、クレインが料理を作っていた。

実は僕を含めたアンダルージャ家の面々は、料理が得意だ。

漫画のようなとんでもないものが出来るなんてことはなく、おいしいものをちゃんと作れる。

クレインの料理を皆で食べて、昨日と同じように風呂に入る。

流石に今日はゲームをしないですぐにベッドに入った。

ちなみにベッドの数は二つ。

一つで三人くらい寝れるので、一つを二人で使えば結構広い。

僕はすでにクレインが眠っているベッドに潜った。

しかし眠気がいっこうに訪れないので、スリープクラウドを自分にかけて無理矢理眠った。

朝起きた時、クレインを抱き枕のように抱きしめていて、ノイに軽く怒られたのは別の話だ。

## 第24魔（後書き）

ヴァ「ノイは神か!？」

蛍夜「いや、なんか思いつきでこうなった」

ノイ「大丈夫だよ、お兄ちゃん。夜の運動用の部屋もあるから」

ヴァ「できればそれは言わないで欲しかった!」

蛍夜「そんなことより、人気投票の解答で目を疑ったのと笑っちゃったものあった」

ヴァ「そうなの? どういうやつ」

蛍夜「目を疑ったのは、タイトルの略称を募集してるのに全く略されていない解答。ちなみにヴァイスの欲望日々だって」

ヴァ「それはもうタイトル変わってるよね!？」

ノイ「どっちかって言うと、ヴァイスの性欲日々がいいかな」

ヴァ「いやダメだから!」

蛍夜「で、笑っちゃったのは、正妻のやつに、エルフの里から大量に連れてくるってやつ」

ヴァ「絶対同一人物だよね!?! しかも正妻なのに複数形だし!」



ノイ「お兄ちゃん？」

蛍夜「殺気を飛ばすな。それにこれは無理だ」

ヴァ「そうだよ、流石に無理だよ」

蛍夜「俺はこういうの好きだがな！ぶっとんでる！」

ノイ「あんたがぶっとんでるわよ」

蛍夜「誰かはわからんが親近感を覚える。現実なら仲良く出来そう  
なやつだ」

ヴァ「うん、なんかわかる」

ノイ「それより！番外の私の使い魔が結構人気だよ」

蛍夜「そうだな。人気一番高いし。何でだろ？」

ヴァ「だよ……。言い方良くないけど、たった一話しか登場して  
ないのにね」

ノイ「それで？出すの？」

蛍夜「悩み中。出すにしても、転生させるのか異世界から連れてくるのか、とかもあるし」

ヴァ「ロリッ子にも票は入ってるよね」

蛍夜「あいつは登場させやすいからいいんだけどな」

ノイ「んじゃ、今日はじいまでー」

ヴァ「それではさようなら」

## 第25魔

破壊の杖イベントがないからしばらくは安全だと思っていた。  
しかし目の前には、二人の敵。  
どうしてこうなった……。

数時間前、僕は自室でロリッ子と話をしていた。

（ねえ、ノイが造った部屋がいつまでも消えないんだけど、何か知ってる？）

（ああ、それ？。私があの子能力を上書きしたのよ。一度造った物は自動では消えないって）

（……いつもいつも余計なことを……）

（何か言った？）

（別に。それより、ロリッ子（馬）が干渉出来るのは僕だけじゃなかったの？）

（ああ、それはちょっと違うのよ。前までは私の存在を知っているのはあなたただだったでしょ？）

（そうだね。アキラは倒したからね）

（そう。でもあの子はあなたの頭の中を見たから知ってるの）

（は？つまりロリッ子（余）のことを知っている人間には干渉できるの？）

（そうよ。ちなみに、本来ならあなたにも能力が上書きされるけど、あなたは創造する力を持っていないから何の意味も無いわね）

（はあ……本当に……。わかった、もういいよ）

（それと、私近々そっちに……。いやなんでもないわ）

（うん？まあいいや）

こんな会話をして、ちょっと気分転換に町に行こうと思い、町に来

た。

すると、変な男と女に絡まれた。

人通りが少ない道だ。

今は何か口論してる。

「いいじゃないか！ちまちま調べるよりこっちの方が早い！」

「もう！それじゃあ意味ないでしょ！全く、これだからドウドウー兄さまとは組みたくないのよ！」

「許してくれよ、ジャネット。帰ったら望むだけお菓子を買ってやるから」

「まあ！本当！」

ドウドウーにジャネット！？

何で元素の兄弟がここに！？

いや、それより、勝つのは簡単だろうけど、逃げると面倒くさそう……。

仕方無い、誰に依頼されたのかしらないけど、やるしかないか。

「それで、どちらが相手になるのかな？元素の兄妹さん？」

それを聞いてジャネットは息を呑むが、ドウドウーは薄く笑った。  
相手はドウドウーだ。間違いない。

「知ってるなら話は早いじゃないか。僕たちは君を調べにきたんだけどね、戦うのが一番でつとりばやいだろう？」

「調べる？依頼人は言えるのかな？」

「言えるわけないでしょ」

「お嬢さんは戦わないの？」

「ドウドウー兄さま一人で十分だわ。例えば相手が、死屍の兄妹だとしても」

「それ知ってるのか。その呼び方やめてくんないかな？嫌いだよね」

ああ、もう！恥ずかしいな！

今度ロリッ子に文句言ってやる！

「それじゃあ、行くよ！」

「そうだね」

ドウドゥーは鞭のようにしなる杖を引き抜き、それを振り下ろした。すると鞭に魔力が集まり、青白い光を放つ。

ブレイド。あれは巨大なブレイドだ。

僕は上からたたき付けるように迫るブレイドを横に転がって回避した。

「はは！今のを避けるのか！君はいいね！」

余裕そうに笑ってるけど、そろそろこっちも反撃するよ？

あんまり戦いは好きじゃないから、すぐに終わらせて上げるよ。

リミットオーバー

「限界突破！」

「やるね！」

限界突破状態で一気にドウドゥーに近づく。

ドウドゥーはその速度を見極め、反撃しようと杖を構えている。

しかし、この速度を見切り、それに対処しようとした時点で、僕には勝てない。

グランドブースト

「加速！」

「な！？」

一瞬にして相手の懐に潜り込む。  
グランドフースト

加速は持続的な速度補助魔法だ。

ウインドフォース  
瞬発的な風の力よりも、速度は劣るが、常に加速していることが可能。

あまりの速さに対応が間に合わないドウドウーに、拳を思い切り叩きつける。

呪文詠唱など間に合うわけもなく、ドウドウーは吹っ飛んでいき、建物壁を貫通していった。

「ざっとこんなものでしょ。所詮、間接を強化してるだけだしね」

「あらら、ドウドウー兄さまが負けるなんて以外だわ!」

「随分余裕だね?勝てる自信でもあるの?」

「まさか!私には戦闘の意思がないわ。そんな相手に攻撃するのかしら?」

「……僕のこと調べたみたいだね。わかったよ、ドウドウーはちゃんと連れて帰ってよ」

「当然連れて帰るわ」

ドウドウーを回収して帰って行くジャネットを見送る。

全く、勘弁して欲しいよ。

しかし、ガリアに狙われるようなことしたかな?

もしかしたらこの前のもかもしれないけど、問題を起こした覚えはないし……。

はあ……、まあいっか。

本当、いい気分転換になったよ……。

寮の自室に帰ると、ノイとクレインが居た。

どうやら今日はフィーラが料理を作ってるようだ。

そろそろ僕の番だったかな?

今日もご飯を食べて、お風呂に入って寝る。  
最近この生活に違和感を感じなくなってきた。  
慣れって恐いね。

翌日、朝食を済ませ、授業に出る。

現在は風の講義だ。

ギトー先生がキュルケを挑発して、一悶着あった。

原作ではすぐに終わるが、この世界ではそうはいかない。

ギトー先生が火球を風でなぎ払うと、黒板に穴が開いた。

「先生お言葉ですが、最強は水です」

黒板に穴を開けたのは僕だ。

この手の話は大好きで、討論するのは結構楽しい。

ちなみに、穴を開けたのは水弾ウォーターライフルという魔法だ。

ウォーターカッターウォーターカッター水の刃のように、高圧水流を発射する。

ただし、発射するのは一瞬。ゆえに、『刃』ではなく『弾』。

「ミスタ・アンダルージャ、ならばもう一度私に魔法ぶつけてみる」

「次は当てますよ？」

教室に悪い空気が漂い始める。

しかし、その空気はいきなり入ってきたコルベール先生に吹き飛ばされた。

カツラがずれて生徒が大爆笑したりと色々あったが、要点をまとめると、姫様が来たらしい。

授業は中止となり、生徒は全員正装して正門に並ぶ。

さて、ここで気を付けなくてはならないのが、クレインだ。

あのクソロリコン野郎も来ている筈なので、奴にだけは見せたくない

い。

奴が二次創作ではよくある変態化してるかはわからないが、もし変態化してたら厄介だ。

準備が終わり、生徒が全員正門に並ぶと、姫様が乗った馬車がやって来た。

姫様とマザリー二枢機卿が馬車から降りると、歓声が上がった。

正直な話僕は姫様に興味はない。

あの姫様は面倒だから、ウェールズ皇太子を助けてくっついて貰おうと思っている。

周りを見ると、サイトが何故かガツクリとうなだれている。

どうやら、ルイズとキュルケがワルドに見とれていたのがショックだったようだ。

ちなみにワルドは今のところ普通だ。

僕はサイトのそばに近づき声を掛けた。

「サイト、落ち込むなよ」

「ヴァイス……、そうか。お前も同じなんだな……」

何かサイトが仲間を見つけた、的な目でこっちを見てくる。

何が同じなんだろう？ そう思っていると、ノイがこっちに来た。

「お兄ちゃん、何やってるの？ それにサイトも」

「ノイはあいつのこと格好いいと思わないのか？」

「あいつって、あの髭のおじさん？ お兄ちゃんの方が全然格好いいじゃん」

「……ヴァイス……裏切り者ー！」

ええー……。



一体何に体しての裏切りだったのだろうか？  
ノイと顔を見合わせて首をかしげる。

夜になり、僕は料理を作っている。  
初めてキッチンに入ったが、凄かった。  
ふつうに冷蔵庫とかレンジとかあったし。  
しかも何故か地球の食べ物あったし。

僕はそこから鳥の肉を取り出し、唐揚げを作ることにした。  
パパッと作り、食卓に持って行く。

今頃姫様はルイズのところに行ってるのだろうか？  
ルイズの部屋、というか、女子寮で起こるイベントには、ほとんど  
関われない。

なんでギーシュが女子寮に居たのかは不明だけどね。

食事を終え、部屋でくつろいでいると、ドアがノックされた。  
客なんてそうそうこないけど、誰だろう？

僕は少し疑問に思いドアを開けた。  
するとそこには、ワルドがいた。

「あなたは、確か姫殿下のそばにいた……」

「ワルドだ。君に話がある。少し来てくれないか？」

「はあ……、いいですけど……」

僕は部屋のドアを閉めてワルドと外に出る。

あの位置からだ、クレインが見えた筈だけど、反応がないところ  
を見ると、正常なのかな？

それから少し歩き、ヴェストリの広場の端っこで止まった。

僕が風呂を作ったけど、ノイが部屋を創造したために全く使われな  
くなった風呂釜が置いてある場所だ。

「君は、ヴァイス・ド・アンダルージャ君でいいのかな」

「はい、まあ」

「それでは、これを書いているのは君かな？」

「！？」

ワルドが取り出したのは僕が書いているライトノベルのような本。  
しかもロリ系が中心の本だ。

更に、これを書いたのが僕だという情報を知っている。

まさか、やっぱり変態だったのか？

「まあ、基本的には秘密ですが、確かにそれを書いたのは僕です」

「そうか。いやなに、少し読んでみたら思いの外面白くてね。大丈夫だ、他言はしない。だから、サインを貰えないか？」

「サイン、ですか？考えて無いので、適当でいいですか？」

「ああ、君に書いて貰った事が大事なんだ」

ただ単に本のファンなのだろうか？

それほど奇怪な行動をしているわけでもないし……。

適当にサインもどきの文字を書き、ワルドに渡す。

「ああ、ありがとう。大切にするよ」

「そうですか、それで僕はもう帰ります」

「ちよつと待ってくれ！最後に聞きたいんだが、あの金髪の少女は君のなんなんだい？」

「クレインのことですか？妹で使い魔で彼女ですが、何か？」

「そ、そうか……いや、なんでもない。悪かったね、呼び出してしまった」

「いえいえ、それでは」

あんまり彼女とか言いたくないけど、あの場合仕方無いだろう。

あいつ、微妙に壊れてるけどたぶんレコンキスタには入ってる。  
中途半端な壊れ方は面倒くさいなあ……。

僕は自室に戻り、考える。

明日の朝、ルイズたちについて行くのは当然だ。  
しかし、クレインは置いていくべきだろうか？

普通にクレインの方が風メイジとしても強いが、あの変態には近づ  
けたくない。

うーん、悩みどころだ……。

「ヴァイス兄、どうしたのー？」

「ああ、クレイン。明日朝早くから出かけるんだけどさ、クレイン  
を連れて行こうか悩んでて。」

「私も行きたいよー、ダメ？」

「うん、わかった」

本人の意思は尊重しないとね！

決して涙目＋上目遣いのコンボにやられたわけじゃないよ！

本当だよ！

## 第25魔（後書き）

蛍夜「ロリッ子登場の伏線は一応立てといた」

ロリ「そうね、これで私はいつ出てきてもおかしくないわね」

エル「ねえ、私の出番はいつかな？」

蛍夜「エルザの出番はもうちょい後」

ロリ「ここに原作キャラが来たの初めてね」

エル「まあ、私は原作じゃすぐ死んじやうから！」

蛍夜「それはおいといて、人気投票の回答が無視出来ないレベルになってるな」

ロリ「そうだね。エルフの里の奴五票入ってたしね」

エル「でもそれって採用できるの？」

蛍夜「前回も言ったが、無理だ。これは何票入っても無理だ。という事で、入れてもいいですけど無効票みたいなもんですよ？」

ロリ「まあ、それは仕方無いわね」

エル「入れてる側もおふざけだと思うよ？」

蛍夜「そうだな。そしてイルの人气が凄いんだが？」

ロリ「六票だっけ？ 凄いわね」

エル「もう出す方向で決めて上げれば？」

蛍夜「んー、別にいんだけどな」

ロリ「そして、正妻の票は私に入れてね」

蛍夜「何宣伝してんだ！」

エル「ていうかロリッ子はヴァイスが好きなの？」

ロリ「うっ……そ、それは……その……」

蛍夜「どうでもいい。それではさようなら」

ロリ「久しぶりに扱いが酷い！？」

エル「私は正妻にはなれないのかな？」

## 第26魔（前書き）

更新かなり遅れてすいません！

リアルが立て込んでまして……

## 第26魔

「何で私はついて行けないの!？」

まだ辺りは薄暗い早朝、ノイは僕に大声で抗議する。  
その目は不満で一杯だ。

「だから、ノイはこの学園のアイドルみたいなものでしょ？そんなノイが学校サボって居なくなったら、ちよつとした騒ぎになるじゃん」

「ぐぬぬ……。そもそも！何でルイズとサイトを追いかける必要があるの!？」

「密命を受けてるんだって」

そう、僕はサイトたちを尾行して、途中で合流しようと思っているのだが、今ノイが学校をサボるのは色々とまずい。

折角上がった評判を下げるのもよくないし、何より騒ぎが起きるのは避けたい。

それを一時間程前から説得しているのだが、全く納得してくれない。元々ノイには黙って行くつもりだったが、部屋を出ようとしたところでばれた。

「それは知ってるよ！お姫様の密命でしょ！そうじゃなくて、どうしてお兄ちゃんがついて行くのって聞いているの!」

「面白そうだから……ってわけじゃないよ。平和な世界を作る為にね」

僕の目的はウェールズを救うこと。

あの人が生きていれば、色々と変わってくる。

「私も行きたい！」

しかし、何を言ってもノイは納得してくれない。  
ルイズとサイトは少し前に学院を出てしまった。

外では、フランとリオに乗って、クレインとフィーラが待っている。

「だから……」

仕方無い、こうなったらフィーラ直伝の魔法の言葉を使おう。  
あんまり使いたくないけど……。

「……ノイ、愛してる」

「ふえっ!？」

僕のいきなりの告白に、ノイは軽いパニック状態に陥る。  
僕は、更にたたみかける。

「ノイ、可愛いよ。一生一緒にいよう」

「お、お兄ちゃん? そ、それって、プ、プププ、プロポーズ?」

ノイの混乱に拍車が掛かる。

そこへ僕は、とどめを刺す。

「スリープクラウド」

「え? …… z z z」

ノイは安らかに眠りについた。

普通の状態では、ノイにスリープクラウドは効かない。  
精神力で耐えられるからだ。



しかし、今の様に混乱している状況なら、耐える暇もなく眠らせることができる。

ただし、目を覚ましてから怒られるだろうから、あんまり使いたくはなかった。

「まあ、とりあえずこれで出発は出来るかな」

僕は部屋のベッドにノイを寝かせ、急いで外に出る。

正門近くで待機していたリオに乗り、大空に飛び立つ。  
すでにフランはいなかった。

リオが飛び立つと、先客であるフィーラが話し掛けてきた。

「遅かったわね」

「中々納得してくれなくて。それよりクレインとフランは？」

「先に行ったわよ。見失うとまずいしね」

クレインは先に行ったのか……。

……先に行った？

「まずい！」

「いきなりどうしたの？ヴァイス」

急に声を上げた僕に、フィーラが驚きながら尋ねる。

しかし、今はそんなことは気にしてられない。

「フィーラ！クレインがまずい！」

「どうして？クレインならまず負けないでしょう」

「そうじゃないんだ。とにかく急いで！」

フィーラは納得出来ないような顔をしたが、言う通りに速度を上げ

てくれた。

そう、負けるとか負けなとかじゃない。

問題は、あのクソ変態ロリコン男、ワルドだ。

先に合流したら、何かされるかもしれない。

「クソッ！迂闊だった！」

「何そんなに焦ってるのよ。それにほら、追いついたわよ」

フィーラに言われ、下を見ると、ルイズとその一行が、盗賊を捕まえていた。

そこには、クレインとフラン（竜の姿）もいた。

どうやらフィーラは結構な速さで跳んだようだ。

ルイズやサイトは、僕たちに気づいたようで、上を見ている。

僕とフィーラは、リオから飛び降りて、地面に降りる。

その際、クレインに話し掛けていたワルドに蹴りを入れた。

「ワルド子爵、僕の妹に手を出したら殺しますよ（ニコ）」

「い、いや、誤解だ。僕には婚約者も居るから」

そう言ってワルドはルイズを見る。

すると、ルイズは少し戸惑って顔を俯かせた。

「まあ、いいですけど」

話を早々に切り上げて、ワルドから離れる。

僕はあんまり人を毛嫌いしたりしないのだが、なぜかワルドは少し嫌いだった。

クレインに近づく上に、敵だからだろう。

「クレイン、大丈夫だった？」

「何がー？」

「何も無いならいいんだけどね」

タバサの近くにいたクレインに、一応確認しておく。

ちなみに、キュルケは相変わらずサイトに色目を使っている。

ギーシュは盗賊の尋問だ。

そんな風に周りを観察していると、ルイズが近づいてきた。

「ヴァイス、あなたも私たちを見かけたから付いてきたの？」

「違うよ。姫様の密命を手伝おうと思ってね」

その言葉を聞いて、ルイズは物凄く驚いた顔になった。

きつと、どうしてそれを……、的なことを考えているのだろう。

「ま、僕は味方だから気にしないで」

「……そうね。私としてもあなたたちがいるのは心強いわ」

信頼されちゃってるようだ。

なんだか気分がいいね！

「ところで、サイトの元気が無いみたいだけど？」

「知らないわよ。あんな犬のこと」

ルイズはそう言ってワルドの方に行った。

そして、サイトに見せつけるように、ワルドと仲良くし始めた。

わかりやすいなあ、ルイズは。

「サイト、心配するなよ。僕はサイトの味方だ」

「ヴァイス……。でも俺、ルイズを盗賊の矢から守れなかったんだ

……。しかも、あいつに助けられた……」

あいつ、つてのはワルドだね。

でも、その辺はまだ仕方無いと思うけどな。

フーケのイベントもないから、実戦経験が足りないんだよね。

「サイトはただの平民。ワルドは貴族。当然だよ。でも、それは今の話だ。サイトが努力して、もっと強くなればいいんじゃない？ いじけてる時間があつたら、自分を磨きなよ。わかった？」

「ヴァイス……。何寝ぼけてたんだろ、俺。ありがとう、もっと強くなるよ、ルイズを守るくらい」

昔の僕を見てるみたいだ……。

守りたい者の為に強くなる……。

……昔じゃ無くて、僕を見ているみたいだ。

「そうそう、なんなら特訓して上げてても良いよ？」

「本当か！？……あれ？俺よくよく考えれば、ヴァイスがどのくらい強いのか知らないな」

サイトの前で戦ったことはなかったっけ？

まあ、今回のイベントでわかると思うけど。

「そういえばそうだね。まあ、ノイと同じくらいじゃないかな？最近

は模擬戦やってないからわかんないけど」

「そんなに強いのか！？」

「ん？ノイの強さは知ってるの？つて、そっか吸血鬼か」

「ああ、あん時のノイは凄かったなあ……」

創造武器でロボット作ったらいいしね。

僕も見たかったなあ、ロボット軍団。

「お？尋問が終わったみたいだな」

サイトがそう言つて、ギーシュを見た。

ギーシュは、ワルドに尋問の結果を報告したみたいだ。

「そうだね。それじゃあ出発かな」

僕の予想通り、すぐに出発となった。

それからしばらく進んで、その日は女神の杵亭に泊まることになった。

「暇だね」

「暇ー」

「暇ねえ」

僕、クレイン、フィーラの順に暇と呟く。

僕たちは三人一部屋で、他は原作通りだ。

そういえば、と思い出し、窓を開けて外を見ると、サイトが窓にへばりついてルイズの部屋を覗いていた。

「おい！サイトー！」

「！？」

サイトは大声で呼ばれたことに驚き、唇の前に人差し指を当てて、シー、と必死にやっている。

しかし、その頑張りは報われず、ルイズに見つかって叩き落とされた。

僕はそれを見届けて窓を閉めた。

「……寝よう」

こうして、この日は終わりを告げた。

翌日、僕は朝っぱらから、中庭にある練兵場にいる。

理由は当然、サイトとワルドの手合わせを見ることだ。

しかし、ちょっと早く来てしまったようで、まだ誰も居なかった。そのまま三十分ほど待つと、二人の人影がやって来た。

「奇遇だね、サイト。それに子爵も」

「何でここにいるんだ？」

サイトが不思議そうに聞いてくる。

ワルドも少し疑問に思ったみたいだ。

まあ、こんな早くに一人で練兵場にいるのは少し変かな。

「散歩してたんだ。それより二人は手合わせでもするの？」

「そうだよ。よくわかったね」

「戦いの気配には敏感なんですよ」

そう言うてにつこりと微笑む。

少しの殺気を飛ばしながら。

「それは頼もしいね」

そう言うてワルドもにつこりと微笑んだ。

殺気は全て受け流している。

「ま、いいですけど。それより介添え人が来たみたいですよ」

僕がそう言つと、物陰からルイズが出てきた。  
手合わせについて、色々と言句を言ったが、二人は気にしない。  
そして、サイトは剣を引き抜き、ワルドは杖を抜いた。

「頑張れー」

二人から離れて、とりあえず応援をしておく。  
名前は言つて無いが、二人ともどちらが応援されているかくらいわかつてるだろう。

そして二人は剣と杖を交える。

ワルドが杖で突き、サイトはそれを剣で払う。

サイトは体勢を低くし、回転して剣を振り回す。

ワルドはそれを、息一つ乱さずに、いなしていく。

結局、サイトは負けた。

風の魔法で吹き飛ばされ、デルフを離してしまい、勝負が決まったのだ。

そしてワルドは、サイトがルイズを守れないと言つた。  
ルイズはそれに言い返そうとしたが、僕はそれを遮る。

「じゃあ、子爵は守れるんですか？」

「当然だよ。僕はルイズの婚約者だからね」

「じゃあ試しましょう」

そう言つて僕は、サイトを少し離れたところまで運んだ。  
サイトを置いて、二言話し掛ける。

「忘れないでよ、僕の言葉」

「わかつてる。今は無理でも、だろ」

大丈夫だ。

サイトの心は折れてない。

次は僕が、人の心をへし折る番だ。

「それでは始めましょうか？」

「いいのかい？相手がメイジとなると、大きな怪我を負わせかねない」

「心配無用です。僕もですから」

杖を抜き、ワルドをじっと見据える。

そして、走る。

「グッ！」

ブレイドを使い、ワルドに斬りかかった。

ワルドはそれを、同じようにブレイドで防ぐ。

僕は左手でポケットからナイフを取り出し、ワルドに向かって突く。ワルドは僕の杖を弾き、後方に回避してナイフを避けた。

「子爵、久しぶりに三十%でやってるんです。楽しませて下さい」

「何を言ってるんだ？君は」

僕は呪文を詠唱して、水の鞭を作り出す。

それを、物凄い勢いでワルドに叩きつける。

しかしワルドは、それを風の刃で切り裂いた。

「爆発は避けるべきだね……。よし！」

使う呪文を決め、素早く詠唱する。



本来詠唱は必要無いのだが、人前で詠唱無し魔法を使うと、怪しまれる。

「ライティングスネーク！」

風系統のライティングを放ち、鉄を使って軌道を変え、相手に誘導させる。

ライティングは命中率が低いが、避雷針代わりの鉄を使うことにより、相手にぶつけられるのだ。

「ぐあああああああ！！」

放ったライティングの軌道をワルドの正面に誘導していたが、ワルドがそれに対処しようとしていたので、軌道を背中に変えた。すると、それに反応仕切れなかったワルドの背中が、こんがり焼かれた。

「勝負ありですね、子爵。あなたはルイズを守れるんですか？」

「くっ……。しかし、君ほどの使い手はそうはいない……」

「戦場では敵を選べない」

原作でワルドが言った言葉だ。

これは正しいと思う。

たしかに僕レベルの使い手なんてそうそういないが、ワルドよりも強いくらいならゴロゴロいるだろう。

「ま、僕は関係ないんで、ルイズの取り合いは二人でやって下さいよ」

「……………」

僕は適当な捨て台詞を吐いて、練兵場を後にした。

後ろは振り返らなかったで、ワルドがどんな表情をしていたのかはわからない。

治療は店の人に頼んだ。

大怪我をしても構わないと言ったんだ、覚悟はしていただろう。

もしくは、絶対に負けないと過信していたか。

どちらにせよ、僕には関係ない。

## 第26魔（後書き）

ノイ「私もついて行きたかったー！」

ヴァ「仕方無いよ」

蚩夜「そうそう。そしてお前の使い魔超空気」

ノイ「ルーのこと？」

ヴァ「そう言えば全然出てこないね」

ノイ「ルーは毎日のように秘薬を探しに行ってるから」

蚩夜「そしてある日死んでしまい、もう一度使い魔を召喚すると、イルがやってくるわけだ」

ヴァ「な！？」

ノイ「なんだってー！？」

蚩夜「今ふと思ったんだがな、かなりよくね？」

ヴァ「いやいや！それじゃあルーが死んじゃうじゃん！」

蚩夜「そこはほら、寿命とかさ……」

ノイ「そんなによぼよぼだったのー！？」

蛍夜「ロリッ子はもう出すの確定なんだけどさ、イルって反対意見もそれなりに多いんだよ」

ヴァ「そうなの？」

蛍夜「ああ、人気投票はダントツで一位だけどな。だから今凄い悩んでる」

ノイ「私の使い魔が変わるかもしれないのね。ごくり……」

蛍夜「イルはヴァイスに惚れてるけどな」

ヴァ「バ、バカ！そんなこと言ったら！」

ノイ「ほお、詳しく聞かせて貰おうか？」

蛍夜「ひい！ノイの顔が世紀末覇者みたいになってる！」

ヴァ「蛍夜はもう死んでいる」

蛍夜「嫌だー！！」

## 第27魔

夜になり、僕らが宿の一階で飲んでいると、突然弓で攻撃された。二階で何か話していたサイトとルイズは、すぐに一階に降りてきた。ちなみに、ワルドの傷はすでに癒えている。

「サイト、ルイズ、誰かに襲われなかった？」

「土系統のメイジに襲われたわ」

「でっかいゴーレムだったぞ」

原作ではお母さんが二人を襲っていたが、どうやら他のメイジで代用したようだ

つまり、敵は傭兵と土メイジ。

……ここは原作通りに行こう。

「ルイズとサイトと子爵は先に行つて。僕らは囷になる」

「わかった」

サイトとルイズは少し混乱したようだが、ワルドが二人を連れて行った。

クレインとタバサが風で三人に向かう矢を弾く。

そして、サイトたちは見えなくなつた。

「さてと、傭兵は僕一人で十分だとして、ゴーレムをどうするかだね」

「ええ！？君一人で大丈夫なのかい！？」

「ギーシュ、あんたは黙つてなさい」

僕の言葉に大げさに驚いたギーシュを、キュルケが黙らせる。

そしてキュルケは僕をまっすぐ見つめた。

「……わかった。フィーラとクレインは僕と一緒に傭兵を叩くよ」

「わかったー」

「いいわよ」

「土メイジはキュルケたちに任せるよ」

「ええ、任せなさい」

キュルケの言葉を聞いて、僕とクレインとフィーラは一斉にテーブルの陰から飛び出す。

そこへ、沢山の矢が飛んできたが、僕たちに当たる前に全てが弾かれた。

「必要無かったかもしれんがな」

そして、透き通った声が響く。

これはフリーゼの声だ。

どうやら風を操って矢を弾いたみたいだ。

「ありがとう。余計なことに気を回さなくて済んだよ」

「お主の為ではない」

「はいはい、クレインの為でしょ」

そんな無駄話をしながら、傭兵を一人一人殴り倒して行く。

すでに逃げたそうとしている者もいたが、後で攻撃されると厄介なので、ここで沈めておく。

「サイクロン！」

クレインは突風や巨大な竜巻で、傭兵を吹き飛ばしている。

地面に激突する際に、少し風のクッションを作ってあげているのは、クレインの優しさだろう。

フレイムジェベリン  
「炎の槍！」

フィーラは大量の炎の槍を傭兵に向かって飛ばしている。戦場に来ている時点で死の覚悟は持っている。

そう考えてるフィーラは、一人、また一人と焼き尽くしていく。

「フィーラに目を付けられたら逃げられないよね……」

実際、全員逃げようと背中を向けたところに炎の槍を食らっている。戦場で背中には向けるな、なんてよく言ったもんだよね。

そんな風に周りを観察しながら視界に入った傭兵を殴っていると、いつの間にか全員倒していた。

「クレイン、フィーラ、僕たちは先に行くよ」

「キュルケ姉たち待たなくて良いのー？」

「うん。大丈夫だから」

「キュルケとタバサが居れば大丈夫でしょ。あのキザ男の名前は覚えてないけど」

「あはは……」

どうやらギーシュはフィーラにとってどうでもいい存在だったようだ。

それにしても、代用の土メイジが現れたってことは、他にも色々と変わっている可能性がある。

さっさとサイトたちに合流したい。

「クレインはフランを、フィーラはリオを呼んで」

「わかったー」

「ちよつと待ちなさい」

クレインはそう言つて口笛を吹き、フィーラは口を開けたまま固まつた。

何をやってるんだろう？

そんな疑問を抱いていると、フランとリオがバツサバツサと羽ばたいて来た。

「フィーラは何やってたの？」

「あなたたちには聞こえない高音を出していたのよ」

そういえば人間の耳は高すぎる音は聞こえないんだっけ？

じゃありオは人間より聴覚がいいのだろうか？

その辺は専門外だからよくわからないなあ……。

「まあいいや。それじゃあ、アルビオンにレッツラゴー」

俺はワルドに負けた。

だけど、次はもっと強くなって勝つ。

だからここから生きて帰らないといけねえ。

そうしないと、ルイズも守れねえ。

そんなことを考えながら、棧橋を進んでいると、突然白い仮面の男が現れた。

「ルイズ！」



俺は剣を引き抜くと同時にルイズに怒鳴った。  
ルイズが振り向くと、男はルイズを抱え上げた。

「きゃあ！」

男はルイズを抱えたままジャンプして、地面に落ちていく。  
俺はどうすることも出来ず、立ちすくんだ。

するとワルドが、魔法で仮面の男を攻撃した。

男はルイズから手を離し、階段の手すりにつかまる。

ワルドは落下していったルイズを追いかけて抱き留めた。

仮面の男は体を捻って階段の上にあがり、再び俺の前で杖を構えた。  
男は何かの呪文を詠唱し、杖を振った。

何の魔法が来るのだろうか？

そう思った時、デルフが叫んだ。

「相棒！構えろ！」

俺が身構えた瞬間、空気が震えた。

男の周辺から稲妻が発生し、俺の右腕に絡みついた。

「ぐああああああ！」

痛みと驚きで、俺は意識を失った。

僕たち三人は、今空賊の船を襲撃している。

というか、乗り込んでいる。

「皆さんこんにちわ。そしておやすみなさい」

僕たちに気づいて集まってきた船員を、片っ端からスリープクラウドで眠らせる。

しばらくすると、僕たちの周りに起きている人は居なかった。

「たしか、この船はウェールズ皇太子が乗っているのよね？」

「そうだよ。それじゃあ早速会いに行こう」

僕たちは船内に入り、部屋を一つ一つ確認していく。

そして、後甲板の上に設けられた部屋を空けると、三人ほどの男が魔法放ってきた。

ウィンドアーマー  
僕は風の鎧を纏っていたので、魔法は全て弾かれた。

そして、魔法を放った男たちを眠らせる。

「さてと、手荒な真似をして申し訳ありません。ウェールズ皇太子」

僕は部屋の奥で座っている一人の男にそう声をかける。

男は僕の言葉を聞いて、鼻で笑った。

「ウェールズ皇太子？俺は空賊の頭だぜ」

「そのカツラを外して、付け髭を取ってから同じ台詞を言って貰えますか？」

「！？どうやら本当に気づいているようだね」

男は突然喋り方を変え、カツラと髭を取った。

するとそこには、金髪的美青年が居た。

やっぱりこの船はウェールズ皇太子を乗せた船だったようだ。

「それで、私をどうするつもりかな？」

「勘違いしないで下さい。僕たちは王党派です」

「信じられないね。この状況で王党派の味方をする者はまずいない」

原作でもそんなようなことを言っていたが、その時は王女の密命とか言って信じさせていた。

しかし、それはルイズが受けた命であって、僕には関係ない。

「僕たちが貴族派なら、あなたは今息をしませんよ？それに、船員だって殺します」

「……たしかに、それはそうだね。しかし、私を生かして捉える命令を受けている可能性もある」

「だったらすぐに拘束しますよ。実力差は圧倒的なんですから、まどろっこしいことをする必要も無いでしょう？」

「……わかった。一応は君たちを信じよう」

結構状況がまずいだけあって、警戒心が強い。

これはまだ完璧に信じられてはいないかな。

まあ今はそれでもいいか。

「ありがとうございます。さしあたって、一つ気をつけて欲しいことがあります」

「なんだい？」

「もうすぐ、アンリエッタ姫殿下の密命を受けた大使がやってきます。その中にいる、ワルドという男に気を付けて下さい」

「理由は？」

「貴族派の可能性があるからです」

まだ完璧にそうだと決まったわけではないが、用心するに超したこ

とはない。

もしもの場合には、知っておいて貰わないと困る。

「何故君がそれを知っているんだい？」

「ちよっとした情報網がありまして。まだ疑惑の段階ですので、叩くことも出来ません」

「そうか。それと、一つ聞きたいのだが彼女たちは？」

ウェールズ皇太子は、クレインたちの方を見てそう言った。

「二人は僕の妹です。自己紹介がまだでしたね。ゲルマニア貴族の、ヴァイス・ド・アンダルージャです」

「アンダルージャ？どこかで聞いた事が……」

「爆水、というのが有名ですね」

「！！君がああ爆水なのかい！？」

「ええ、まあ」

ウェールズ皇太子は驚愕の目で僕を見る。

次に、クレインとフィーラに視線を移した。

「私はー、クレインって言うんだー」

「私はフィーラ」

「君たちの二つ名は？」

「風妃ー」

「獄炎よ」

それを聞き、またしても驚く。

どうやらかなり衝撃的だったようだ。

「そうか……。彼らが手も足も出なかったのはそういうことか……」

「僕たちが眠らせた人たちですね？もうすぐ起きるはずですよ？」

結構手加減をしたから、そろそろ起きるはずだ。

僕がそう考えた直後、部屋に五人ほど男が入ってきて、僕たちを攻撃しようとした。

しかしそれを、ウェールズ皇太子が止めた。

「彼らは味方だ。全員元の配置に戻れと伝えておけ」  
「はっ！わかりました」

皇太子の説明を聞いて、男たちは出て行った。  
これで、いきなり襲われることは無いだろう。

「君たちには開いている部屋を用意するから、ゆっくりしてくれ」  
「ありがとうございます」

僕たちは空き部屋に案内され、その中でゆっくりすることになった。

そして、しばらく時間が経つと、一隻の船が見えた。

恐らくあれが、サイトたちの乗っている船だろう。

僕たちの乗っている船は、サイトたちの乗っている船に近づき、鉤付きのロープを引っかけ、それを伝って向こうの船に乗り込んでいった。

そして、向こうの船の船員と、サイトたちを連れて、戻ってきた。

「クレイン、フィーラ。皇太子が正体を明かした後に合流するよ」  
「何ですぐ行かないのー？」

「ルイズたちが王党派だつてことを証明しなきゃいけないからね」

僕はさっき皇太子に教えたが、それだけでは信じ切れないだろう。  
フィーラはすでわかっていたようだ。

「もう少し待機だよ」

そして、船の中の喧噪が収まった頃を見計らって、僕たちはさきほどの部屋に向かった。

部屋の前に立って少し話を聞くと、すでに手紙は渡したみたいだ。僕は、思い切りドアを開けた。

「遅かったね、サイト、ルイズ、子爵」

僕は、友人に挨拶するように、片手を上げて声をかけた。しかし、三人は呆気にとられている。

「どうしたの？」

「何でヴァイスが？」

「そりゃあいち早く傭兵を倒して竜で飛んで来たからだよ」

「あなた私たちを追い越したの？」

「そうだよ？キュルケたちなら心配ないよ」

「君は一体何者なんだ？」

「通りすがりの学生です」

三人の問いに、それぞれ答えていく。

最後はちよつと適當。

「まあいいじゃん。ニューカッスル城に行くんでしょ？僕たちが居て困ることはないよ」

「それもそうね。それにしても、あなたたちはただの学生とは思えないわ」

「たちってー、私とフィーラ姉も含まれてるのかなー？」

「そうですね」

まあ、ただの学生ではないしね。

僕は転生者でクレインは吸血鬼、フィーラは悪魔だし。

ノイは……最近神に近づいてるからなあ……。

それにしても、ニユーカッスル城までどれくらいかかるんだろう？

## 第27魔（後書き）

蛍夜「夏休みは終わった……」

ヴァ「これで更新速度も一気に落ちるね」

ノイ「すでにかなり落ちてるけどね」

蛍夜「明日はテストか……」

ヴァ「蛍夜は軽く鬱入ってるから、無視しよう」

ノイ「そうだね。それにしても、イルの人気は凄いね」

ヴァ「そうだね。作者も、出す方向で考えてるみたいだよ？」

ノイ「メインは私たち四人だけど、イルが出てきたら一人増えるね」

ヴァ「うん。そして誰かの影が薄くなると思う」

ノイ「その辺は作者次第でしょ？」

蛍夜「コラボを考え中」

ヴァ「いきなり復活して何!？」

蛍夜「畑山香樹さんの、『四人の魔法使い』って作品とのコラボを考えているんだが、とりあえずアルビオン辺が終わるまでは書けないー、と思って」



ノイ「ご存じない方は、是非読んでみて下さい」

ヴァ「ノイが宣伝してる!？」

ノイ「いや、私も向こうの人と会ってみたいんだよね」

蛍夜「まあ、いずれやるさ。ということで、『四人の魔法使い』を知らない人も楽しめるよう努力しようと頑張りますので、楽しみに待っていて下さい!」

ノイ「自分でハードル上げて大丈夫？」

ヴァ「どうせ何も考えて無いよ」

蛍夜「うるせえ!」

## 第28魔（前書き）

大分遅れてすいません。

## 第28魔

僕、クレイン、フィーラの三人は今、ニューカッスル城の一室にいる。

サイトたちと合流してからは、特に問題もなくこの城についた。今はルイズが、アンリエッタ姫の手紙を受け取りに行っている。

「ヴァイス兄ー、暇だよー」

「暇と言われてもどうしようも……、あ！　そういえばノイが造ったゲーム機を持って来てたんだった」

ポケットから小型ゲーム機を取り出しクレインに渡す。

クレインのお気に入りには、テトリだ。

音を消してせつせとボタンを押しているクレインを見ると和む。

「ヴァイス、そろそろルイズの話も終わったんじゃない？」

「そうだね。それじゃあ行こうか。クレインは大人しく待っててね」  
「はい」

ゲームと格闘しながらクレインは答える。たぶんちゃんと聞いて無いただろうな。

そんなクレインを置いて、僕とフィーラはウェールズ皇太子の居室へとやって来た。

ドアを、コンコン、とノックして、部屋に入る。

「おや、君たちかい。なんの用だい？」

「ウェールズ皇太子、生きたいとは思いませんか？　生きてアンリエッタ姫に会いたいとは思いませんか？」

僕とフィーラを見て用件を尋ねてきた皇太子に、こちらから質問をする。

質問を質問で返すのはよくないが、今回は仕方無い。

「さきほど、ラ・ヴァリエール嬢が同じようなことを聞いてきたよ。私は亡命する気は無い。この戦いで、名誉を守って死を遂げる」

「あなたを待っている人がいます。同じ貴族として、名誉ある死にこだわることもわかりますが、それで愛する人を置いて行ってもいいのですか？ あなたが死んでしまつては、もうあなたの手で姫を守ることは出来ないのですよ？ そしてもし、姫に何かがあつた時、あなたは後悔しませんか？ どうして側で守れなかつたのだらうとアルビオンはいずれ必ず蘇ります。ここで敗北しても、また戦つて勝てばいいではありませんか。しかし、あなたの死は、取り返しのつかないものです。あなたの命は、一つしかないんです。それでも、この戦いで死を選びますか？」

僕の言葉を聞いた皇太子の顔に、若干戸惑いが見える。

柄にもなく長々と説教じみたことを言つてしまった。しかし、たしかに皇太子の心を動かせたようだ。

そう、アルビオンは奪い返せばいい。転んだからといって、立ち上がれない訳じゃない。転んだのなら、より強くなって立ち上がれば良い。

「よく、考えて下さい」

最後にそう告げて、僕とフィーラは部屋を出た。

フィーラはなにもしていなかつたように見えるが、実は違う。

皇太子の中に押し殺されていた、アンリエッタ姫に会いたいという感情を大きくしていたのだ。

無理矢理植え付けた感情ではなく、本来ある感情を解放した。

これできつと、皇太子は亡命を考えてくれるだろう。それでもダメなら、強硬手段を使うことになるけど。

「大丈夫よ、ヴァイス。ウェールズはかなりアンリエッタに会いたかったみたい。押し殺せるレベルを超えていたわ。それを私が解放したんだもの、絶対にアンリエッタに会いに行くわよ」

「そうだよね……。それと、呼び捨てはやめた方が……」

フィーラは誰かを敬ったりしない。

そのため、基本的に様付けとかはしない。

さすがに立場が上の人の前では敬語を使ってもらうが。

そうして、僕たちは部屋に戻り、パーティまでの時間を潰していた。

パーティの時間になり、僕たちは城のホールにいた。

王様がなにかを喋っているが、そんなものは右から左へと流れている。

今僕が考えるべきは、皇太子をどうするかと、ワルドをどうするか。

恐らく、ワルドにはあとで接触されるだろう。

結婚式がうんたらかんたらと伝えにくるはずだ。

「ヴァイスくん、ちょっといいかな？」

ワルドは予想通り、

結婚式のことを話してきた。

僕はそれに、辞退しますこたえた。

僕は結婚式には出ない。理由は簡単だ。僕がいたら、ワルドが行動を起こさないかもしれないからだ。

自分よりも強い相手がいるなかで、皇太子を殺すなんて真似はしないだろう。

ゆえに、僕は結婚式に参加しない。

パーティも終わり、各自部屋に戻り就寝する。  
しかし、僕にはまだやるがあった。

こっそりと部屋を抜け出し、皇太子の部屋へ侵入する。

そして、驚かさないように起こす。見張りもいたが、眠って貰った。  
僕は皇太子の目を覚まさせて、明日の計画を伝えた。

皇太子は随分迷ったが承諾した。そして僕は、自分の部屋に戻り眠りについた。

翌日、僕はこっそりと結婚式会場に忍び込んでいた。

周りには誰もいない。フィーラとクレインは、すでにイーグル号に乗り込んでいる。

そして、皇太子がワルドとルイズの式を進行している。

しかし、ルイズは突然、ワルドとの結婚がいやだと言いだした。

皇太子はそれを聞き、ワルドの肩に手を置くが、ワルドはそれを振り払い、狂気に満ちたような顔に豹変した。

もう一度止めようとした皇太子を、ワルドは突き飛ばす。

これには皇太子も怒り心頭。ワルドに向かって、魔法を使うぞ、と脅しをかける。

するとワルドは、目的の一つを諦めると言った。

「この旅における僕の目的は三つあった。一つはルイズ、君を手に入れることだ。しかし、それは叶いそうにない」

「当たり前じゃないの！」

ルイズは激高したように怒鳴りつける。

しかしワルドは、変わらぬ様子で話し続ける。

「二つ目の目的は、君のポケットに入っている手紙だ」

それを聞いたルイズはハツとした。

皇太子もそれがどういうことか気づいたようで、杖を抜く。

しかし、ワルドは素早く杖を引き抜き、呪文の詠唱を完成させ、皇太子の胸に青白く光る杖を突き出した。

「三つ目……、貴様の命だ。ウェールズ」

それで終わったと確信していたのだろう。

本来ならそれで終わっていただろう。しかし、この世界は普通じゃない。

「なに勝ち誇ってるんですか？ 子爵？」

そう喋ったのは、ワルドの杖を片手で押さえている皇太子。いや、僕だ。

僕はクレインの精霊魔法により、姿を皇太子に変えていた。風系統のフェイスチェンジ、その強化型のようなものだ。体格から声まで、全てを皇太子と同一にした。

「ここからが、楽しい戦闘の始まりですよ」

そう笑った僕の顔は、皇太子からヴァイス・ド・アンダルージャのものに変わる。

体格や声、全てが元に戻り、僕の真の姿が現れた。

僕は押さえていた杖を弾き、ワルドの懐に入る。

そして、鳩尾を思い切り殴り付ける。  
当然

「限界突破！」

「ガハアッ！」

百%だ。

数メートル吹っ飛んだワルドは、地面をゴロゴロと転がる。  
そしてよろよろ立ち上がり、僕を睨みつける。

「やはり、君が邪魔をするのか……」

「キャラが崩壊してくれてると助かったんだけどね」

ワルドは敵に回しても脅威ではないが、味方に付けければ頼りになる  
だろう。

この世界のワルドも少しは壊れているみたいだけど、まだ聖地への  
執着を捨て切れていないのか。

「子爵、一応聞きますよ。どうしてレコンキスタに？」

わかりきったことだ。

それでも、一応聞いておかなければならないだろう。

果たして、どう答えるのか……。

「そんなもの……、少女のために決まっているだろうー！」



## 第28魔（後書き）

蛍夜「というわけで、とうとう書きました」

ヴァ「短いけどね」

ノイ「終わり方も意味わかんないし」

蛍夜「最近スランプ気味……」

ヴァ「幼女って……」

ノイ「作者の趣味全開だね」

蛍夜「違う！俺は小さい子が好きただけだ！」

ヴァ「ロリコン……」

ノイ「ペドフィリア……」

蛍夜「そういう意味じゃなくてだな……。説明が難しい……」

ヴァ「捕まらないでね」

ノイ「私たちの出番がなくなるから」

蛍夜「出番ていつか更新すらされなくなるぞ！」

ヴァ「はいはい、それじゃあまたいつか」

ノイ「更新遅いのは目を瞑ってね」

蛍夜「……頑張ります」

## 第29魔

「本当にこれで良かったのだろうか……」

イーグル号に乗ったウェールズは、ヴァイスの顔と声でそう呟く。  
ヴァイスがウェールズの代わりをし、ウェールズがヴァイスの代わりをしているのだ。

その結果、ウェールズは誰にも気づかれることなくイーグル号に乗ることが出来た。

「良いに決まってるでしょ。ヴァイスを信じなさい」

ウェールズに向かってそう話すのは、フィーラ。

フィーラとクレインは、本当にイーグル号に乗っていたのだ。

つまり、今現在ワルドと戦えるのはヴァイスのみ。

肝心のサイトは、目に違和感があるような素振りを見せない。

ヴァイスがワルドと戦っていることで、ルイズに危険が及ばなくなつたからだろう。

「君は、彼を信用しているのだね」

「ヴァイスは私の主人で兄よ？ 当然でしょ」

「私もだよー」

ウェールズとフィーラの会話に、クレインが割り込む。

色々と省略されているが、自分もヴァイスのことを信じていると言いたいのだろう。

そんな二人を、ウェールズは羨ましそうに眺める。

「私は、アンリエッタに会いたい。しかし、それはアンリエッタに

も迷惑が掛かる」

「攻め込まれる、とかでしょ？ 心配いらないわよ」

ウェールズが心配しているのは、自分がトリステインに亡命すること、それを口実にレコンキスタがトリステインを攻める可能性が高いからだ。

しかし、フィーラはそんなことお構いなしだ。

その理由は、当然自分の強さ、そしてヴァイス、ノイ、クレインの存在があるからだ。

「今は黙って逃げるのよ。あの姫様と会うのもしばらくは我慢してもらおうよ」

「ああ、不要な混乱は避けなければならない」

ウェールズがアンリエッタに会うのは、この戦いのほとぼりが冷めてからの方がいい。

トリステインにウェールズが逃げたという確証がなければ、レコンキスタも簡単には攻め込むことができないからだ。

「彼を、信じよう……」

そう呟くウェールズの瞳には、生きるという強い意志が宿っていた。

僕は今非常に困っている。

凄いシリアスな展開だったのに、急にワールドが少女とか口走ったからだ。

さつきまで怒り心頭だったルイズも、ポカーンとしている。

「え、ええと、一つ確認しますけど、聖地については……？」

「聖地など、幼女の魅力と比べれば月とすっぽん、いや、幼女と熟女だ！」

子爵は、とってもわかり辛い例えをドヤ顔でかましてくれた。

いやいや、少し落ち着け。………そういえば子爵は、まだルイズを攻撃したりしていない。

え？ まさか本当に？

「あ、あの、どうして幼女のために、レコンキスタに？」

「レコンキスタに入れば、幼女にモテモテとクロムウエル様に言われたからだ」

ダメだこいつ、何とかしないと。

しかし、本来は有能であるワルドがそう簡単に騙されているのは怪しい。

クロムウエルは、恐らくなにか、それを信じられるようなものを見せたはずだ。

そして、恐らくそれはシェフィールドこと、ミヨズニトニルンが絡んでいる。

となれば、答えは一つ。

「子爵、どうしてクロムウエルを信じるのですか？」

「僕はクロムウエル様が幼女に慕われているのをこの目で見た！」

間違いない。それは、スキルニルだ。

対象の血を与えると、対象とそっくりに変化する。

それを使って幼女の姿をしたスキルニルを、クロムウエルに懷いて

いるように見せたのだ。  
だとすれば、突破は可能。

「子爵は騙されています。スキルニルというマジックアイテムをご存じですか？」

「それなら知っているよ。血を与えることでその人間そっくりになるんだろう？　それがどう　ハッ！」

さらりと受け流そうとしたワルドの顔が驚愕に染まる。  
自分が騙されている可能性に気づいたのだろう。

「子爵はとても有能です。そこに目を付けられて、騙されているのです」

「し、しかし、あれが嘘だという証拠はない！」

ワルドは混乱しながらそう言うが、たしかにその通りだ。

確実に嘘だと言えるが、それを証明出来ない。

ワルドはそれに縋っているのだろう。

「現実を見るよっ！　沢山の人がレコンキスタに苦しめられているんだぞ！　それは、小さい女の子だって例外じゃない！　そんな組織の人間に、しかもそのトップに、純粋な幼女が懐くと思ってるのか！　大馬鹿野郎っ！！」

「っ！　だ、だが……」

「本当はわかってるんだろ？　あいつらが腐ってるってことを！　聖地奪還も、幼女に懐かれるというのも嘘だ！　クロムウエルは、富と名誉にしか興味がない！　幼女を愛するあんたなら、本当はわかってるんだろ！？」

「……本当は、どこか信じられなかった……。それでも、僕は幼女に懐かれるという誘惑に負けてしまった。それで結果、このアルビ

オンの幼女を苦しめていることも考えずに……。ヴァイスくん、目が覚めたよ。僕は自首する」

そう話すワルドは、どこかスッキリした表情だった。今までも、心のどこかで疑問に思っていたのだろう。

それにしても、柄にもなく汚い言葉遣いでくさい台詞を言っちゃったかな。

「子爵、あなたはこれまで過ちを犯してきた。しかし、今はそのことを水に流しましょう」

「なにを言っているんだい？ 君は、僕のことを許すというのかい？」

「はい。あなたが出来る償いは、自首することではなく、この世界を正すことです。具体的に言います。子爵にはスパイとして引き続きレコンキスタで動いて欲しいのです。そうすることで、レコンキスタを倒し、ハルケギアに平和をもたらす。この償いを、子爵にして欲しいのです」

ワルドは過ち、などと言っているが、そこまで外道なことはたぶんしていない。

この世界のワルドは、どこか純粹に思える。だからこそ、僕はワルドに手伝ってほしい。

「……わかったよ、ヴァイスくん。一緒に戦おう、この世界の不条理、そして幼女の敵と。僕らは仲間だ」

「子爵、いえ、ワルド。僕たちはもう対等な友人であり仲間だよ。一緒に頑張ろう」

そう言って、僕は右手を差し出す。ワルドもそれに応えて、僕の手を握った。

今ここに、強力な味方が誕生した。

「ちょ、ちよつと待ってよ！　ワルドはトリステインを裏切っていたのよ！」

円満に解決しようとしていたところに、ルイズが割って入った。どうやら国を裏切っていたワルドを許せないようだ。

「ルイズ、本当にすまなかった。しかし僕は、その罪を償うためにも、レコンキスタに戻るよ」

「そんなの許されるわけないでしょ！　私が今ここであなたを倒すわ！」

ルイズはそう言っ、杖を振り上げる。

ワルドはそれを避けようと、止めようとしめない。

ルイズへの罪滅ぼしとして、その魔法を受ける気なのだろう。

しかし、ルイズが杖を振り下ろす直前、一筋の線がルイズの杖を破壊した。

「たしかにワルドは一度裏切ったよ。それは許されないこともかもしれない。だけど、ワルドは罪を償おうとしているんだ。それを止める権利は、君にはない」

僕は小さな杖を構えて、ルイズにそう言い放つ。

ルイズの杖を貫いたのは、僕のウォーターライフだ。

これから先レコンキスタを潰すに当たって、ワルドは必要な人材だ。それを邪魔しようと言っのなら、ルイズにはお仕置きが必要だ。

「ハッキリ言うけど、僕は主人公を助けるために学園に来たわけじゃないから」



「な、なにを言ってるの？」

ルイズは僕の口から出てきた主人公が、誰をさしているのかわからないようだ。

そして、今言ったように、僕の最優先の目的は、ノイやクレイン、フィーラやエルザにお母さん。つまり、家族が平和に暮らせる世界を作ることだ。

その中に、ルイズとサイトは含まれていない。

知り合いのよしみとして、二人の力になるのはやぶさかじゃないが、僕の目的を邪魔するのなら容赦はしない。

ちなみに、優先度で言わせて貰えば、僕の家族（フランやアーリア家の人間も含める）の次はキュルケとツエルプストー家。その次がサイトとタバサとシエスタを含めたメイドさんやマルトーさん。そしてその次が、ルイズとギーシュとモンモランシーだ。

図にするとこうなる。

家族>>>絶対的な壁<>>>キュルケとその家族>  
 >>>大きい壁<>>>サイトやタバサ、シエスタやマルト  
 ーさん>>>>超えられない壁<>>>ルイズたち。

わかつたかな？

僕の中ではルイズの重要度があまり高くないことが。

「ルイズ、ここは水に流そうよ？　僕も同級生と死闘を繰り広げるのは嫌だし」

「……こ、今回だよ。その代わり、ワルドはしっかりとスパイをするのよ」

「ああ、わかってるさ」

僕が軽く飛ばした殺気に当たり、少し怯えたルイズが渋々承諾する。実際、僕とルイズ（サイトを含めた場合でも）が戦っても、死闘どころか一方的な虐殺になるだろう。

あまりそういうことはしたくない僕としては、聞き分けの良いルイズを褒めて上げたいところだ。

そうして、話しがまとまったところで、地面が、ぼこりと盛り上がった。そして、中からモグラが出てくる。その後に、ギーシュやキウルケが続く。

「丁度いいや、さっさと穴を引き返して戻ろう」

僕はキウルケたちにあまり説明をせずに追い立てる。

そして、最後にワルドと話しをする。

「ウェールズ皇太子は取り逃がしたことにして。一つも作戦は成功してないけど、たぶんワルドが見限られるようなことはないから。

それじゃああとは任せたよ」

「ああ、うまくやっておくよ」

それを聞いて、僕も穴へと潜る。

そして、キウルケやルイズと共に、シルフィードに乗ってトリステインへと向かった。

## 第29魔（後書き）

蛍夜「序盤シリアスのつもりだったけど、幼女とか言ってる雰囲気  
気ぶち壊しだな」

ヴァ「まったくだよ……。僕も、この状況でこんなくさい台詞で  
いいのかな？ と思っただし」

蛍夜「ワールドをキャラ崩壊させた時点で真面目に書く気は無かった  
んだが、仲間に引き込むためにはそれ相応の説教が必要だからな」

ヴァ「でも、あの説教だけで陥落したとは思えないんだよね……」

蛍夜「ああ、それはお前を元から少し信用していたからだ」

ヴァ「というと？」

蛍夜「お前はライトノベルみたいなものを書いているだろ？ しか  
もロリ系のも。それに、クレインにも純粹に懐かれている。学院で  
もそうだったのだから、クレインをスキルニルと疑う余地もない。  
つまり、お前はロリコンにとって神のような存在と言っただけだ」

ヴァ「な、なるほど……。序盤であんなにクレインと絡んだのは、  
このための伏線だったんだ……」

蛍夜「いんや、たまたま」

ヴァ「見直して損したよ！」

蛍夜「まあいいじゃん。それではまた次回！」

ヴァ「さようなら」

### 第30魔

現在僕はフライを使って空を飛んでいる。  
割と全力で飛んでいるため、速度は結構な速さだ。

あの後、僕はルイズにあるお願いをした。

内容は、『ワルドは裏切り者で、皇太子は死んだということにしてほしい』ということだ。

ルイズは不満そうな顔をしていたが、何とか聞き入れて貰い、僕は途中でシルフィードから飛び降りた。

そのまま着いていてもいいが、あまりアンリエッタとは遭遇したくない。

そんな理由で、僕は今ゲルマニアにあるアンダルージャ家に向かっている。

一通りやることが終わったら、実家で合流しようと、クレインとフィーラに伝えてある。

恐らく二人も、途中でイーグル号から降りて、リオとフランに乗って実家に向かっているだろう。

サイトは今回見せ場無しで可哀想だが、まあ仕方無い。

そんなわけで、かれこれ数時間空を飛び続け、アンダルージャ家に到着した。

国境を越える時などは、当然ウォーターミラージュを使ったので問題は無い。

ゆっくりと庭に降り立ち、辺りを見回す。

クレインやフィーラが先に来ていると思ったが、リオとフランの姿が見えないところから考えると、まだ来ていないようだ。

それはちよつとばかりラツキーだ。

お母さんことマチルダさんは、昔アルビオン政府を恨んでいた。今はそうだったことは水に流したと言っているが、突然アルビオンの王族が現れたらいい気はしないだろう。

僕はお母さんやティファニア、それからエルザや使用人の皆にそれを伝えるため、家に向かった。

扉を開けて中に入ると、色々な人が声を掛けてくる。

あらかじめ連絡をしないでいきなり帰って来たから、驚いているのだろう。

僕は皆に軽く挨拶をして、お母さんの部屋にやって来た。コンコンとノックをして、部屋に入る。

「なんだ、ヴァイスかい。どうかしたのかい？　いきなり帰ってくるなんて」

「ちよつと、伝えることがあって」

振り返って僕に気づいたお母さんが、不思議そうに尋ねてくる。

僕はそれに、真剣な顔つきで応える。

「実は、この家でアルビオンのウェールズ皇太子をかくまおうと思ってるんだ」

「へえ、そりゃ驚いた。それで、私に話してどうしろって言っただい？」

僕の言葉を聞いて、一瞬お母さんの纏う空気が変わる。

明確な恨みや憎しみではないが、あまりよく思っていないのはたしかだろう。

「もしお母さんが嫌だというなら、他のところでかくまうよ」

「……あんたはいちいち気が利くねえ。私のことは気にしないでいいよ。ただし、ティファニアにもそれを聞いてくれるかい？ あの子が嫌がるのなら、私は認めないよ。そんなこと言える立場でもないけどさ」

流石はお母さんだ、感情の制御がうまい。  
それに、ティファニアのことも考えている。

「それは大丈夫。元からティファニアにも聞くつもりだったから。それと、お母さんは僕たちのお母さんなんだから、なにを言ってもいい立場だよ」

「ハッ、言っじゃないか。あんたには敵わないねえ」

それで会話は終わり、僕は部屋から出た。  
お母さんの許可は取った。後はティファニアだ。  
僕はすぐにティファニアの部屋に行き、ドアをノックして入る。

「あれ、ヴァイス？ いつ帰って来たの？」

「ついさっきだよ。それで、ティファニアに話したいことがあるんだ」

「話したいこと？」

僕はティファニアに、ざっくりとした説明をして、お母さんが言っていたことも伝えた。

ティファニアはそれを聞いて、なんの迷いもなく答えた。

「私は構わないよ。これで、お友達が増えるわ」

「そっか、ありがとう。それじゃあ僕は、エルザのところに行くから」

ティファニアの部屋を出て、エルザの部屋に向かう。

するとその途中、一瞬物凄い悪寒が背中を走った。振り返ってみるが誰もいない。

気のせいかと思い、また前を向いて歩き出した。

エルザの部屋に到着し、ノックをして部屋に入る。

「あ、ヴァイスお兄ちゃん！ おかえり！ そして頂きます！」

「え？ っ！」

エルザは振り返って僕を見るやいなや、突然飛びついてきて首筋に噛みついた。

僕は予想外の出来事に、呆然として立ち尽くす。

そのままの状態で少し時間が過ぎると、満足したのかエルザは牙を抜いた。

「おいしかった！」

「いやいやいやいや！ 痛いから！ いきなり噛みつかないでよ！」

未だに僕に抱きついていているエルザを引きはがし、一息吐く。

全く、困ったもんだよ。

「それで、なんの用で帰って来たの？」

「何事も無かったかのように話を進めるの止めてくれる！？」

しかし今更ググチ言っても仕方無いので、僕はお母さんとティファニアに話したことをエルザにも話した。するとエルザは、まさかの発言をした。

「王族の血とヴァイスお兄ちゃんの血はどっちがおいしいかな？」

「うおーいっ！ それはまずい！ そ、そうだ、僕の方がおいしい



から、絶対皇太子のは飲んじゃダメだよ？ いい、わかった？」

なんてことを言い出すんだこの娘は！

先が思いやられるよ、やれやれ。

「もう、ヴァイスお兄ちゃんつてば独占欲が強いんだから！ 私が他の男の血を飲むのが許せないなんて！」

「言って無いよ！ 断じてそんなことは言って無いよ！」

エルザの相手をするのは本当に疲れる。

第二のノイだ。夜中に襲って来たりしないだけノイよりマシだけど。

「そういうことにしといてあげる。それじゃあ、その、ウェルソン？ 皇太子の血は飲まないよ」

「ウェルソンじゃなくてウェールズだよ」

「そうとも言っね」

もうやだ、この部屋。

僕はこれ以上絡まれるのもゴメンなので、さっさとエルザの部屋から出る。

しかし、ここに来て、ようやくさきほどの悪寒の正体がわかった。

「ヴァイス！ 逃げなさい！」

「ヴァイス兄、早く！」

なぜかフィーラとクレインが切羽詰まった様子でこちらに向かって走ってきていた。

僕は、ああ二人も着いたんだ、と言おうとして硬直した。

突然二人の体を、縄のロープがグルグルと締め付けたのだ。

二人は身動きが取れなくなって、転んでしまった。

そしてその縛り方が、なぜか亀甲縛りと猿ぐつわだった。

「ええー……」

なにが起きたのかわからない。

というかフィーラとクレインならそれくらい簡単に抜けられるんじゃない？

「フフフ……お兄ちゃん、みいつけた」  
「ひっ！」

気がつくと、クレインとフィーラが走ってきた後方から、ノイが縄のロープを持ってこちらに歩いて来ていた。

なんで！？ ノイには実家に集まることを教えてないのに！？

「お兄ちゃん、よくも騙してくれたね……。あんな甘い言葉を囁いて……」

「ちょ、ちょっと待とうよ！ ほら、今回は仕方無かったっていうかさ！ ね？」

「フフ……フフフフフフ……」  
「むごっ！？」

ノイの持っていたロープが突然体に絡みついてきた。

すると、なぜか魔法が使えなくなり、身体能力も劇的に低下した。クレインとフィーラが抜け出せないのはそのせいだ！

「むごむごむごっ（落ち着いて）！」

「さあ、お兄ちゃん、お仕置きの時間だよ」

「むごおおおー……っ……っ……」

結局僕は暴力的制裁を喰らい、フィーラとクレインは、ノイに陵辱の限りを尽くされたそうなの。

なにをされたか聞いても、全く答えてくれなかった。

ちなみに、影が薄くなっていたウェールズ皇太子はバッチリアンダルージャ家で保護したよ！

### 第30魔（後書き）

蛍夜「というわけで、アルビオン編も一段落つきました」

ヴァ「大変だったね……」

ノイ「私は置いて行かれたしね」

蛍夜「そんなわけ、次回はコラボです！」

ヴァ「お相手は、畑山香樹さんで、作品は『四人の魔法使い』です！」

ノイ「知らない人は少し読んでみた方がいいかも」

蛍夜「まあ、読んでなくても楽しめるように頑張るさ」

ヴァ「自分でハードル上げたね。それより、『四人の魔法使い』と  
いうのは、一次創作のオリジナル作品なんです」

ノイ「二次創作と一次創作のコラボって結構無謀だよな？」

蛍夜「ああ、だからシリアスで行く気は皆無。完全にギャグにするぞ。せいじゃ作品紹介

『いつも通りに学校へ向かっている俺こと柊夏哉と、花街香苗と、  
天雲沙鳥の三人。その道中に一人の女の子が倒れていた。その  
子はやつかいにも俺にしか見えない。しかも、なんと異世界から  
来たと言うではないか。かくして、異世界から来た少女は俺たち

の平凡な生活をどのように変えてくれるのか！？ ……つてどこの漫画だこれ』

というわけです」

ヴァ「それでは、皆さんまた次回！」

ノイ「さようなら」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2060u/>

---

義妹ハーレムを作った少年

2011年10月10日12時42分発行